千葉いまむかし

No. 5

1992.3

目次

千葉案内……一
千葉市勢一覧……一五
明治四十年千葉町中心街家並概念図……北島　隆……二五
寒川沖漁法……長谷川　進……五七
犢橋村誌……六五
古代寺院を建てる
「千葉市小食土町小食土廃寺説明板製作」……村田　六郎太……七七

表紙写真「千葉本町通り」郁文堂発行の絵ハガキ（八七頁参照）。

千葉案内

（大正十年七月調査「千葉市街実測図」の裏面）

≪編者注≫収録にあたり、句読点の一部・誤字を改め、漢字は常用漢字表などによったが、かなづかいは原文のままとした。なお、ルビは旧かなづかいで繁雑なため省略したところが多い。

千葉の沿革

千葉市は東京から十里の東、袖ヶ浦を挟んで遠く富岳を西に仰ぐ、房総半島第一の大都会即ち千葉県の首府である、羽衣の伝説と共に猪の鼻山の老松は千歳の緑を湛へて、自ら千葉郷の昔を偲ばしめる。

「千葉」の地名は一千二百余年前、既に古事記の中に記されたが、其後一條天皇の永承年間に平良文の孫、上総介忠常の子常将が下総介に任ぜられ、此地に住して千葉を氏とし、其曽孫常重は猪鼻台上に居城を築き「千葉城」と称し勢威三州を圧したのである。之実に大治元年六月で今より七百八十四年の昔だが、当時の千葉は民家一万六千戸小路五百八十余を数へたと云へば、其殷盛驚く計りであった事も想像される。其後高倉天皇の治承年間に至り、時の城主常胤は源頼朝を助けて遂に天下を掌握せしめ、千葉氏は弥々栄へたが室町時代に及び、千葉家は一族権勢を争ひ、為に千葉城は勿論街衢（がいく）は概ね兵燹（へいせん）に焼かれ多年関東の豪族と称へられた千葉氏も衰頽に傾き、寛永十年六月十六日千葉介重胤は江戸に客死して宗統全く亡び徳川時代には此地僅かに千葉宿の名を止め、佐倉領に属して戸数七百六十、人口三千に満たぬ一漁村であった。享保の俳人成美は其旧址を弔ひ「若菜摘む人さへ見えず千葉屋敷」の一句を止めた。

明治六年千葉県庁を置かれ、夫れから裁判所や其他の諸官庁も出来、医学校を初め官公私立の各種学校、鉄道聯隊、陸軍歩兵学校、同教導聯隊なども設置され、現在戸数が六千六百余、人口三万二千に達して尚年々発展の趨勢を示し、大正十年一月一日市制を施いて千葉町を改め千葉市と称するに至り、人文頓に発達して市勢は新鋭の気漲り、千葉は実に往古の千葉に優るの千葉となったのである。

○内容と外観

（市の区画） 千葉市は千葉県の西海岸に位し、東南に丘

陵を負ひ西に袖ヶ浦を控へ、都川市街の中央を貫流して袖ヶ浦に注ぐ。八橋を架けて都川南北の連絡を取り、最も下流に在るものを大橋と称し順次上流に都橋、羽衣橋、吾妻橋、大和橋、旭橋、亀井橋、亀岡橋等多くは千葉家時代の旧名を存してある、昔は大和橋を中心に侍屋敷と町人屋敷の区画を定め、橋より北が侍屋敷、南が町人屋敷であったと云ふ、処が現今の千葉市は昔と異なり士農工商の住所差別を排し、元の千葉、千葉寺、寒川、登戸、黒砂の五ヶ町村を併せて一自治体と為し、千葉市と称して之を左の三十一区に分ち、旧町村名は其まゝ町名又は大字名に用ひて居る。

△本町一、二、三丁目△市場△吾妻町一、二、三丁目△通町△横町△南、北道場△上、下院内△旭町△長洲△片町△新町△新田△新宿△仲宿△下仲宿△下宿△五田保△向寒川△登戸上、中、下△登戸穴川△千葉寺△黒砂△千葉穴川《原史料では脱落》

（市役所）は長洲区の県庁前に在り千葉市の行政庁である。吏員は市長神田清治氏、助役小沢勝氏、収入役吉田吉太郎氏以下課長、書記、技術員等三十三名で市町村制実施より現今に至る迄自治体の首脳者は町長九名、市長一名の十代目で、市会議員は定員三十名で歴代町長及議員は左の諸氏である。

△町長　田村吉右衛門、秋元茂平治、鈴木重雄、鈴木太郎吉、松山文治、加藤久太郎、遠山重義、和田秀之助、神田清治△市長　神田清治

△市会議員　神谷良平（議長）、石塚正二（副議長）、斎藤三五郎、山谷藤三郎、長谷川仁太郎、古川興、和田秀之助、国松真三郎（以上参事会員）外山三郎、布施五兵衛、伊藤徳太郎、中村健之助、羽田喜惣治、山本政蔵、大野勝治、今井与志雄、塩田鹿蔵、伊藤沖、沢部恒三、武藤切次郎、田村六三郎、島崎留次郎、飛田良吉、武本為訓、清古平吉、稲坂善次郎、志方恵太郎、田中卯三郎、高梨鎮

（官公衙）　△市役所、県庁、地方裁判所、区裁判所、郡役所、税務署、警察署、郵便局、巡査教習所、蚕業予防事務所、度量衡検定所、衛生試験所、県農会、穀物検査所、県公会堂、監獄署、畜産試験場、県種畜分場、教育会、市営屠畜場

（学校）　△官公立　千葉医学専門学校、男・女師範学校、同附属小学校、千葉中学校、千葉高等女学校、市立小学校五校、教育会補習所、市立商業補習学校、幼稚園、△其他私立数校あり

（軍隊） 日本に一つの鉄道聯隊が椿森にある外に、陸軍歩兵学校教導聯隊、鉄道材料廠、衛戍病院とが作草部に、憲兵分隊が千葉駅前にある。

（銀行） 千葉県農工銀行、千葉割引銀行、第九十八銀行、川崎銀行支店、総武銀行、千葉貯蓄銀行

（会社） 千葉電燈株式会社、千葉瓦斯工業、コークス株式会社、千代田製粉株式会社、大橋堂製菓株式会社、千葉常設家畜市場、千葉質業株式会社、日東油脂株式会社、瀬尾信託株式会社、千葉證券株式会社、正隆株式店、製氷会社、千葉無尽株式会社其他

（新聞社） 千葉に本社を有する日刊新聞は新総房新聞社、千葉毎日新聞社、旬刊は千葉評論新聞社、千葉庶民新報、其他支局を有する東京新聞は

時々、国民、東京朝日、報知、万朝、やまと、中央、毎夕、読売、東京日々

（病医院） 県立千葉病院を始め、市立愛生病院、井上病院、神谷病院、田村病院、内田病院、仁山堂病院、北辰病院、伊藤医院、有吉堂、大熊医院、小澤医院、若米医院、仁洋堂医院、高梨医院、浩生堂医院、坂田医院、市川医院、内海医院、山越医院、塩谷医院、岩月医院、藤原医院、武藤歯科、沢本歯科、吉田歯科、真木歯科、大百堂医院、関歯科、佐瀬歯科、斎藤歯科、入野歯科、柴田歯科

（公私団体） 千葉市医師会、千葉市教育会、千葉市青年会、在郷軍人分会、千葉市消防組、千葉市農会、漁業組合、赤十字支部、愛国婦人会支部、武徳会支部、購買組合戊申会。

（弁護士） 高橋八郎、松野信次郎、鹿島千太郎、高橋栄蔵、一瀬房之助、羽生長七郎、杉山弥太郎、中川真太郎、古川与、信太武治、清古平吉、遠山重義、神田仲二、長戸路政司、阿部遜、青木勝見、松沢亀治郎

○産　業

（商業） 房総第一の都会として街の賑やかさは格別ながら商家櫛比日進月歩の有様で、特に学生の千葉、軍人の千葉、官吏の千葉には他に見られぬ活気がある。殊に近来千葉が好箇の避暑地として認めらるゝに至り、都人士の来遊するもの逐年多きを加ふるに従ひ、各種の商店競ふて開業し其繁昌は昔に比すべきでない。今試みに商業社の戸数を調べて見ると本業が二千六百五十二戸、副業が一千八百十九戸に達して居る。以て其殷盛知るべしである。

（工業） 工業又　輓近著るしき発展を告げ、従来のメリ

ヤス、澱粉、落花生、製材等各工場の外に最近には製粉、製紙等尚ほ幾多の工場も設けらんとして今や千葉の地は遠からずして工業の地に化せんとしつゝある。之が従業戸数は大小を合して九百三十六戸、産額約六十五万円に及んで居る。

（農業） 農産物の重なる種類は米、麦、菜種、粟、蕎麦、蜀黍、大豆、小豆、蚕豆、甘藷、馬鈴薯、里芋、大根、茄子、葱、白菜、黄瓜、其他で年産額五十万円以上、産地は千葉寺、黒砂、穴川、登戸等で従業戸数は本業四百二十八戸　兼業三百九十三戸此作付反別一千余町歩。

（漁業） 海の千葉、漁獲も甚だ少なくない。寒川から登戸一帯へかけて漁家軒を並へ専業者のみで二百四十九戸の六百二十三名を算する。此近海で漁れるものは黒鯛、鰯、鰡（ぼら）、鯵、烏賊、コハダ等を主とし特に蟹や蜊、蛤、牡蠣、など著るしき産額がある。

（千葉名物） 千葉へ来たお土産として綺麗な味のいゝ名物は粟漬、貝せんべい、栗羊羹、蜊、海苔、海苔羊羹、海老海苔兄弟巻、小魚貝類佃煮。

○交　通

（汽車） 東京両国橋駅から総武線に乗り約一時間余で「千葉駅」である。鉄道は此千葉駅で二線に岐れ東へ走る総武線は佐倉で分れて一は銚子へ、一は成田から佐原及び我孫子へ、南へ走る房総線は蘇我で分れて一は西海岸を房州へ行く北條松田線、一は東海岸へ出て勝浦又東金に達する。

（電車） 東京本所押上を起点として船橋に至る京成電車は延長されて千葉迄の開通を見る事となった。新設の停留場は、船橋大神宮下、谷津新田、津田沼、幕張、検見川、稲毛、千葉の七ヶ所で終点の千葉の停留場は千葉駅と僅かに数丁を距つる新通町角に設けられた。起点の押上から千葉迄は二十三哩（まいる）約一時間で達する、乗車賃は五十七銭十分毎に発車、汽車よりは早い此電車の開通に依って千葉の殷賑は一層加はるであらう。社長は代議士本多貞次郎氏。

（自動車） 千葉自動車株式会社は五台の自動車を運転して市内は勿論各地への便宜を図って居る。

（街道） 県庁を起点として本町通りを千葉神社前から西へ東京を指すは「東京街道」、県庁前より南へ海岸を「木更津街道」、千葉神社前から右都村方面へ行くは「佐倉街道」、大和橋から県立病院下を達するは「東金街道」、市場山口屋前から左折して千葉寺区より南するは「大網街道」。

（郵便局）千葉郵便局は本町通りにある一等郵便局だ、其他新町に新町郵便局、長洲に寒川郵便局、県立病院前に市場郵便局、椿森に椿森郵便局。

（電話）明治四十三年に開通した。現在五百七十七番迄。市外は東京、横浜始め、県下重なる市街へ通する。

（旅館）梅松屋、加納屋、万菊、牧野屋、油屋、新油屋、羽田屋、海老屋、成田屋、時田屋、印西館、田川屋、梶田屋、玉屋、高原館、進昌亭、長生館、泉屋、加納屋支店、内田屋、食田屋、南総館、上総屋、鶴谷。宿泊料は普通一円五十銭から三円迄。

○名勝と旧蹟

（猪の鼻山）所謂千葉城址である。千葉駅の東南十四町、市場区の背後に聳ゆる断崖、千歳の古松其頂きを掩翳するもの即ちそれ試みに山上に立てば袖ヶ浦の激灩、雲際の富士、白帆、鷗、真に一幅の好図である。

清宮棠陰

草没荒墟絶往還、遺糧時現野田門
海潮空弔当年夢、落日秋風猪鼻山

（お茶の水）猪の鼻の登り口にある噴水井をお茶の水といふ。治承の昔千葉常胤が頼朝を城に迎へた時、此の井の水を供したと伝へられて居る。

（七生の松）猪鼻山の東方千葉医専の庭内に一株、其附近に六株、都合七株の老松がある。之は千葉氏一族の墳墓だと云ふ。

（池田の坂）猪の鼻山の西南にある此坂が往昔千葉城の搦手であった。

（殉難警察官招魂碑）猪鼻台上

（千葉公園）猪鼻山と県庁側の二ヶ所にある。県庁側の公園は都川に沿ひ武徳殿を囲んで中央にグランドや運動機具が設けられてある。

（羽衣の松）県庁公園内池畔の小丘に聳ゆる老松がそれ、往昔天女此地に舞降り、この松に羽衣を掛けて池畔に蓮の糸を手繰って居ると、折柄其処へ来た千葉常胤が之を見て大に喜び遂に婚して七児を儲けたと云ふ伝説がある。

（君待橋）千葉駅の西南十八町、長洲と寒川の境にある小さな石橋である。治承年間千葉常胤の一族此橋に頼朝を迎へた時、常胤の季子、胤頼、和歌を以て頼朝に橋の名を答ふ。

見えかくれ八重の潮路を待橋や
　渡りもあへず帰るふな人

又藤原実方奥州へ下向の途次歌あり

寒川や袖師ヶ浦に立つ煙

君をまつ橋身にぞ知らるゝ

（千葉氏累代の墓） 大日寺境内西隅に十六基あり、中央の最も大なるは常胤の墓、其他は常胤の父常重、常重の父常兼及び常胤の子胤政以下の墓で又北道場の来迎寺境内にも氏胤、満胤等七基の碑がある。

（尊空法親王の墓） 来迎寺境内にある。親王は伏見宮邦輔親王の御系統で、京都智恩院の門主であったが後年千葉へ来て来迎寺に潜居された。

（鮒田の池） 千葉医専を左に見て東へ三丁ばかり、新しい葦の芽の生ふる頃、初雁かねの鳴渡る頃、塵外遠く此池辺に昂を曳く又一入である然し今は畜産試験場の構内となって居る。

（大銀杏） 千葉寺境内にある、周囲二丈八尺、名高い鎌倉八幡の大銀杏より六尺程大きいのだ。

（袖師ヶ浦） 海水浴場及び納涼地として名あり、夏季露店軒を並べて立ち、市営脱衣場、繋留船遊覧場などもあり、貸舟を営む者も多く沿岸伝ひに白戸飛行場も見へる。

（綿打ヶ池） 千葉鉄道聯隊の西南約三丁、池畔に出生弁財天の碑がある。

（千葉八景） 古来千葉八景といふものがある。

猪鼻の秋月、千葉寺晩鐘、大橋の晴嵐、羽衣松の夜雨、袖ヶ浦帰帆、東台の暮雪、鮒田の落雁、登戸の夕照

○神社と仏閣

（千葉神社） 千葉駅の南約四丁、天御中主命を祀る、昔は妙見寺と云って千葉家累代の祈願所、一條天皇の勅願所、徳川将軍家の祈願所として御朱印地が二百石あった。明治維新に社録を奉還、千葉神社と改称し、同七年県社に列し、其後二回大火に社殿宝物悉く烏有に帰したのを、大正二年巨費を投じて造営に着手し、同三年竣工したのが今の木の香新しい社殿である。祭礼は例年八月十六日から二十二日迄行はれ、境内に招魂社あり春秋二季に祭典を執行す。

（寒川神社） 君待橋の南四町、村社で寒川比売命及び天照大神を祀る。社の敷地下には古来尊き石櫃を埋めてあると伝へられて居る。

（白幡神社） 向寒川にある。治承四年秋九月千葉常胤が源頼朝を援けて兵を挙げた時、源氏の白幡を樹てゝ領内の兵を聚めた旧蹟として聞こえて居る。祭神は誉田別命。

（千葉寺） 千葉駅の東南三十町、和銅二年行基菩薩の開基、海照山観喜院と称し、新義真言宗豊山派で坂東二十九番の霊場である。千葉家累代の祈願所で現今の堂宇は建久三年千葉常胤の営繕になるものである。境内桜樹多

く桜の名所として知らる。

（来迎寺） 北道場にある。建治年間一遍上人の創立、昔時千葉氏の帰依厚く、現に氏胤等七基の墓碑がある。

（大日寺） 院内にある。天平宝字元年仁生菩薩の開基で真言宗に属し、千葉家累代の菩提所であった。今も常胤等十六基の墓碑がある。

（本円寺） 本町一丁目にある日蓮宗にして、永徳元年日什聖人の開基、門内に池あり菖蒲、杜若（かきつばた）を植ゆ。

（宗胤寺） 羽衣橋側にある。曹洞宗で延徳二年千葉宗胤の開基である炙点に名あり。

○附近の名勝古趾

（大巌寺） 千葉から約一里生実浜野村〈蘇我町の誤り〉にある。天文二年の創設にかゝる。十八檀林の一で、境内には老松古杉森々として聳之樹梢には数千の鵜が棲んで居る。寺宝多く弘法大師の真筆、家康公の書翰などが蔵されて居る。有名な村井弦斎の小説で知られた小弓の御所も之から程遠くない。

（本行寺） 生実浜野村にある。文明元年日泰上人の開基にかゝり七里法華の根本霊場として知られて居る。境内に泰師堂あり、菖蒲や蓮花の候郊外遊覧地として名あり。

（浅間神社） 稲毛駅から六町、海岸の松林中にある。鳥居は海中に建てられ、毎年七月十五日大祭を行ひ子供の守神として知られてゐる。

（夫婦梅） 幕張町字長作長胤寺境内にあり。高さ十七、八間枝は三層に枝垂（しだ）れて、花笠の如きから別に三笠の梅と云。

（稲毛海岸） 袖ヶ浦の西端で遠く安房の山、上総の浦を望み翠松堰塞（すいしょうせきけん）して風光掬すべきである。夏季都人士の来遊するものが頗る多い。有名な海気館は此処にある。

○娯楽と演芸

（県公会堂） 千葉市の娯楽場としては碁会所、将棋研究所、射的場等種々あるが一般的としては県公会堂あるのみだ。県公会堂は県の経営にかゝり集合も出来れば演説会場にも充てられ、室内には娯楽室、球戯室、食堂、料理室などの設けあり。入場料五銭を払へば誰でも終日遊んで居る事が出来る。

（公会堂） 吾妻町一丁目、地方廻りの劇団、浪花節、時には琵琶や義太夫の大会が開かれる。理事は鈴木直太郎氏。

（羽衣館） 吾妻町二丁目＝日活系統の活動写真常設館だ。館主浅川得氏。

（演芸館） 新通町＝大正活映と提携して西洋物専門で

売出して居る館主は臼井真三氏、両館共夜間開館日曜と祭日は昼夜。

○花柳界

（蓮池芸妓） 吾妻町の裏通りは明治の初年迄、蓮池であったとか。今では赤い灯の瞬きに紛るゝ三味の忍び音艶めかしい巷と化して泥中に咲く花の意気地ありや、兎に角蓮池芸妓と名乗る者百五十有余、芸妓家が四十余軒。

（新地） 千葉神社前から通町を真っ直ぐに行くと当に海岸へ出る二丁手前に大門あり、廓内の青楼九軒。

（料理店） 千葉料理として特に誇るべきものもないが、大抵の食道楽には参らすべき用意はあり。

紅翠館（梅松）梅松別荘、楽宝館（加納屋）、一力、梧月、吾妻倶楽部、安田、布長館（牧野屋）、万菊、相原洋食店、進昌亭、川万、万安、長崎屋、喜久水、梅田、万盛庵。

買物しるべ

（市日） 月並の市は毎月十日本町、二十日二十八日に吾妻町へ開く、主として古着、草花、古道具。草市は毎年八月十一日に、本町から市場に開かれ、又暮の市は毎年二十五日市場、本町、吾妻町一帯に開かれる。

（商店） お土産にしろ日用品にしろ、先づ買物に必要な信用ある主なる商店を紹介すれば

△呉服店浜田屋、奈良屋、宇井、沢本、宍倉、加納屋、ゲタモ△洋服店塩田、万崎、萩原、森田△洋物店山口屋、多田屋、松山堂、川口、多売堂△写真館鈴木、丸山、玉水館、志方△株式両替千葉證券、瀬尾、同信託正隆、大川、三守△雑貨大島屋金物店、沢部金物製氷店、和田金物雑貨店、和田足袋店、金井印舗、飯豊、草薙砂糖石油店△菓舗大橋堂、三好野、和泉堂、新柳△乾物八十八、都屋、須藤、鹿島、東屋△家具根本屋、紅茂△米穀浜野屋、大森、尾張屋、大和屋、高田屋△肉店相原、並木、石橋、浜田、宮間、田川△酒店石橋、山長、楠原、高田、安藤、酒惣△運送店三ツ星、西川、治郎丸、丸通△薬舗国松、小池、小倉、矢沢、川口△書籍文具立真舎、多田屋、松田屋、郁文堂、淡路屋、文友堂

以上の外、各種商店多々あるも紙面に限りあり略す。

海の千葉

千葉が避暑地として都人士に認められる様になったのは最近の事で、従って設備の如き未だ完全とは云へぬが夫でも海岸の埋立地には市営の脱衣場も出来れば掛茶屋の七、八軒も出来て、尚ほ今年からはロセッターホテル

に真似た納涼遊覧の帆船が其巨体を海岸に横付にし来遊者を待ちつゝある。千葉の海は水清く、波穏やかに遠浅で、婦人子供にも何等の危険を伴はない。殊に満潮には海水浴場となり、干潮には汐干狩が催ほされ両様の趣味を併せ得られるのは特長として誇るに足るべきである。海は碧に空は青く水天蒼茫の間白帆の点々たるは景致掬すべく遠く望めば函嶺の翠黛、鹿野、鋸、鬼泪の連山雲煙模糊の中に画けるが如く、夕陽将に沈まんとし、芙蓉の峰幽かに夢の如く浮ぶ所、帰帆の去来するの状は真に画を見る様である。若し夫れ月明の夜涼を趁ふて舟を行れば、金漣舷に碎けて俗腸又忽ち洗ひ去らるゝであろう。此情趣を知らずして夏の千葉を語るの資格はない。

都川の清流、釣すべく網すべく、漁業組合に依頼すれば地曳網も曳かれ黒鯛、鰯、鯵魚、鰺其他の魚族網中に発溂たり。

東京から千葉迄は僅かに一時間余にして達する而も汽車は三十分、電車は十分間毎に発車する。交通の利便は此上ない。假に両国を朝一番で発車すれば千葉に七時前に着く。市内の名所旧蹟をたづね悠々潮夕狩や海水浴をして夕刻には帰れる。近頃銀行会社員や商店員偖ては各工場の従業員等多忙の人々が一日の労を慰すべく、日帰的に来遊を試むるのも又此至便があるからであろう。

実際千葉は平民的の避暑地である、遊び場所である。

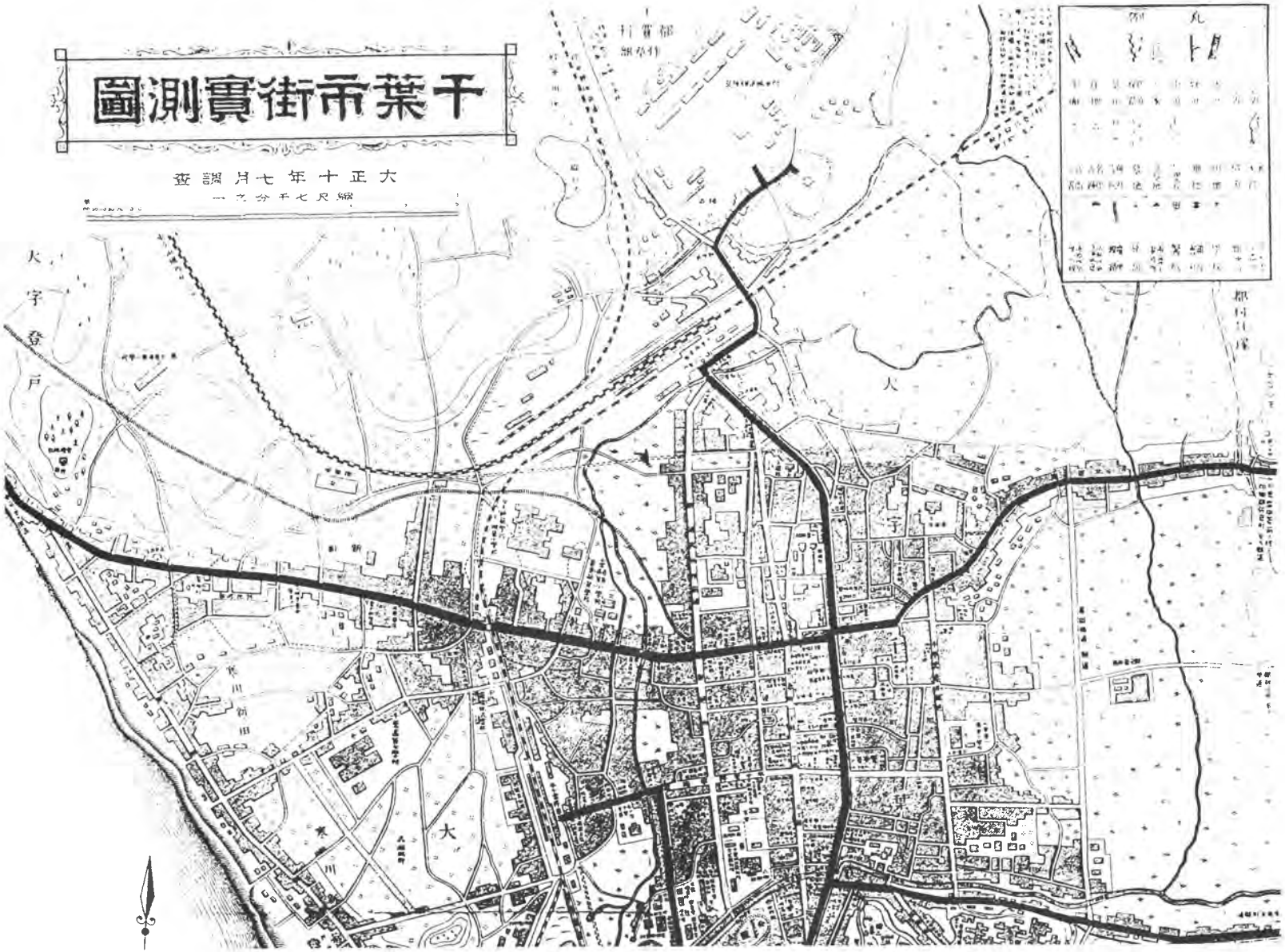
千葉市市場武徳殿横丁
武藤歯科医院　電話一六八
歯科医師　武藤切次郎
東京歯科医学士　武藤鎮夫

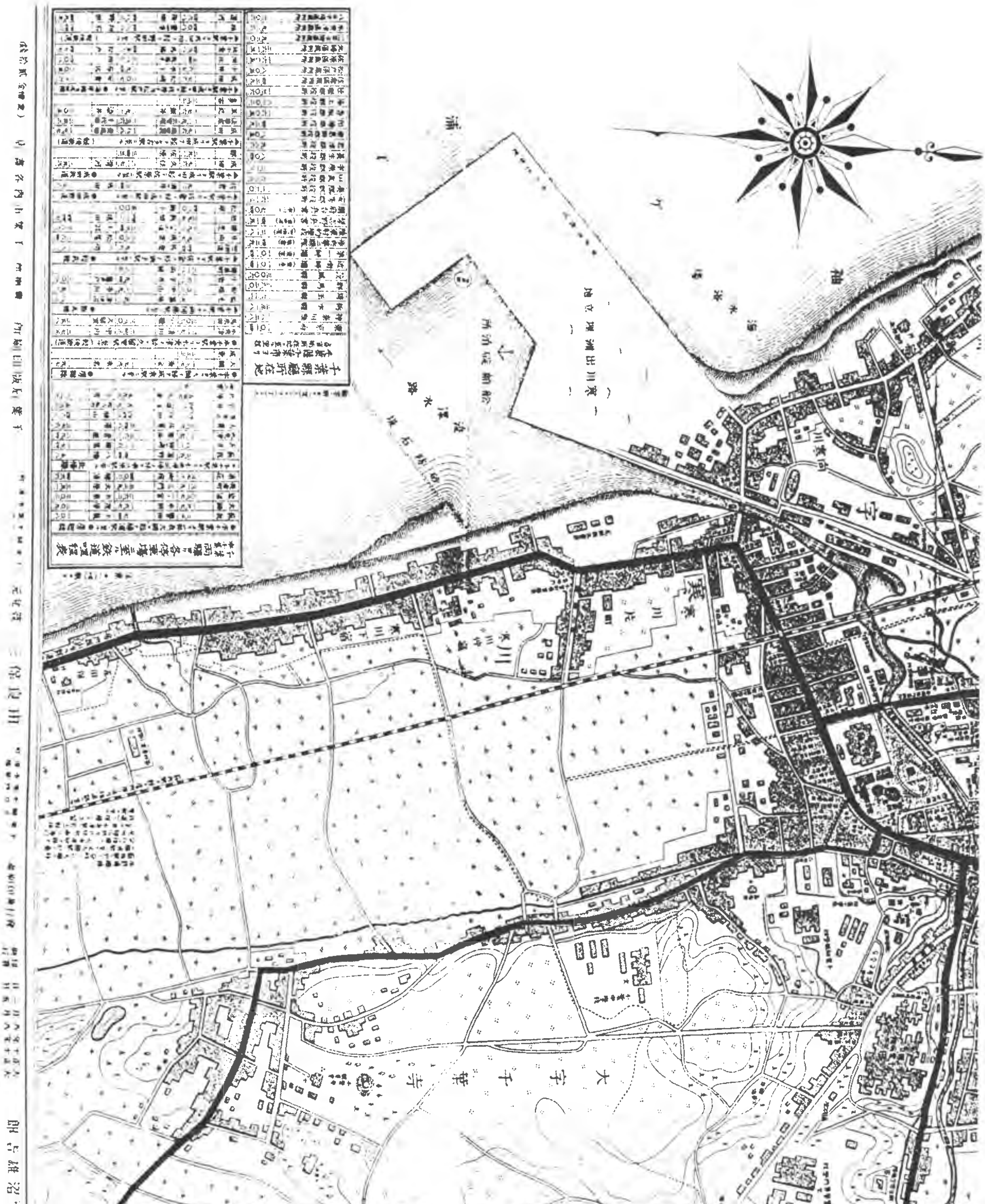
弁護士　安部遜
事務所
千葉市裁判所裏門通り　電話二七五番
木更津町裁判所前　電話五八番

千葉市本千葉通り
婦人科　産科　神谷病院　電話三一八番
院長　神谷良平

千葉市院内　電話一三五番　内田病院
内科、小児科
外科、耳鼻咽喉科
皮膚病、花柳病科
デアテルミー科

≪編者注≫　千葉県警察本部警察史編さん室所蔵の原史料では、地図の裏面に縦書きで4～5段組されて、本書1～9ページの本文が印刷されており、9・12～14ページの広告が武藤歯科医院から第九十八銀行の順に左廻りで本文をとり囲んで掲載されている。


千葉市街實測圖
大正十年七月調査
縮尺七千分之一
都賀村
都賀村
大字登戸
大字
大字
東川新田
東川
大字



千葉市新通町（電話二五二番）
弁護士
特許弁理士
日本法律学士
一瀬房之助
出張所 木更津町、北條町、佐倉町、一ノ宮町、八日市場町

千葉市吾妻町三
浩生医院
院長 武本為訓
電話一六五番

千葉市事務所
千葉県庁前（電話五五六番）
弁護士 鹿島千太郎

千葉市吾妻町二
眼科 仁山堂病院
院長 鴻海蔵
副院長 益子民次
電話一三一番

千葉市市場四百七十四番地
弁護士 高橋栄蔵事務所
弁護士 高橋栄蔵

千葉市県公会堂通り
藤原外科医院
外科一般
花柳病科
皮膚病科
耳鼻咽喉科
院長 藤原治郎
電話百〇九番

千葉市本町二 電話二三八番
関歯科医院
院長 関藤治郎
医員 稲川義雄、新田義一
上総一ノ宮分院 小村万蔵

内科一般
千葉市寒川新田 電話一二五番
井上診察所
院長 医学博士 井上善次郎
副院長 千葉医学士 花岡和夫
千葉医学士 椎名泰三
新潟医学士 鈴木京輔

千葉医学士 粕川堅次
千葉医学士 佐久間教盈
千葉医学士 浅田雅夫
出張 毎週火曜日午前
東京市本所区元町九 矢沢医院
（電話本所四五五〇番）

千葉市本町一梅屋敷（亀井橋通り）
弁護士 羽生長七郎
出張所 香取郡佐原町佐原イ三三六九
浮島屋旅館裏
匝瑳郡八日市場町イ三四〇
下出羽宿

千葉市本町一
山越医院
電話二一〇番

千葉市市場オカリヤ前
仁洋堂医院
電話五四六番
内科、小児科
性病科、婦人病科
其他一般診療

千葉市梅屋敷
内科 小児科 其他一般
塩谷医院
千葉医学士 塩谷揆一
電話二〇八番
別宅 同 五七五番

常設活動
千葉演芸館
電話三三八番

千葉石版印刷所
千葉市千葉通町
石版銅版其他
製版及印刷

千葉市吾妻町（本千葉通り）
和洋菓子調進所
和泉堂
高梨浩長
電話五二六番

千葉名物
海苔ようかん
海老 海苔 兄弟巻
製造 発売元
㊟ 鹿島商店
千葉市本町二

千葉名物
栗もなか 羊かん 製造元
千葉神社前
三好野製菓舗
電話 千葉五四五番
振替東京五二五一二番

登録商標
袖ヶ浦足袋本舗
文 和田文蔵商店
千葉市吾妻町三
電話 二一一八番
振替東京七〇八二番
電略（ワタ）

千葉市吾妻町二丁目
金井印舗
金井香石

和洋紙、度量衡、砂糖
金物部、襖紙、諸帳簿一式
円治号 和田商店
千葉市市場
電話一一五三番

洋品、雑貨
内外文具一式
県庁際
山口屋洋品店
電話三一二番

千葉市吾妻町蓮池
澤本歯科医院
電話四百九番
歯科医師 澤本大二郎

千葉市通町（本店）電話三十四番
大橋堂製菓株式会社
千葉市市場（支店）電話百二十一番

株券、債券、現物売買
商品切手、売買交換
㊀株式会社 正隆株式店
電話一三六番
振替東京九二五七番

千葉市吾妻町一
鈴木写真館
電話三番

公債 顧客本位誠実機敏
社債 ㊥ 瀬尾両替店
株式 千葉市吾妻町二
現物 電話四八番、三〇一番、三六七番
売買 支店 香取郡佐原町 安房郡鴨川町

通町 大島屋金物店 電話二四九番

志 塩田洋服店
千葉市吾妻町
電話百二十番

万金物、氷問屋、度量衡器
千葉市本町二（紙屋号）
上 澤部恒三商店
電話二百五十一番
振替東京四九八三八番
電略（カミヤ）

筆笥、指物、諸国漆器
和洋家具、卸小売
千葉市吾妻町一
〈松 根本八十治商店
電話千葉二六七番
振替東京四六七〇六番

品質本位
誠意篤実
千葉市吾妻町一角（綿屋号）
本店〈一 浜田呉服店
電話七十四番

千葉市寒川
内科 一般 岩月医院
院長 岩月精一
入院ノ設備アリ
電話五七四番

千葉市正面横町
入野歯科医院

千葉市吾妻町紅谷横町
膚科、花柳病科、外科 伊藤医院
千葉医学士 伊藤善治
電話五二九番

株式会社 第九十八銀行
本店 千葉市 電話六九番、三七八番
支店 津田沼、船橋、八幡、木更津、北條、鴨川、吉尾、勝浦、大原、長者、一ノ宮、茂原、庁南、東金、横芝、八日市場、成田、六軒

千葉市通町千葉石版印刷所印刷

千葉市勢一覧

（大正十年五月市制施行祝賀式記念発行）

《編者注》収録にあたり、句読点の一部・誤字を改め、漢字は常用漢字表などによったが、かなづかいは原文のままとした。

位置

本市ハ北緯三十五度三十六分、東経零度二十二分ニ当リ下総中部ノ海岸ニ位シ東京湾ノ東隅ニ在リ。地勢概子平坦ニシテ北ハ千葉郡都賀村及検見川町ニ、東ハ都村及千城村ニ、南ハ蘇我町ニ界シ、西ハ海ニ面セリ。

沿革

大治元年六月一日、千葉常重下総権介ニ任セラレ上総ノ大椎ヨリ此地ニ移レルヨリ始マレリ。古記録ニヨレハ当時ハ表八千軒裏八千軒合セテ一万六千軒ヲ有セル関東第一ノ都会タリシガ、千葉氏中世孝胤城ヲ佐倉ニ移セルヨリ甚シク衰微シ、旧幕府時代ハ佐倉領ニ属シ、維新ノ際印旛県ノ管轄トナリシモ、明治六年二月印旛・木更津ノ二県ヲ廃シ千葉県庁ヲ置カレシヨリ千葉宿ヲ改メ千葉町ト称セリ。爾来民家頻リニ加ハリ幾多ノ商賈軒ヲ列ネ盛況ヲ呈シ来レリ。而シテ明治廿二年四月一日町村制施行ニ際シ、千葉・寒川・登戸・黒砂・千葉寺ノ五部落ヲ合シテ更ニ千葉町ヲ置カレ、年ヲ逐ツテ繁栄シ大正十年一月一日ヨリ市制ヲ布カル、ニ至レリ。

市役所位置	面積広袤					土							
	面積	広袤			周囲	官公用地			民有地				
		東西	南北			官有地 官公用免租地	種別	地目	田	畑	宅地	池沼	
	方里	里	里		里	反	反別	反別	反	反	反	反	反未満
千葉市寒川九百八十三、四、五番地合併	〇、八一一	一、十八	一、一〇	五、三二	一、一九	二二、七 一三二、九	計	地価	八二、三三七	三三、四四〇	六五九、七四四	円未満	
						反	反	地租	三、六九一	一、六七九	一六、四七二	円未満	

地					戸										口					
租	地				種別	本籍人	出寄留	在陸海軍	在朝鮮其他内地以外	在外国	在其他	入寄留	現在	前年	現住戸数	前年	現住動態			
山林	原野	雑地	計														出生	死亡	婚姻	離婚	死産
五〇、七	五、二	一	八八二、一		男	一二、三四〇	二、〇九九	八五	一四	一〇	六六五	六、四〇二	一五、八六九	一四、〇五九	六、六〇六	六、四二一	一、一〇九	八五一	三九七	三九	七六
四一六	一三	円未満	七七五、九五〇		女	一二、五四〇	一、九六八	—	二	—	六六八	五、八〇八	一五、七一〇	一六、一四四							
二二九	七	円未満	二三一、〇七八		計	二四、八八〇	四、〇六七	八五	一六	一〇	一、三三三	一二、二一〇	三一、五七九	三〇、二〇三							

公官署		軍隊	団体	銀行会社
千葉県庁	千葉警察署	鉄道第一聯隊（都賀村）	千葉県農会	株式千葉県農工銀行
巡査教習所	千葉監獄（都村）	鉄道材料廠	千葉県教育会	仝　九十八銀行
附属		陸軍歩兵学校（都賀村）	赤十字社千葉支部	仝　割引銀行
蚕業取締所	千葉郵便局　一等	衛戍病院（都賀村）	愛国婦人会千葉支部	株式日東油脂会社
度量衡検定所	新町郵便局　三等	憲兵分隊	武徳会千葉支部	仝　千代田製粉会社工場
穀物検査所	市場郵便局　三等			仝　千葉コークス会社
鉄道管理所	寒川郵便局　三等			仝　瀬尾信託会社
千葉地方裁判所	兵営前郵便局　三等			仝　総武銀行
千葉区裁判所	農商務省畜産試験場			
千葉税務署	執達吏役場			
千葉郡役所	公証人役場			

組合

仝	川崎銀行千葉支店
仝	千葉電燈会社
仝	千葉瓦斯工業会社
十万円未満株式会社	四
仝 合資会社	一

新聞

日刊本社	二
東京日刊支局	一
定時刊行本社	二

職業別戸数

庶業

種別	戸数	種別	戸数
官公務員	五九八	新聞記者	二五
軍人	一二五	社員店員事務員	一二五四
学校職員	一四二	鉄道員	一二六
弁護士	一七	諸師匠	一八
医師	四〇	産婆	一五
薬剤師	四	按摩	三二
神職	八	諸傭員	一三〇
宗教家	二六	其他	二五三

営業

種別	戸数	種別	戸数
商業	一、三五三	料理屋業	八九
金銭貸付業	三一	芸妓屋業	三九
物品貸付業	九	紹介業	一〇
工業	八一三	代書代弁業	七
運送業	九七	貸座敷業	九
諸負業	二五	理髪業	七五

教

学齢児童

種別	計	百中就学	既達者	同未達者	就学始期既達者	就学	不就学
男	二、七七九	九、九一四	二、七七九	四三〇	二、三一九	二、三一九	二〇
女	二、七四八	九、九四四	二、七四八	四一八	二、三一七	二、三一七	一三
計	五、五二七	九、九二九	五、五二七	八四八	四、六四六	四、六四六	三三

小学校

種別	尋常科	高等科	併置	尋常科	計
校数	一	四			五
学級数	一三	四七	八		六八
教員数	一四	五一	八		七三
児童数	七八〇	二、五八二	三八一		三、七四三

（大正八年現住戸数）

其他業

印刷業	写真業	席貸業	宿屋業	農業	漁業	労力業	不定業
一一	八	一〇	九四	四二一	二三一	五六三	五六九
湯屋業	遊技場業	遊芸稼業					
二八	五	一一					

育

種別	校数	設立者	職員数	生徒数
医学専門学校	一	官立	四五	五五六
師範学校	一	県立	四五	三七五
尋常附属小学校	一	全	二〇	七一〇
女子師範学校	一	全	一四	二二三
尋常附属小学校	一	全	一二	四二〇
中学校	一	全	二九	六六〇
高等女学校	一	全	一七	五〇〇
修養学館補習小学校	一	私立	一	七四
教員講習所	一	県教育会	一三	一〇四
実科女学校	一	全	八	五六
裁縫女学校	一四	私立	一二	六九〇
刺繍学校	一	全	四	三〇
産婆看護婦学校	一	全	四	二五
盲訓院	一	県教育会	二	一二
自彊学館給仕	一	全	五	三五

商業補習学校		幼稚園	
教員数	専科兼務 二五	設立者	県教育会
本科生 日中	三四	保母数	三
別科生 夜学	四〇	児童数	一〇四
計	七四		

生　衛

種別	設立者	患者収容力
病院	県立	普通 三三九、精神 二七
伝染病院	市立	結核 一三、伝染 一八
其他	私立	一二
病院	私立	七
医院	私立	一四
歯科医院	私立	七

医師其他	
医師	九七、歯科医 八
薬剤師	八、産婆 六九

市医師会	看護婦会
会員数 九七	会数 七、看護婦 一一〇

屠場 市立	数
牛	七四
馬	三
犢	一
豚	四、二二四

火葬場	
設立者	株式会社
	一

図書館		青年会	
設立者	県教育会	会数	七
図書数	九、三四五	会員数	四五六
一ヶ年閲覧者	九、九一〇		

交

路道

種別	路線又ハ路線数	延長
国道	至東京	二、七七五 間
県道	至佐原　至銚子　至茂原 至大網　至千葉駅　至本千葉駅 至寒川船舶発着所	四、七五五
郡道	一	一、九六五
市道	二五一	四八、一〇九
計	二六一	五七、六〇四

汽車電車

駅	終点	哩数
千葉駅	上、総武線　両国橋駅	二二、七
	総武線　銚子駅	七二、七
	下、分岐線　成田方面	
	房総線　本千葉駅	、七
本千葉駅	上、房総線　千葉駅	、七
	下、房総線　北條駅	五五、七
	仝　勝浦駅	四三、六
	分岐線　東金方面	

車

停留所	乗客 乗車	降車	発荷	着荷
船橋間（京成軌道会社工事中）	一、一二四、三四〇 人	一、一二一、四六七	三三、七七〇 屯	六八、四〇五

通

自動車

経営者株式会社	車数 五

湊

発着地	航路先	海里数
寒川沖	東京市　横浜市	二〇　三〇
貨物	出荷　入荷	四五、一二二五 屯　七一、二一七

信通

郵便		電信		電話	
発信	受信	扱局	発信	扱局	発信
信書	信書	二	三五、八一八	二	三九、三九
小包	小包				四四、六五二
七、三三一、一三二	一三、五七五				
	五、四六一、一七五				
	四五、四四一		四九、一六五	一	四八六

団

種別	役員数	会員又ハ組合員数	経費
市農会	九	六三三	二、七一〇
市漁組合	六	一、〇一五	四、九五〇

産業

名称	作付反別	収穫高	価額
米	一〇三、六反	四、七四二石	一二七、八七三円
大麦	一八、三	三、八八〇	五四、三一〇
小麦	一〇九、一	一、三五〇	三一、八二四
菜種	五七、四	七四一	一二、五九七
粟	一六、二	二二四	二、九二八
蕎麦	三、二	三二	四四八
蜀黍	六、四	一六七	一、五〇三
大豆	三、五	四六	六九〇
小豆	一、五	八〇	一、三六〇
蚕豆	二〇、六	一八五	三、七〇〇
甘藷	一九八、九	一、三六一、五八〇	一一五、四〇〇

産業団体

名称	作付反別	収穫高	価額
蔬菜園芸 市農会	六四坪	二反四〇〇	一、〇五一
蔬菜園芸 経営者	苗圃	栽培反別	経費
蔬菜市場 市農会	月六回	三、三八四	五一六
蔬菜市場 経営者	回数	売上高	経費

産業組合

名称	組合員数	出資口数	購買高	売却高
戊申会	二八一	三九六	三一、三九一円	三三、四七九

工業

名称	数量	価額
度量衡器	四、四三三個	一八、九〇〇円
製材	五三四、〇〇〇本	二五六、九四〇
澱粉	三五二、五二〇斤	二四、六七六
製紙	七〇五、〇〇〇	五六、四〇〇
麻眞田	二八、〇〇〇反	九、一五〇
活版印刷	一九、六〇九、五〇〇枚	九二、六六二
飛行機	一一台	一二〇、〇〇〇
石炭瓦斯	二、三九八、三五〇立方尺	四三、三六八
計		六二二、〇九六

物産

名称	数量	価額
馬鈴薯	九、八	二、六六二
里芋	一八、一	八、一四五
大根	二二、〇	九、九〇〇
茄子	七、六	六、六五一
葱	六、八	三、六七二
其他	三七、五	二一、一八八
計	一、〇二〇、五	五〇四、八六一

業

名称	数量	価額
海産物		
鰯	三五、三三八〆	一四、八四一円
黒鯛	三二一	七三一
鰈	三四六	五一九
鯵	一、三七一	一、四五三
鰯仔	四六一	九二二
鰤	二、二四三	六七三
鼠頭魚	一一六	八七
コハダ	六、六九二	六、六九二
鮪	六六	三三
沙魚	一、九四二	二、〇一九
烏賊	一三六	二八〇
蝦	三、七八〇	五、二九二
蟹	三、四六七	一、七三三
其他ノ魚類	五、三六四	五、五二四
蛤	二、四二〇	一、二七八
蜊	三六三、七八七	三二、一一一
馬軻貝	二、五八九	一、九九四
塩吹	七八、九〇九	四、六四〇
生砂子	六八、六八一	三、四三四
計		八四、二五六

兵事

区別	現役将校	予備後備将校	補充兵
陸軍	七	一五	七五七
海軍	一	一	一
計	七	一五	七五八
在郷軍人分会	会員数 一、二三〇		
士官下士以上	一四七	五四二	
士官下士以下	二一	二九	
士官下士以上	一六八	五七一	

社寺教宗

神社		寺院		教会	
県社	一	浄土	二	天理教	一
村社	六	曹洞	五	金光教	一
摂社	四	顕本法華	一	真宗	一
無格社	六	日蓮	一	基督教	二
末社	八	真言	六		

公園

猪ノ鼻公園	二、四五〇坪
千葉県庁公園	二二、〇〇〇
警察官殉難碑	
武徳殿	

公会堂

県営	
公会場	一
娯楽室	二
球戯室	一
食堂	一
料理室	一

消防組		議員		吏員職員		歳入		歳出	
組頭	一	衆議院議員	一	市長	一	財産ヨリ生スル収入	七五七円	経常部	一、一二四五
部長	一〇	県会議員	一	助役	一	使用料及手数料	七、一二九	役所費	一、〇一二
小頭	二一	市会議員	三〇	収入役	一	交付金	四、四九五	会議費	一、六〇〇
消防手	四一五			書記	二六	国庫補助	四〇〇	土木費	二、二六二
喞筒	蒸汽			書記補（兼）	五	県費補助	二、四一〇	教育費	六、八〇八
カソリン	一			技手	一	国庫下渡金	四、一三〇	伝染病予防費	六八、六八四
	四			掃除監視吏員（兼）	三	寄附金	二、九七八	隔離病舎費	五、二八四
				伝染病院事務員	一				七一一
				屠場事務員	一				
				学務委員	一〇				
				家屋税調査委員	一六				
				伝染病予防委員	四				
				臨時学校建築委員	四				

予算		予算		財産	
繰越金	六二〇	地租附加税	八、一一四	土地	四、七六二一歩
雑収入	八、一二三	国税営業税附加税	一九、一二一	建物	二、〇六四坪
市税	一二六、〇〇九	所得税附加税	二、四六五	学校基本財産	一六、三四一円
汚物掃除費	八、二九六	売薬営業税附加税	二	慈恵基金	七三〇円
屠場費	二、〇五〇	警備費	六、一一二		
公園費	三七二	救助費	三五二		
衛生費	六〇	勧業費	一二四		
基本財産造成費	一、〇五七	県税営業税附加税	七、八九九		
諸税及負担	九	家屋税附加税	六六、六八二		
神社費	六〇	仝雑種税附加税	一三、三二六		
雑支出	四、七八二	仝遊興税附加税	八、四〇〇		
予備費	二、四二二				
合計	一四七、二八三				
臨時部	九、七六八				
（各款省略）					
歳出総計	一五七、〇五一	歳入合計	一五七、〇五一		

（十年度通常予算ノ掲ヲミノ ク）

千葉県立病院

千葉医学専門学校

千葉市役所

千葉猪鼻公園

千葉県庁

千葉地方裁判所

県公会堂

都川口の景

武徳殿

袖ケ浦海水浴

《編者注》 野呂町・石井宋司氏所蔵の原史料では、一枚の紙に四段で右から左へ表組されており、裏面に十点の写真が掲載されている。原史料は「千葉市千葉活版所印行」である。

明治四十年 千葉町中心街家並概念図

北島　隆

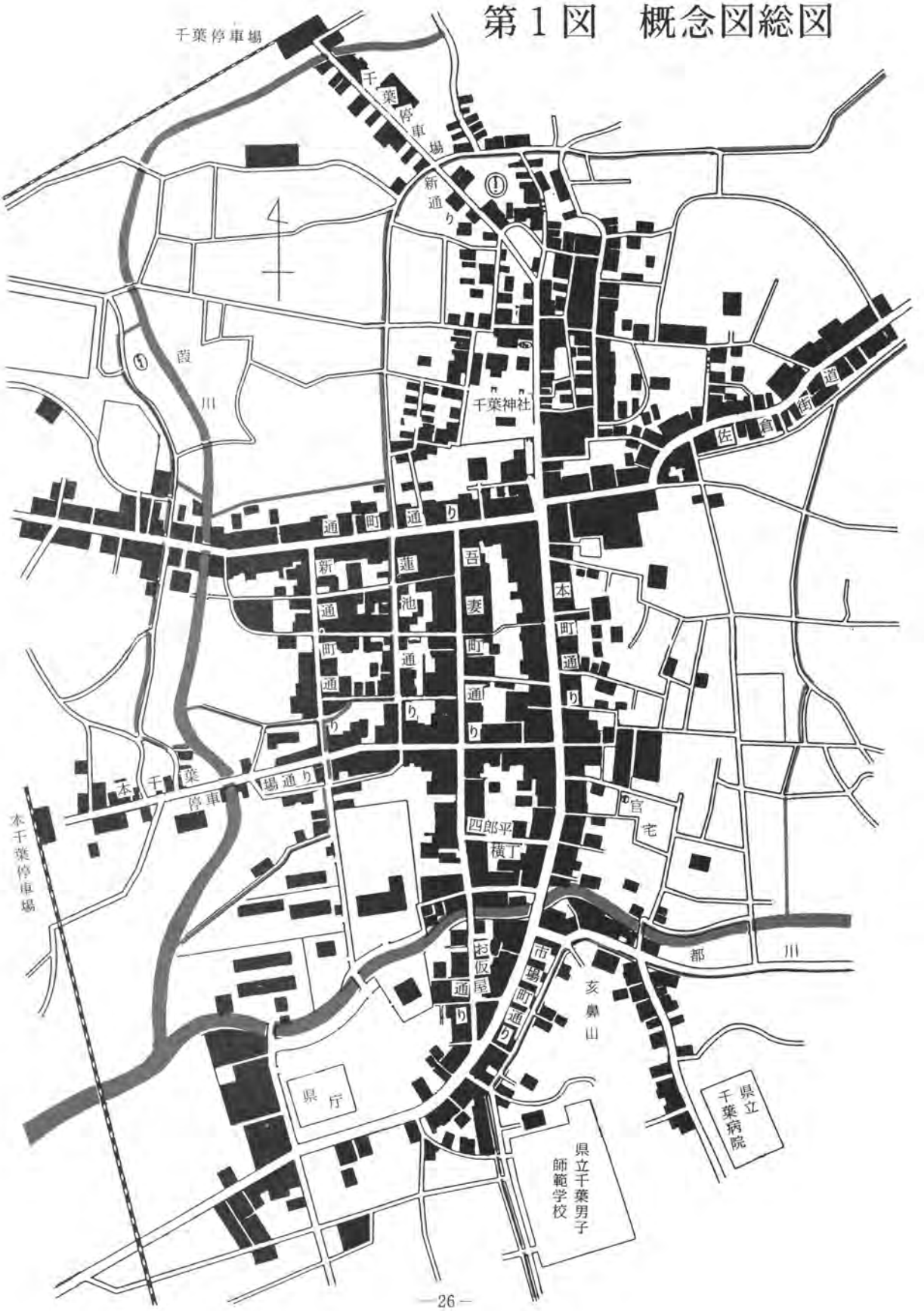
一、旧国鉄千葉駅前通りとその周辺

明治四十年当時、千葉町の最も重要な交通機関は鉄道であった。千葉駅は明治二十七年に現市民会館の所にできた。古川国三郎編纂、能勢鼎三発行兼印刷、明治四十四年五月十五日発行の『千葉街案内』（以下「街案内」と略す。国立国会図書館所蔵。）には「鉄道院千葉停車場は総武、房総両線の分岐点にして、県下随一の停車場なり。明治二十七年、私設総武鉄道敷設さるゝや、同年七月十日を以て設立され、後、国有となるや鉄道院の所管に移れり。此駅一日間の列車発着数は、貨物列車、単行機関車を合せて七十三回、職員は駅長以下五十九名なり。一日の平均乗降客は二千百余名にして、同貨物取扱高は発着約廿二噸、中継約廿八噸なり。此駅より上り列車に依れば両国駅に至る可く、下り列車に搭乗すれば佐倉を経て成田、佐原若くば　銚子方面に達す可く、又、房総線に依れば大網を経て東金若くば一宮、大原等に趣くを得可し」とある。駅の開業当初はあたり一面水田であったろうが、四十年代になると家も所々建ち始めたようである。また、院内町から千葉駅までの通りは「千葉停車場新通り」と呼ばれていた。

この通りに面する家であるが、秋山製材木工場は、本町二丁目角に亀屋という旅館を経営していた秋山孫兵衛が秋元茂（松葉屋旅館）に売渡し、その資金でこの地に開設したという。大正期になると通りに家がぽつぽつ建ち並び、工場は奥まった所に所在するようになった。通りの反対側の林点灯屋は、家の軒先等にある外灯を管理する職業であった。林は鷹匠橋の方へ行く途中にある、繭を信州に出荷するためにできた繭集荷場の管理人を勤めていたが、その関係で点灯屋を始めるようになった。

駅近くの三ツ星運送店については、「街案内」に「三ツ星運送店は千葉停車場前（千葉町千葉千三百八十六番

第１図　概念図総図


千葉停車場
千葉停車場新通り
葭川
千葉神社
佐倉街道
通町通り
新通り
蓮池通り
吾妻町通り
本町通り
本千葉停車場通り
本千葉停車場
四郎平横丁
官宅
都川
お仮屋通り
市場町通り
亥鼻山
県庁
県立千葉病院
県立千葉男子師範学校

地）に在り。明治三十九年の創立にして、海陸の運送業を営む。現店主は木村兼吉氏にして業務に頗る熱心なる人。常に数十名の店員雇人等を指揮して、丁寧親切に依託運送貨物を取扱ふ。曾つて鉄道聯隊及び同聯隊材料廠等の建設に際しては、諸材料全部の運搬に従事しよく其目的を完達して好評を博せり。千葉町運送業者中屈指の店にして、千葉駅積卸の運送貨物中、同店の手に依託せらるゝもの頗る多し。之を以て見るも世の信用大なるものあることを、知る可きなり。」とある。橋であるが、この辺りには葭川の上流部から、江戸街道にかかる堂満橋（現在も同位置にかかるが名は無い）、要橋（現在も同位置にかかっている）、鷹匠橋（現在は新葭川橋か）、無名の橋（現在は曙橋か）がこの当時かかっていた。

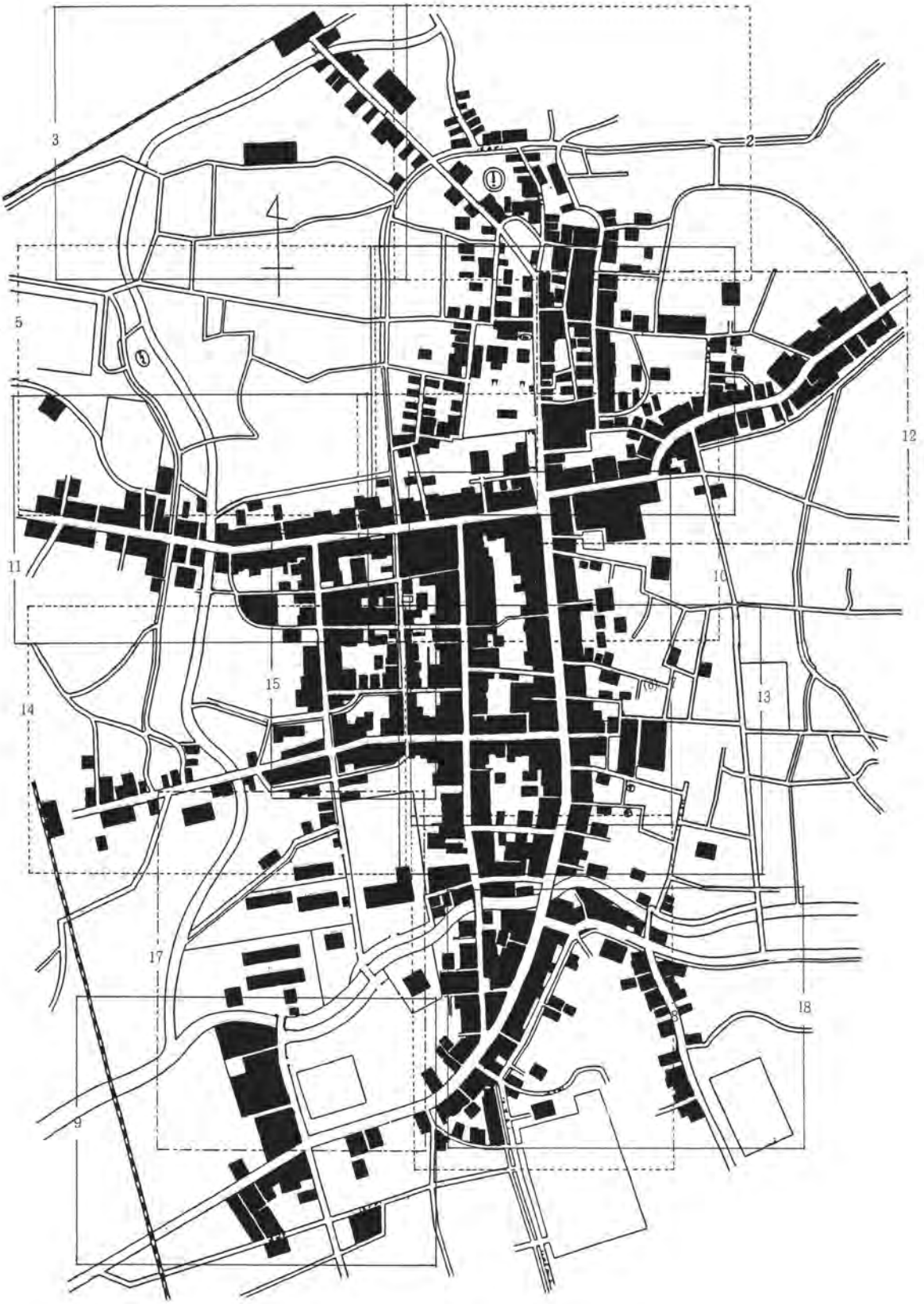
二、院内町

院内町は農家が多く、町並みは古い江戸街道に沿って形成されていた。千葉から東京に行く場合、登戸の先黒砂のあたりで山が海に迫っていたため、登戸から船に乗るかあるいはこの街道を利用していたという。

和田茂右衛門著『妙見寺と門前百姓』昭和五十年発行によれば「現在の千葉神社境内及びその付近は香取山と呼ばれ、仁和元年（八八五）に勧請されたという香取神社の境内でありました。境内に別当寺（伽藍山歓喜院か）である某寺を千葉忠常の次男である覚算が中興開山して一条院の勅願所となし、北斗山金剛授寺尊光院又の名を妙見寺と改号したのでしょう。」とある。実際、私など千葉神社の通りの反対側はオヤマと呼んでいた。

円坊地山は田の中の多少高い所であったが、山と呼んだようである。ここには地元の人の墓があったが、やがて憲兵隊の詰所になった。円坊地山近くの吉永芋屋は薩摩藷を売っていた。植草油店は灯油・種油等を売っていた。二軒先の鳥屋若者宿は青年が寄り集まる所で、いわば集会場のようなものであった。但し、集会場といっても一般の個人の家であり土地の者が開放していたのであった。三軒先の吉永棒屋であるが、棒屋とは荷車等、人・馬が引いて歩くものを製造する職業であった。駅に向かう道を越えて一軒先が、後に八代目町長を大正六年四月から同八年八月まで勤めた和田秀之助の家である。この家の前が浜田肉店で「街案内」に「浜田牛肉店は千葉町院内なる千葉停車場通りに在り。明治三十一年の創業にして店主を浜田卯之助氏と云ひ、牛豚肉の卸小売並に之が飲食店を営む。創業以来、専ら意を生肉の精選に用ゐ、

概念図分割一覧



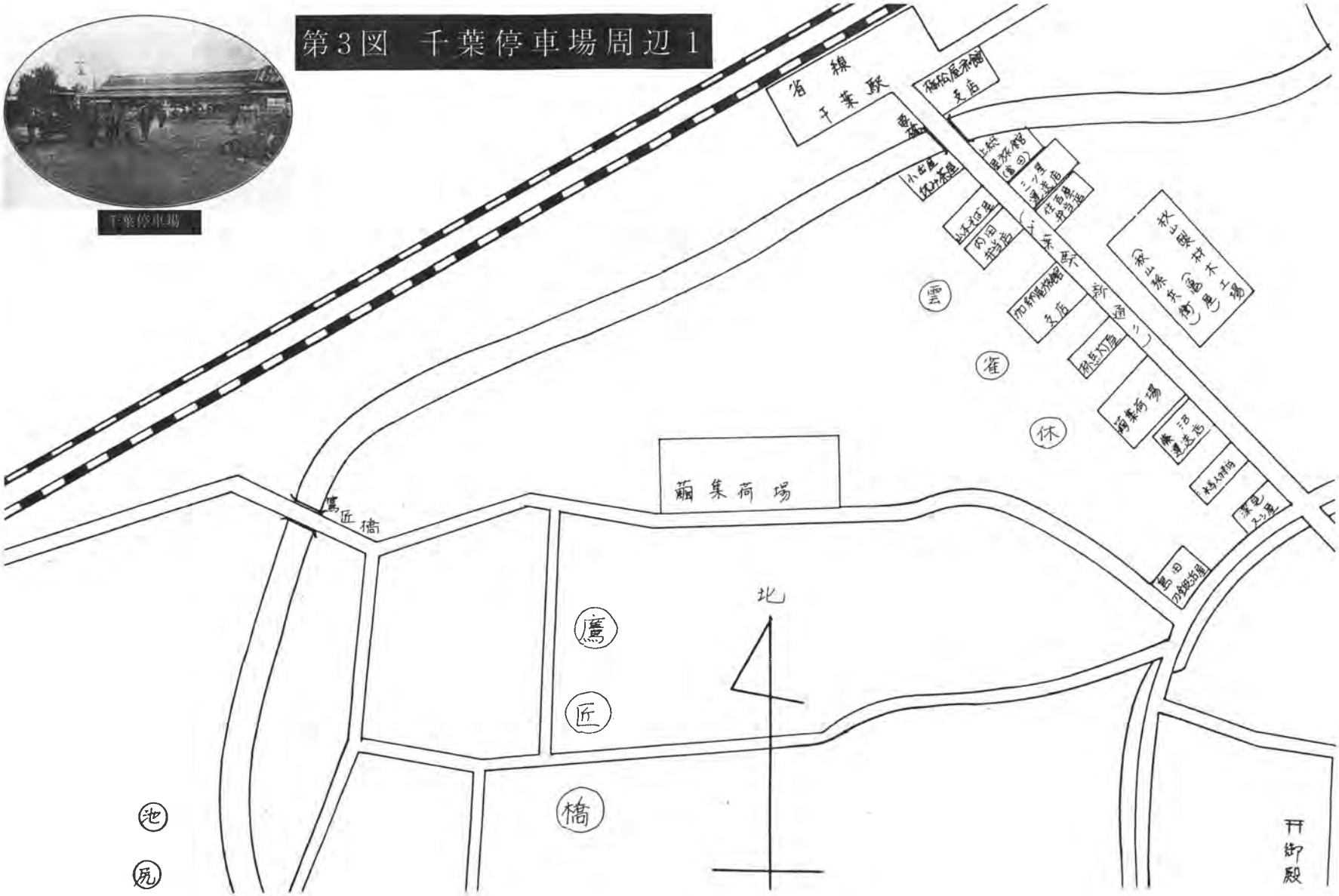
第2図　千葉停車場周辺2

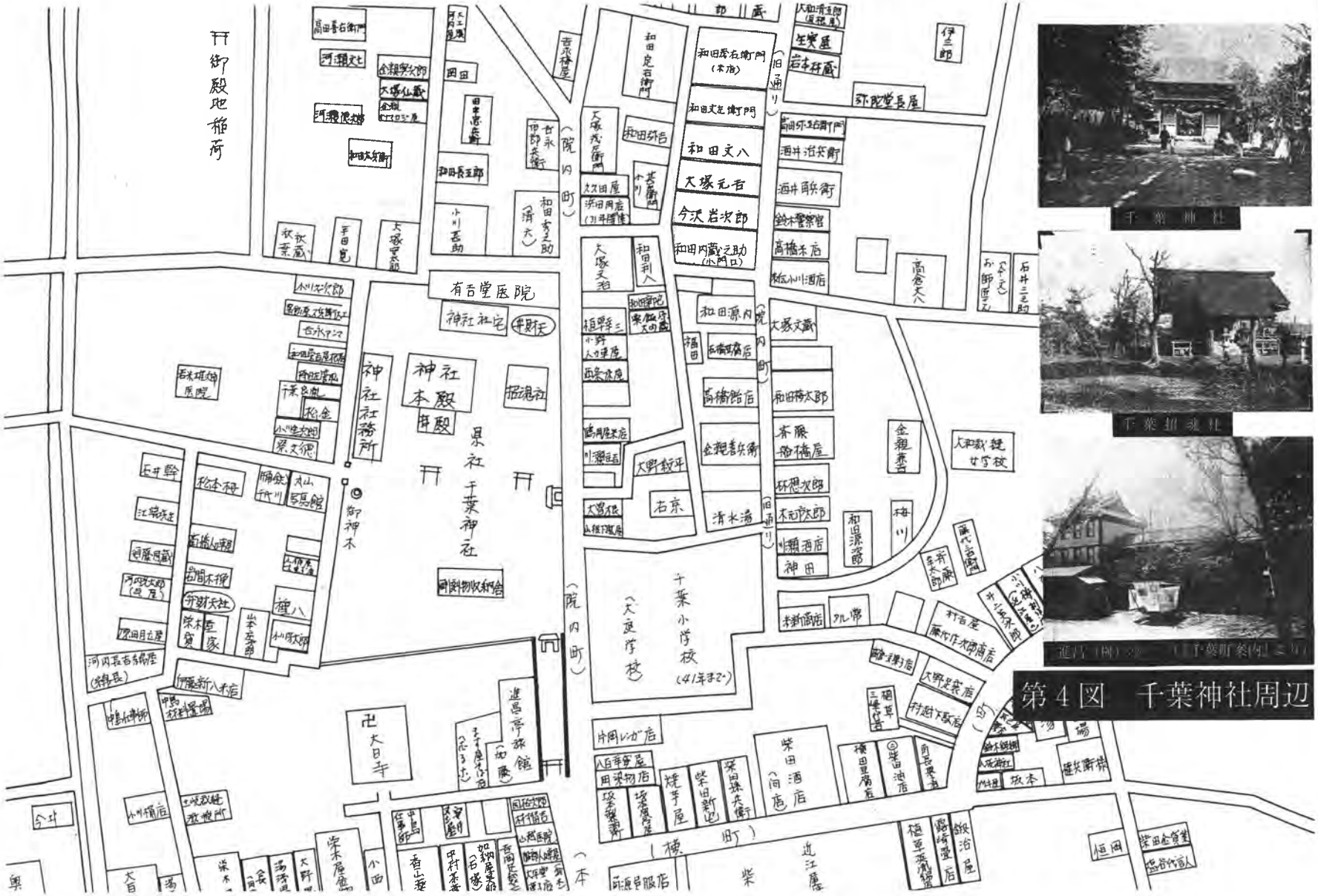
三ツ星酒造店

千葉町中心街
家並概念図
(明治40年)

第3図　千葉停車場周辺1

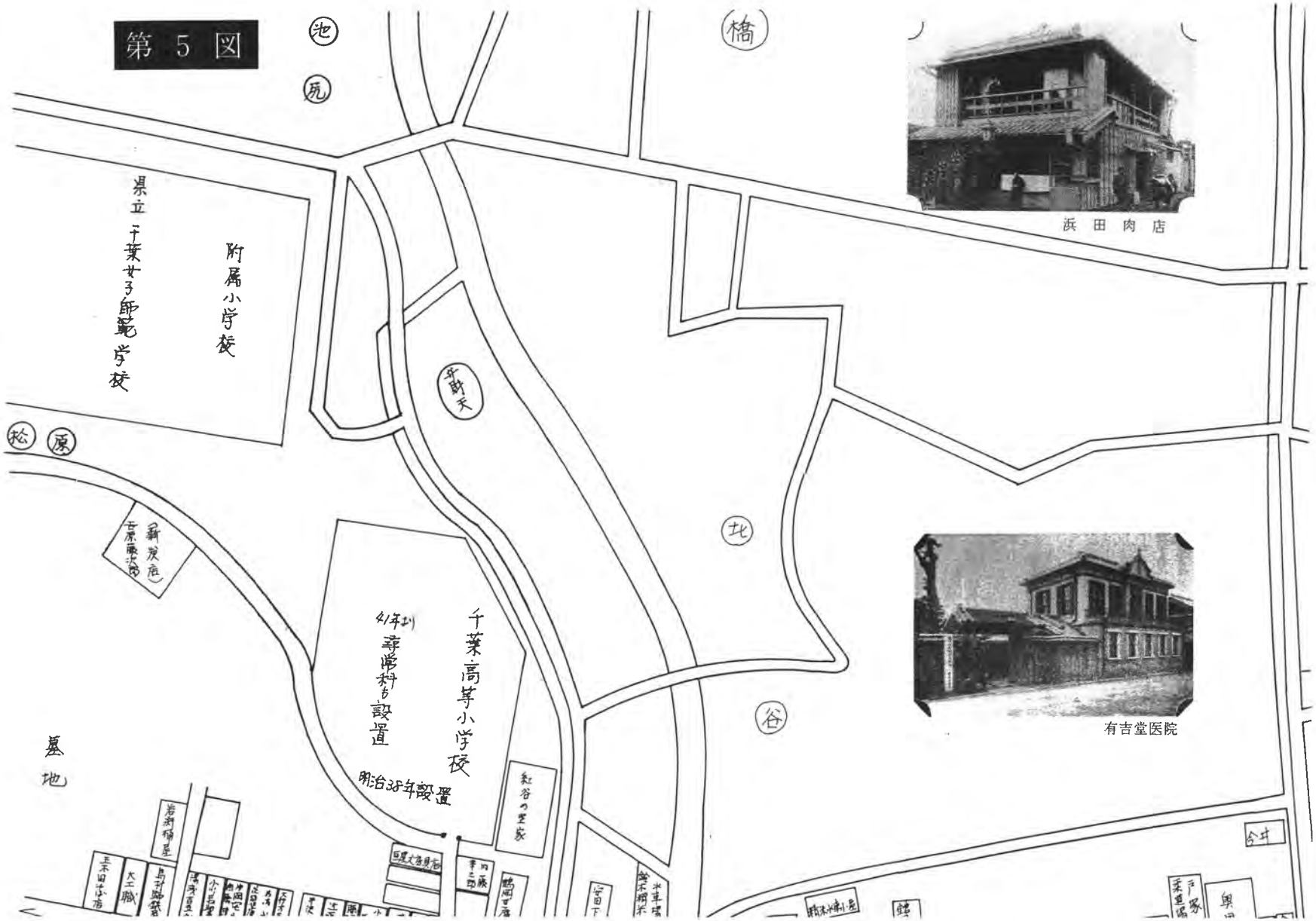
千葉停車場




御殿地稲荷
有吾堂医院
神社社宅
神社社務所
神社本殿
拝殿
招魂社
県社千葉神社
御神木
千葉小学校
(大正学校)
(41年まで)
(院内町)
(旧通り)
(横町)
(本町)
大日寺
千葉神社
千葉招魂社
千葉小学校

第4図　千葉神社周辺

第 5 図


池
瓦
橋
県立千葉女子師範学校
附属小学校
松
原
新発田
吉原屋大店
千葉高等小学校
41年より
尋常科を設置
明治38年設置
墓地
北
谷
浜田肉店
有吉堂医院
今井

常に品質の優良にして、新鮮なるものを備えて需用者に供給するを以て、好評殊に高く、就中、其販売するところの豚肉は、斯界に於て全国有数なる千葉町に於てすら更らに一頭地を抜き、従つて顧客頗る多し店主以下店員女中等皆其業に熱心誠実にして而も極めて勉強なるより、店運弥々繁盛の域に向つて進みつゝあり。」とあり、終戦後は和田家の所に移転し現在もそこで営業している。和田秀之助の南側には有吉堂医院があった。「街案内」に「千葉町院内千十四番地に有吉堂医院あり、院主は大塚義正氏にして、自ら専門として諸腫物、梅毒、淋病、田虫の各病診療に従ひ、大塚義春氏在つて、内外科、耳鼻咽喉科、眼科、婦人科、泌尿科等を担任す。抑も有吉堂は、今の千葉郡生実浜野村有吉草創の当時より医を業とし、代を重ぬること、現代大塚義正氏迄十二代なり。明治廿二年千葉町に移転開業以来益々繁栄に趣き〈中略〉患者の来つて治療を乞ふもの甚だ多し。」とある。建物は房州石で出来ていた記憶がある。

三、千葉神社周辺

千葉神社の当時の建物配置を地図上に再現するのに大変苦労した。同神社の協力には心から感謝したい。境内の建物配置は地図に記したとおりで間違いないと思う。本殿近くに舞楽殿があった記憶があるが、明治三十九年の写真に無いので同三十七年の火災で焼失したままなのであろう。千葉神社及び境内の千葉招魂社は「街案内」に次のとおりである。「千葉神社は千葉町院内に在り。天御中主命を祀り相殿には日本武尊、経津主命を祀る。昔妙見寺と称し、恒武天皇の御宇、平良文が上野国より妙見尊生王を奉還して以来千葉家累代の祈願所たり。後一條天皇の御宇勅願所となり、徳川時代には将軍家の祈願所として二百石の御朱印地を有せり。維新後神仏混合禁止と共に社録を奉還して千葉神社と改称し、明治七年県社に列せらる。同年火を失して妙見寺と共に灰燼に帰し、間も無く壮麗なる社殿を造営したるも三十七年再び祝融の災に罹り社殿及宝物悉く烏有に帰せり。現今仮社殿を設けあるも近く之が再建を見る可し。」千葉招魂社は「千葉神社境内の一部に一碑あり、これ千葉招魂碑にして、之に相接して一社あり、これ即ち千葉招魂社なり。明治十年西南戦役に際し県下より出征せる兵の戦死病没者及び明治二十七、八年戦役並に明治三十七、八年戦役に際し、千葉郡より出征せる勇士等の戦死若しくば病没せる者を合祀す。毎年春秋二季に例祭を行ひ、遺族其他

の参拝する者頗る多く、明治四十四年度よりは、県より之が祭典に対し毎季若干の補助を与えらるゝことゝなれり。」とある。千葉神社東側の千葉小学校は大庭学校とも呼ばれた。それは、千葉神社の空いている敷地を俗に大庭と呼んだが、そこにできた学校であるため大庭学校と呼ばれたのである。増島信吉著、明治四十四年四月二十七日発行の『千葉町案内』（以下「町案内」と略す。成田山仏教図書館所蔵。）によれば、「明治初年千葉神社妙見堂に建てられ、明治六年二月道場に移り、後通町大庭に新築して大庭小学校と改め、三十九年第一尋常小学校と改称し、四十一年二万円余を投じて旭町に新築した。」この学校が現本町小学校の前身である。

千葉神社の南側に進昌（桝）亭旅館があった。この旅館は「町案内」によれば、「千葉神社鳥居前に聳立せる高楼は、生蕎麦及び料理を以て当時繁盛を極める進桝亭にして、幾棟の増築に加ふるに昨年新設せる洋館は美を尽し、又宴会等にも適せり。主人は加藤豊次郎氏。」とあるように三階建てであった。

四、本町通り

ここ本町通りは大きい店もあったが、まあ一流と言える程度の店が軒を並べていた通りであった。一丁目の東側をみると大庭学校と江戸街道を隔てた南側に、片岡レンガ店があった。ここはレンガを仕入れて売っていた。一軒先の坂本製油所は石油を売っていた。佐倉街道を越えて二軒目の大塚直吉綿店は綿の販売のみをしている大きな店であった。少し先の大坂屋小間物店は「町案内」に「本町一丁目及び佐倉新町に在り。熟れも第一流の小間物店にして、同店にて販売せる袋物、簪及び諸化粧品類は東京の流行に一日も遅るゝ事なく、且つ業務に対し着実なれば上下を通じて華客多く、今や他店の羨むも及ばざる処となれり」とある。

一丁目の西側であるが、進昌亭の二軒先の山越医院は「街案内」に「山越医院は千葉町本町一丁目百九十五番地に在り。内科、外科、小児科及び産科等の診療施術に従ふ。明治十五年九月の開業にして、千葉町に於ける洋医開業の嚆矢とす。現院長は山越与之助氏にして千葉郵便局、千葉町救護所、共済生命保険会社会の嘱託医を兼ね、また千葉郡医師会議員、千葉町衛生委員等に挙げられ、今尚其職に在り。副院長は山越久四郎氏にして、千葉医学専門学校医学士たり。院長と共に一般医療に従事し、医院の好評倍々高きと共に社会の信用弥々加はりつ

、あり。」とある。通町通りを越えて四軒目の国松真三郎薬問屋も「街案内」に「千葉町千葉本町一丁目に有名なる薬種商の老舗あり、之を喜惣治薬舗と云ふ。今を去ること三百年前の創業にして、世人概ね国松薬舗と呼ぶ。現店主は国松真三郎氏（明治九年生）にして千葉医学専門学校出身の薬剤師なり。薬局、薬種販売、絵具、染料、香具品、凍氷業等を営む。就中凍氷は千葉県の元祖にして、家伝の製薬には目薬龍眼水あり。元施薬として汎く求めに従ひ之を無償にて配与したるが、官に於て一般の施薬を禁ずるに及び廉価を以て発売しつゝあるが、効能現著なるを以て好評あり。」とある。隣の吉田屋旅館は「町案内」に「本町一丁目の旅館にして、主人夫婦は同情に富み、客に対して極めて丁寧なるを以て知られたり」とあるが、ここは後年千葉郵便局の敷地となった。千葉郵便局は「街案内」に「千葉町本町一丁目に千葉郵便局あり、明治十九年十二月の設立にして、現局舎は明治二十七年十二月、金一千七百九十円の費を投じて建築せるものなり。同局の郵便集配区域は千葉町、千城村、都賀村、都村各一円にして、千葉町寒川長洲に寒川支局を有す。最近一ケ年間の郵便物取扱数は実に六百六十三万三千二百五十六通に達せり。局員は星野局長以下三十名にして、外に駐在工手一名あり。普通郵便の外、電信電話

山越医院

国松薬局

千葉郵便局

第６図　千葉市心臓部店名入り地図

昭和11年８月25日発行　　千葉市千葉476番地福井幾平（編集・発行）

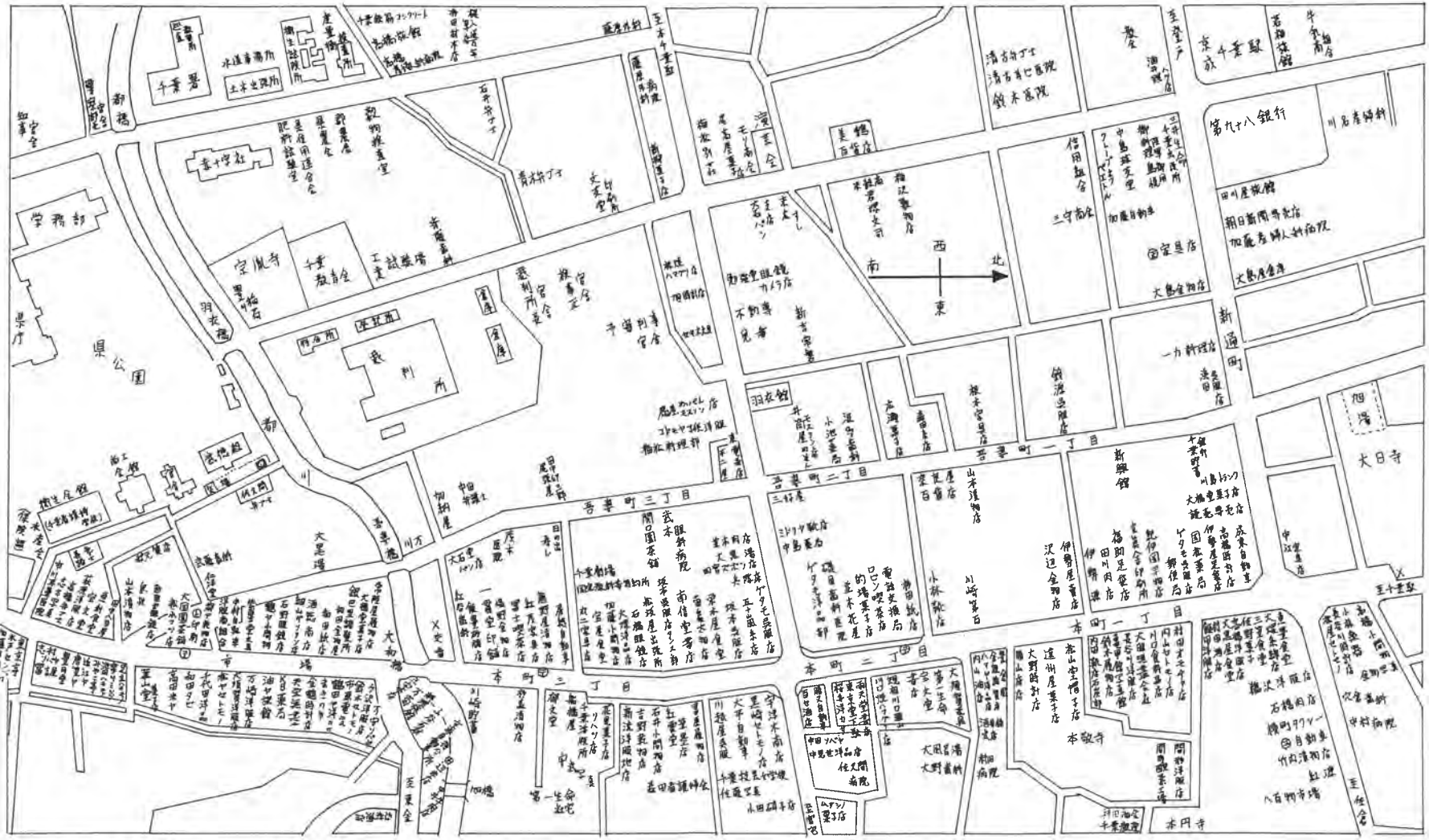
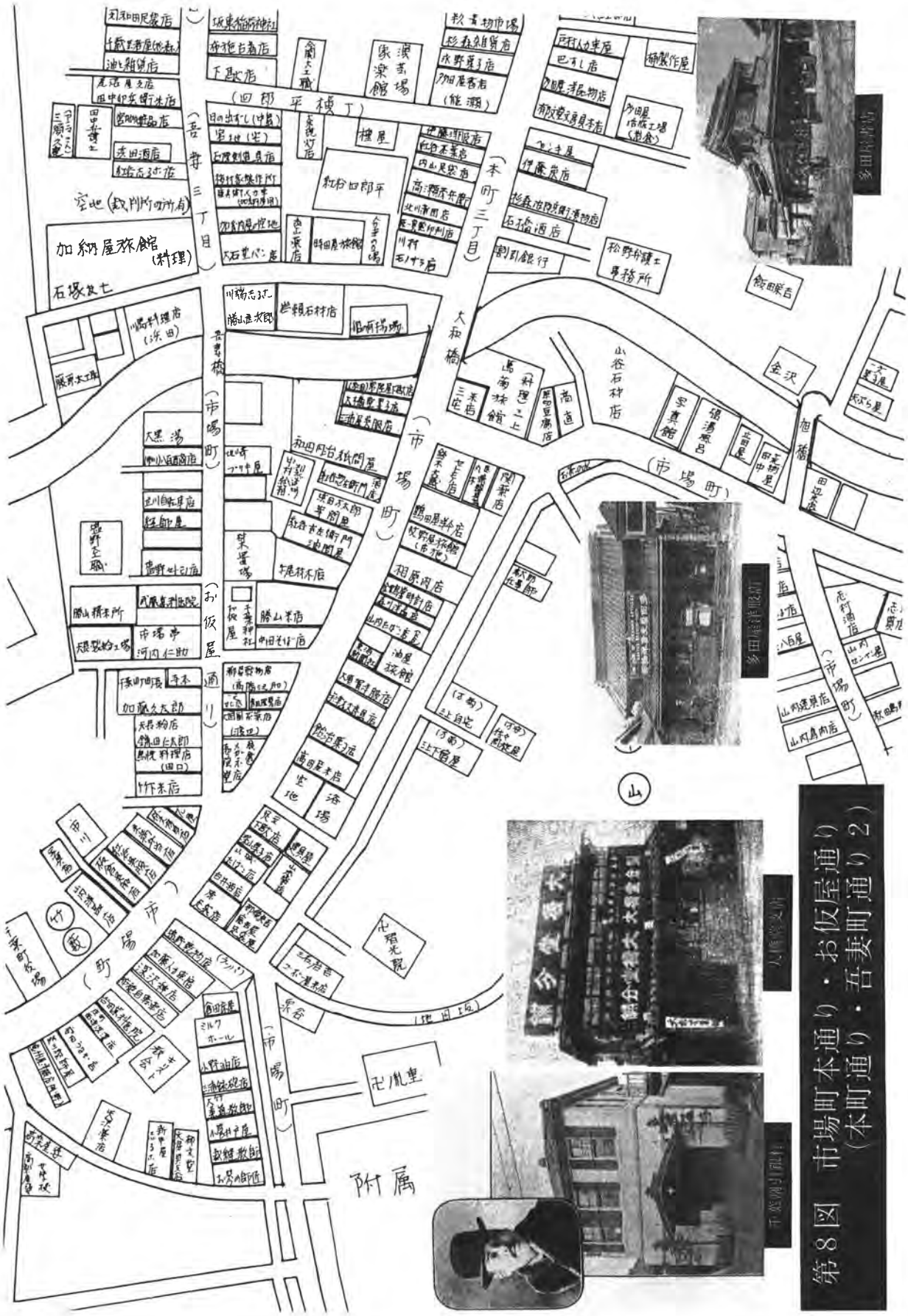


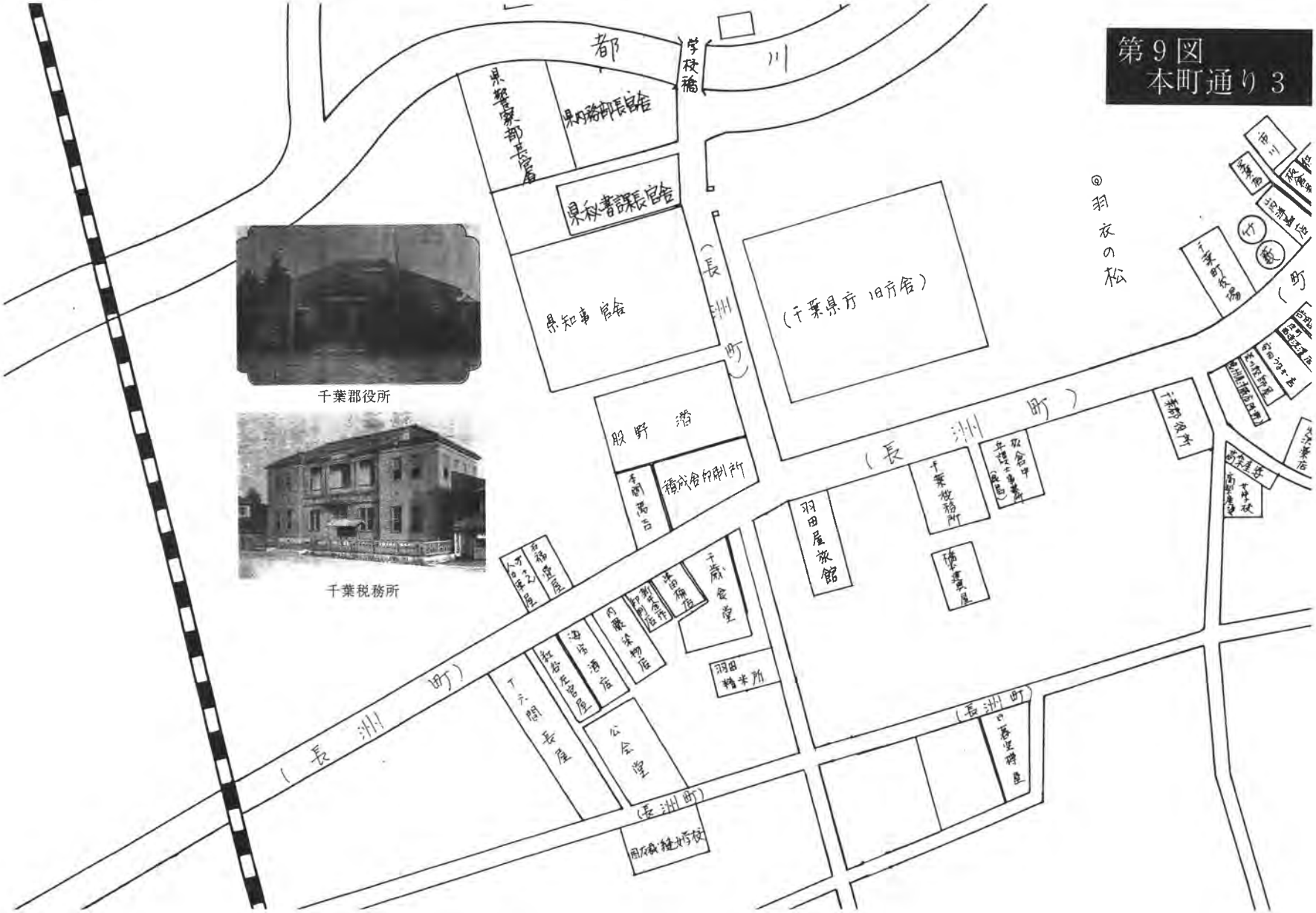
図７，図８と比較してみて下さい。

第7図　本宿通り・吾妻通り

(通町)
(吾妻町一丁目)
(吾妻町二丁目)
(吾妻町三丁目)
(本町一丁目)
(本町二丁目)
(本町三丁目)
(正面横町)
(弘法横丁)
(四郎平横丁)
(横町)
(吾妻町)
(吾妻町)
(吾妻



第8図　市場町本通り・お仮屋通り
(本町通り・吾妻町通り2)


第9図
本町通り3
都
川
学校橋
県警察部長官舎
県内務部長官舎
県税書課長官舎
県知事官舎
(長洲町)
(千葉県庁 旧庁舎)
千葉郡役所
千葉税務所
服野 潤
積成舎印刷所
羽田屋旅館
千葉郡役所
千葉税務所
千歳食堂
羽田精米所
公会堂
千葉郡長屋
千葉町役場
羽衣の松

の事務をも取扱ひ、構内に電話交換所を設けて共に之を管理す。」とある。立真舎印刷製本所は、県の仕事や地図の出版等で名が売れていた。一軒先の小川古着店は質流れの商品を扱ったが、質流れの品は値がよかった。一軒先の大野菓子店の敷地は後年伊勢源になった。

二丁目東側の松山堂洋服店は、新しい形の進歩した店であった。その奥の杉山弁護士法律事務所は「街案内」に「弁護士杉山弥太郎氏の法律事務所は、千葉町本町二丁目に在り。民事、刑事の訴訟は勿論法律に関する一切の事務を懇切丁寧に取扱ふを以、世の信頼する所たり。杉山氏は山武郡大網町出身にして、故父杉山安蔵氏に従ひて夙に法律事務に従ひ、千葉中学校を卒業後上京して英語学校に学び、次いで法学院に入りて学を研ぎ、明治二十二年之を卒業するや直に弁護士試験に合格して、静岡市に事務所を設けたりしが、明治二十四年千葉町に帰住し、現在の所に法律事務所を開設し、爾来非常の繁盛を見つゝ今日に至る。千葉町屈指の信望家にして、現に千葉県会議員の要職に在り。」とある。通りに戻り大野時計店であるが、当時の時計店は懐中時計の他、置き時計、掛け時計を扱っていた。二軒先の金親雑貨店は割合規模の大きい店で卸と小売店であった。隣の初芝玩具店であるが、当時の玩具といえば、張り子の犬、こま、紙鉄砲、いろはかるた等であった。一軒先の長谷川下宿屋と大須賀表具師店の間を入る道路は通称オイラン湯の大風呂湯（木内氏）があったので、大風呂横丁と呼ばれた。また、この横町には田村病院があったが「街案内」に「外科、花柳病、皮膚病、泌尿、生殖器病専門の田村病院は、千葉町本町二丁目川崎銀行向横に在り。院長はドイツ医学博士田村六三郎氏にして、分院を東京市日本橋区呉服町呉服橋医院に設け、院長自ら東京と千葉とを午前午後に分ちて診療に従ひ、且つ日本医学校講師なり。同氏はドイツ国ミュンヘン大学の出身にして、明治三十九年同校医学博士の学位を受けて帰朝するや、翌四十年三月現病院を設け、傍ら外科鑑別診断学、下疳及横痃等の医書数種を著述し皆世に行はる。其外淋病根治療法を発見し、一種の機械を発明して専売特許を得、尚ほ他に数種の医療機械の発明あり。」とある。表通りに戻り大須賀表具師店は額表装、唐紙、障子等を請け負っていた。大和屋米店は、後に現中央大通りの方へ移転した。四軒先の千葉警察署は「街案内」に「千葉警察署は、千葉町千葉本町二丁目に在り、平屋煉瓦造りにして、明治二十年十月の建築に係る。本庁舎、留置場、倉庫其他の附属

建物あり、一切の工事費、当時僅に一万一千七百七十六円に過ぎざりしと云ふ。現署員は署長伊藤警視以下、警部、警部補、巡査部長、巡査、刑事等総員六十余名にして、此外技術員一名あり。平常、此六十余名の全員よく活動するを以て、署務敏活にして好成績を挙げ居れり。」とある。隣の大野丈助請負業は建設業者的な仕事を行っていた。

百瀬酒店の隣に二丁目と三丁目の境を東に入る道路があるが、これを弘法横丁（現在の国道一二六号線－東金街道－）と称した。それは途中にある墓地に弘法大師様がお祀りしてあり、よく人が参拝に行ったのでこの道を弘法横丁と称することになったという。また、弘法大師様の付近から南側に新路地が入っていて、その奥の方に県庁職員の官舎があった。当時この官舎のことを一般の者は官宅と呼んでいたことから、官舎のあたりを官宅と呼ぶようになったという。官舎の北側の筒井医学博士は千葉大学の先生であった。その隣の中村庄太郎は人力車引きであり、後年借家を五軒建てた。岩井質店はこの辺りの地主であった。その南の田中一太郎は、建築の際棟上げをしたり足場を組む作業等を行う仕事師であった。

二丁目西側を見ると、沢部金物店は割合大きな店で戦争前まであった。川崎銀行（現在中央区役所及び市立美

杉山弁護士と事務所

田　村　病　院

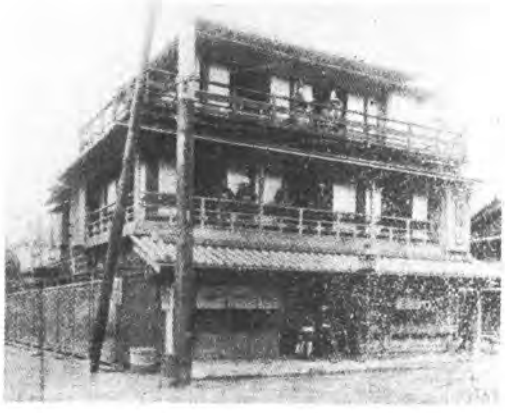
大　野　丈　助　請　負　業

（佐和町　宍倉滉氏所蔵）

術館を建設中）は「街案内」に「有名なる合資会社川崎銀行千葉支店は、千葉町本町に在りて一般銀行業の外に県金庫事務をも取扱ふ。其本店は東京日本橋区檜物町に在つて明治七年十二月の創立に係る。千葉支店長は香取健吉氏にして、職務に忠実勤勉なるの人なり。尚ほ、支店監督としては入江広之助氏在り。これ亦勤勉実直の人にして、香取氏と共に世の信用厚し。同銀行は資本金一百万円にして積立金及繰越金は百五十二万余円に上り、二千万円の預金あり。株式会社川崎貯蓄銀行代理店亦此に在つて、一般の貯蓄預金に対し特別の取扱ひを為しつゝありて、好評湧くが如きものあり。」とある。隣の小林靴店は繁盛し、後に東京の方へ行ってしまった。通りを一本挟み杉田紙店は紙屋として名が通っており、文房具類も扱っていた。北辰病院は「街案内」に「産科婦人科に名高き北辰病院は千葉町本町二丁目に在り。院長は飛田良吉氏にして二名の副院長と数名の医員及び助手、事務員、看護婦等あり。明治二十四年の創立にして、産科婦人科の外、内科、外科、小児科等一般医療に従ひ、蘇我町及び幕張町に分院を有し、前者は加藤国松氏を分院長とし、後者は飛田院長兼務す。本院は一般診療所、外科治療室、婦人科手術室、調剤室等完備し、病室の如きも特等以下各等合せて三十八室六十六床を有し、産室、

川崎銀行千葉支店

北辰病院



旅館松葉館

（『千葉町案内』より）

結核室、隔離室等の設けありて、入院患者に便せり。且つ県下病院中看護婦、産婆の養成を為すは当病院を以て嚆矢とす。」とある。磯貝歯科は煉瓦作りの建物であった。角の松葉屋旅館は「町案内」に「当町繁華の中心点本町二丁目に在る旅館にて、楼は三層の大廈。営業に熱心にして待遇宜しき為め旅客は四季を通じて多く、又主人秋元茂氏は牲義に厚き人。土木建築請負業を営み、千葉税務署等の大建物にて氏の手に成れる物殊に多し。」とある。

三丁目に入り東側二軒目の黒沼漆器店は後に瀬戸物屋に変わった。川越屋呉服店の落合は顔がきいた人物であった。路地をはさんで富原下駄店であるが、店主は富原一族を代表する顔役であり、本町三丁目を代表する人物と言ってもよかった。芳野久蔵鰹節店は問屋業が主で小売は従であった。二軒先の多田屋洋品物店は「街案内」に「多田屋支店洋物部は、千葉町本町三丁目なる紅谷横町の正面に在り。明治三十八年九月の開業にして、洋物小間物、西洋食料品、舶来の洋酒、鬼印コール天足袋の特約販売を営む洋物部の多田屋としては、東金町に其本店を有し、八日市場に洋物部支店、東京横山町に帽子製造卸部あり。千葉県庁内に設けられある共同購買組合の指定購買店にして、中学校、幼稚園、小学生用学校帽制帽類の特別指名を受け、何れも特価商標附にて発売しつゝあり。尚ほ専売特許シンガーホワイトシャツの特約店にして、各学校の徽章制帽等の注文には特価を以て之に応ず可し。」とある。裏の多田屋活版工場も同書に「多田屋印刷工場千葉活版所は千葉町本町三丁目に在り。所主は多田屋書店主たる能勢鼎三氏にして、明治三十七年八月の創立に係り、活版、石版等の印刷、和洋製本、活字販売、和洋紙及び諸官署学校用紙販売等を営む。又、雑誌、帳簿、領収書、会報規則書、小切手、葉書、名刺其他全ての印刷に従ひ、活版、石版、銅版、コロタイプ等何れも鮮明を旨とし体裁善美にして校正は厳密に、期日を厳守して而も価格廉なれば多大の好評を博せり。特に統計書類印刷の如き繁雑のものは、其最も得意とする所なり。」と載っている。通りに戻り杉森治郎兵衛漬物店は千葉町で一番大きい漬物店であった。一軒おいて千葉割引銀行が都川際にあったが「街案内」に「株式会社千葉割引銀行は、千葉町本町三丁目に在り。都川に臨める二階建の洋館にして、明治三十三年七月の創立に係り、普通銀行業一般の営業を為し、全国各地に多数の取引銀行を有し、事務の迅速なると、営業の確実なることを以

て夙に江湖の信用を博し、行務年と共に繁盛に趣きつゝあり。取締役頭取は紅谷四郎平氏にして、千葉町随一の実業家として世に知られ、地方公共事業に対し常に熱心尽瘁され業務に関しても家事を忘る、宜なり四十三年七月創業十周年の紀念日を以て株主総会の決議を経、其精励と徳行とを表彰せられたる事也。」とある。

三丁目西側は尾張屋洋品店からだが、隣の富原八郎右衛門（角八）は千葉町で五指に入る大地主であった。後にここは東金から来た片岡がゲタモ呉服店を営んだ。隣の五十嵐糸店は「街案内」に「五十嵐糸組紐商店は千葉町本町三丁目に在り。和洋糸、組紐、男女羽織紐、婦人用帯止、綿類、和洋裁縫針、真田紐、打紐類及び穴糸、カタン糸、琴三味線糸並びにリボン、造花材料、祝儀用紅白飾綿、同飾糸等の販売を業とす。明治二十八年東京神田区裏神保町に於て開店したるが、三十年千葉町に移転し、以て今日に至るものにして、店主五十嵐良二氏は二十有余年の間斯業に従事せることゝて、多大の経験を有し、商品は凡て正札附にて掛値を附せざるを以て店規とし、特種の便法を以て間断なく流行向きの品を仕入れ常に品切れの憂なきを期し、品質の確実と共に好評嘖々たり。」とある。一軒おいて松月菓子店は餅菓子店であった。二軒おいた矢作屋荒物店であるが、荒物とは生活必

五十嵐糸店

伊藤洋服店

紅茂商店

需品（家庭用品）のことである。半久青物市場は町内の八百屋が仕入れに行く店であった。二軒おいて多田屋書店があり、四郎平横丁を越えて伊藤洋服店があった。「街案内」に「伊藤洋服店は明治二十九年の創業にして、店主を伊藤平次郎氏と云ふ。店長を初め店員裁縫技術員等皆よく新式高等洋服の裁縫に熟達し、普通礼服は元より、勅任官大礼服、通常服、並に僧侶服、旅行服、遊猟服、外套類、陸軍将校及び下士卒服、各警察官服、各学校其他の制服の裁縫を業とし、地質の精選と裁縫の入念とは勿論、スタイルの常に斬新なると価格の低廉なるとを以て名あり。《中略》千葉町の銀座街頭とも称す可き千葉本町三丁目に在り。」とある。二軒おいた紅茂商店も同書に「紅茂商店は千葉町千葉本町三丁目に在り。千葉町に於ける屈指の老舗にして、今より凡そ二百余年前の創業に係る。現店主は高瀬茂兵衛氏にして、総ての漆器塗物類、指物、荒物等の販売業を営み、品物の確実なると、営業に勉強なるとを以て信用甚だ深し。現在の営業は明治十年よりの開業なりと雖も、創業は既に二百余年前、即ち千葉氏時代よりの商家にして、紅茂は其当時よりの家号なり、此の如き旧家の後を嗣げる現店主高瀬茂兵衛氏は性着実にして温厚なる上、正直と熱誠とを以て業務に従ふことを以て倍々世の尊敬を受け、現に千葉町会議員其他の公職に推さる。」とある。北川布団店は飯田布団店に次いで町内で二番目に古い布団店である。隣の原一貫堂印判店は初代が甲州から来たといい、現在もここで営業を続けている。川村物差し店は早く廃業してしまい、その敷地は後に飯豊の砂糖部になった。

四郎平横丁

多田屋書店と伊藤洋服店の間に、本町通りと吾妻町通りを結ぶ四郎平横丁と呼ばれる横丁があった。この名は、明治二十五年の火事で避難路が混雑したのを見た紅谷四郎平が、自家の宅地内を割譲し自費をもって開通させたためついた。ここには演芸場の衆楽館があったが、「町案内」には「吾妻町紅谷横丁に羽衣亭と云ふ寄席のあったのを取払ひ、株式組織にし、資本金五万円を募り、二万円許り投じて劇場衆楽館を建て、紅谷四郎平氏館長となり三上、相原、石橋の諸氏専ら常務に当る事となって、四十一年一月東京より梅幸、菊五郎等を招き舞台開きをなし、興行を続けて居る中、四十三年一月三周年記念興業の際失火し、遂に烏有に帰したが近く同場に再築せられる筈だ。」とある。

五、市場町本通り

本町三丁目から大和橋を越えると市場町に入り、通りの呼び方も市場町本通りとなる。通りの東側であるが、都川際には万菊旅館があった。現在も亥鼻公園の台地下で営業を続けている。鈴木文蔵瀬戸物店も平成三年十二月末まで同所で営業を続けていた。鶴田屋洋傘店は後に大和橋を越えたはす向いの地に移転した。隣の牧野屋旅館とその隣の相原肉店は「街案内」にそれぞれ「旅館牧野屋は千葉町市場大和橋際に在り。明治二十八年十一月の開業にして、主人を布施長吉氏と云ふ。客に対して親切丁寧なるが上、寝具、寝室は元より、食器其他に至るまで清潔を尊び、衛生を重ずるを以て、開業以来日を逐ふて隆盛に趣つゝあり。旅館業の傍ら猪鼻山麓に別館を設けて料理部を開きたるにこれ亦た料理の美味なると、食器の清潔なるとを以て忽ちにして其名を知られ、旅館と共に千葉町第一流の班に列す。主人布施氏よく義侠心に富み、且つ営業に熱心なるを以て数十名の雇人亦常に其旨を体し、只管顧客の愉快と便益とを期しつゝあり。」「千葉町に於て牛肉店と云はゞ、何人も先づ第一に必ず相原に指を屈するならん。此の如く世に知られたる相原牛肉店は千葉町市場に在り。店主は相原島吉氏にして、明治十五年十一月の創業に係る。牛豚肉卸小売の外諸官衙軍隊等の用命を受け、又、西洋料理部及び和食部等の設けあり。〈中略〉本店に於ては昨年来西洋料理部を拡張し、生肉販売と共に、頗る好評を博しつゝあり。」とある。二軒おいた山内煙草店は、後にKB薬局になった。隣は空き地で奥には油屋旅館があったが、ここでは肉も売っていた。空き地の隣は東海新聞社であった。ここも「街案内」に「千葉町に於て発行する日刊新聞中、最も古き歴史を有するものは東海新聞に如くもの無かる可し。同新聞は明治二十一年の創刊にして、初めは東海新報と称せしが、後東海新聞と改題せり。創立者は今の代議士板倉中氏等の自由党同志にして、爾来全く同党唯一の機関新聞たりしが、二十七年に至り加藤久太郎氏の手に帰し、社運益々隆盛に趣き、議論の硬強と報導の迅速とを以て世の推重を受けたり。其後幾多の変遷を経て現今は小沢伝十郎氏の手に帰し、同氏の独力経営する所となり社運依然として隆盛の域に在り、近く更らに一大活躍を為すの計画中なり。」とある。三軒先の高田屋米店は少し移動して現在も営業を続けている。空き地の先には足立下駄店があった。三軒おいた原足袋店は現在の志方写

真館の位置になる。その東側の那須寅吉足袋屋は平成三年秋頃まで那須商店として営業していた（平成三年十二月現在休業中）。表通りの方に戻り塩野金物店はラッパと呼ばれていた。隣の加藤人力車宿は後年タクシー業へと転業した。四軒おいて安田うなぎ屋は創業明治四年で、木更津で営業していたのが同六年千葉県（県庁）の設置とともに千葉町に移ってきたという。二軒おいて千葉郡役所があった。ここも「街案内」に「千葉郡役所は、県庁舎の筋向に在り。明治十一年十一月を以て創立されたるものにして、現庁舎は明治十四年三月県費千六百余円を投じて建築されたるものにして、設備従って不完全なるを免れず。仍て四十四年度に於いて県費一万余円を投じて之れを新築さるゝことゝなれり。所員は郡長神田清治氏以下十七名にして、其所轄町村数は千葉町外総て十八ケ町村を有す。四十四年度経費予算は七千八百余円にして、所員皆熱心事務に従ふの故を以て、甚だ好評あり。所轄町村名は如左。千葉、蘇我、検見川、幕張、津田沼、大和田、椎名、生実浜野、誉田、白井、更科、千城、都、都賀、犢橋、二宮、睦、豊富。」とある。やや離れて県庁の向いに板倉中弁護士事務所があった。隣の千葉税務署も「街案内」に「千葉税務署は、県庁舎前に在り。元収税署と称せるを、明治三十九年十一月千葉税

牧野屋旅館料理部

相原牛肉店

東海新聞社

務署と改称せり。現庁舎は明治四十二年三月、八千七百三十五円の国費を投じて新築せるものにして、階上には会議室、食堂、予備等あり。階下は事務室、応接室、宿直室、物品貯蔵室其他に分かる。職員は島田署長以下二十名にして、千葉市原両郡の税務を管轄し、最近一ケ年（四十三年）間の取扱税額四十八万一千八百六十四円余に達せり。」とある。少し先の羽田屋旅館及び千歳食堂は現在も営業を続けている。三軒おいた海宝酒店の裏の公会堂は今の公民館のような施設であった。

通りの西側であるが、大和橋のたもとには常盤屋下駄店があった。隣の大橋堂菓子店の支店は「街案内」に「和洋菓子舗大橋堂は千葉町千葉に其本店を有し、千葉町市場に其支店を有す。明治六年の創立にして店主は柴野要之助氏なり。和洋菓子製造販売を営み、品質の良好なると、風味の優等なるとを以て顧客頗る多く、常に千葉医学専門学校、鉄道聯隊及び県立各学校等の用命を受く。明治四十二年五月内国製菓品評会に自家製造に係るカステーラを出品し一等賞を授与されたり。現店主は多年東京風月堂米津家に在りて斯業を修業したるもの。品質、製法総て之に準じ、且つ千葉県に於ける風月堂特約店なり。又徒弟養成に意を用ゐ、雇人奨励法の設け等あり。」とある。一軒おいた和田円治紙問屋は大店であり現在も営業している。隣の紅谷惣左衛門酒店（サカソウ）も現在営業を続けている。その奥の中村紙箱製造所は後に本町三丁目の方へ移った。浜田万太郎芋問屋は比較的近年まで営業を続けていた。牛尾材木店は裏に材木置き場のある大きな店であった。勝山米店は後に米屋を辞めて精米所になった。一軒おいた都屋乾物店は市場通り側と、中田蕎麦店側に店の出入口があった。一軒おいた大国園茶葉店は、後にこの地図の鶴田屋洋傘店の所へ移っている。隣の角地には眼鏡の勉強堂があった。お仮屋通りを越えて五軒目の板倉呉服店の裏、市川氏は後に医者になった。その隣の写真屋は千葉で一番古い写真屋だと思うが、早く廃業したようだ。表通りに戻り、山内洋品店の隣は竹藪でその先に千葉町役場があった。「街案内」には「千葉町役場は今の千葉公園内に在りしも、同公園の拡張と新に地を卜して建築するの計画あるとの理由を以て、現今は千葉町長洲に仮役場を設く。《中略》同役場は明治二十二年四月町村制実施に際し設けられたるものにして、千葉町戸籍役場亦之に附属す。吏員は町長加藤久太郎氏以下、助役二名及び収入役、書記等二十余名にして、事務の敏活を図りつゝあり。」とある千葉町役

場の少し先が千葉県庁である。

六、吾妻町通り

一丁目の東側からみてみる。通町通りにも面した角には伊丸屋足袋店があり、隣の明石八百屋店は大きな店であった。八百甚果物問屋は主にバナナを扱っていたが、この当時バナナはムシロに入れて運搬していた。一軒おいた三河屋は登戸からやってきたといい、大店であったが大正の中頃には店を辞めてしまった。「街案内」には「三河屋呉服店は千葉町に於ける最も信用ある老舗にして、吾妻町一丁目に在り。現店主は鈴木利右衛門氏にして、千葉町有数の名望家たり。明治三十一年三河屋呉服店を継承して呉服太物業を営み、努めて斬新流行の珍柄を供ふると共に、地質、染色の確実精巧に留意し、廉価と勉強とを以て名あり。別に質部を設けて親切誠実に業務に従ひ、傍ら万歳生命保険会社千葉代理店、国光生命保険株式会社千葉代理店等を設け、熱誠を以て其業を営む。故を以て信用と好評とは倍々加はり来り、千葉町に於ける第一流の確実なる商店として夙に世に知らる。」とある。後に分家が敷地内に鈴木という写真屋を始めた。大塚猪之助綿店は千葉町で二番目に大きい綿店であった。椎名唐傘店はこの当時どこも同じだが、唐傘、蛇の目傘の製造販売店であった。

西側は角の綿屋浜田次郎兵衛（角次郎呉服店）が「街案内」に「浜田呉服店は千葉町吾妻町一丁目に在り。明治五年の開業にして、最も信用を有する呉服太物商店なり。店主は浜田治郎兵衛氏にして、千葉町屈指の資産家として世に知らる。店主初め店員数十名、皆誠実を以て旨となし、廉価薄利を以て営業しつゝあり。近年一大改築を行ひて店頭を広くし、西京生産の呉服染物類は勿論、其他全国各地の織物生産地と直接取引を為し、品質、染色等極めて確実なるものを吟味して販売し、只管顧客の徳用と経済とを図りつゝあり。されば商業日に日に繁盛に赴き、今や千葉町随一の呉服店として好評を博するに至れり。」とある。砂糖三河屋は綿屋の分家である。一軒おいた長谷川染物店は藍瓶が二十位あり、裏の空き地に染物を干していた。江沢タンス店は製造、小売、卸を行っていた。鈴木源兵衛呉服店は三河屋の一番番頭が創業した店である。浜田金物店も三河屋の三番番頭が創業した店である。

この当時、商業の中心は吾妻町二丁目と正面横町であっ

た。二丁目東側の池田精美堂化粧品店は三河屋の番頭が創業した店であり、現在も営業を続けている。西善米店は割合大きく営業していた店であったが、早く店じまいして、こども屋となった。山本万次郎煮豆店は千葉の草分けの店であろう。湯浅材木店の敷地は後に奈良屋になった。この店の横から本町通りに抜ける通りの南側にある熊野屋漬物店は店の井戸からこんこんと水が湧いていた。吾妻町通りに戻り藤代弁護士の隣の吾妻倶楽部は一流の料理屋で、「街案内」には「割烹店吾妻倶楽部は斎藤よね子の管理経営するところにして、千葉町吾妻町に在り。明治三十年の創業にして爾来大に繁盛を極め、今や千葉町屈指の料理店として、世人の好評する所なり。其料理は最も新鮮にして風味亦頗るよろしく、諸器物は総て清潔にして新調の者を使用し専ら衛生上に意を用ゐ、然も価の低廉なることを斯業に珍らしき程にして其勉強は寧ろ予想以上と云ふ可し。店主よね子以下女中雇人等皆よく誠実業に従ひ、客に対して甚だ親切なるを以て益々隆盛に趣きつゝあり。入浴は随意にして、普通仕出し及び出前等の需めにも勉強して之に応じ居れり。」とある。後に隣の藤代弁護士事務所も同倶楽部の敷地となった。一軒おいて塩田洋服店は「街案内」に「塩田洋服店は千葉町吾妻町に在り。明治三十一年の創立にして諸官署及

三　河　屋

浜田呉服店

吾妻倶楽部

び各学校制服並に文武官服装の裁縫業を営む。店主は塩田鹿蔵氏にして利欲に恬淡なる人。常に誠実勉強を以て旨とし、店員裁縫技術員等数十名を使役して専心斯業に従ひ、裁縫の常に最新流行型なると、地質の精撰確実なるとを以て夙に名あり。加ふるに価格頗る低廉にして利を貪るが如きこと無く、正直を専一とするが故に非常の信用を有するに至り。倍盛大に趣きつゝあり。且県下の実情に顧りみて月賦販売の便法を設け、新調者の便宜に供せり。」とあり、土地では顔役であった。矢部人力車宿は蓮池を控えて千葉町では大きな店であった。

二丁目西側の鈴木古着店は後に通町にでて、更に東京に行き、再び千葉の浜野に帰ってきたという。その西側のドブ湯風呂は建物が古いためこう呼ばれた。通りに戻り宮島しるこ店は奥さんが店番をし、主人は便利屋といい注文主から頼まれた品を代わって東京に買いに行く仕事をしていた。松本建具店は家具製造職人であり、店では商いも行っていた。現在も家具屋として営業している。富沢種屋は「町案内」に「主人富沢源太郎氏は、農産業に造詣深き人。本店にて発売する特許清水式噴霧器、特許測量縄、其他蚕卵台紙、製糸器一式、鋤鍬等の一般農具は廉価と確実を以て評判好く、其他本店にては種豚の分譲、蚕糸時報の発刊等をなし、広く本県農産業の伸張

塩田洋服店

富澤農具店
（『千葉町案内』より）

浩生医院と武本為訓氏

を計りつゝあれり」とあり、現在も営業している。隣の市原経師屋は現在の市原紙問屋の初代の店である。大森源次郎問屋は大きな店であった。魚金魚店は現在はスシ屋になっている。二軒おいた付木屋畳表店は畳の表のみを扱う店であり、材料は浜名湖のあたりから仕入れていたようだ。一軒おいて殿台屋酒店は現在もここで営業を続けている。

吾妻町三丁目に入り東側をみると、よろずや足袋店は青果物問屋、喜勢八十八のサッカケ（軒下をかりて営業する）であった。武本浩生医院は北辰病院の医者を勤めていた武本為訓が初代で、ここに開業した。眼科医としては千葉町の草分けである。「街案内」には「武本為訓氏の院長たる浩生医院は、千葉町吾妻町に在って旅館梅松楼に相対す。明治三十五年の開院にして内科、外科及び小児科、婦人科其他一般の医務診療に従ふ。院長武本氏は夙に東京英語学校に学び、後、東京医学専門学校済生学舎卒業後直に医術開業試験に合格し、次いで伝染病講習所に入りて研鑽を積み北辰病院に副院長たりしが、三十三、四年には千葉県及び警視庁検疫医となり、三十五年始めて千葉町に浩生医院を開き、熱誠と親切とを以て患者の診療に従ふが故に、仁名忽ちにして嘖々たるものあり。遂に千葉町第一流の流行医として今日の隆盛を来たすに至りぬ。」とある。一軒おいて青木人力車宿は矢部人力車宿から独立した人で台数も半分位であった。郁文堂は新聞取扱所（配達元）で「街案内」に「千葉県下に於ける新聞売捌店中、規模の大を以て其首位を占むるものは郁文堂新聞店なり。同店は松田隆氏の独力経営する所にして、千葉町吾妻町三丁目に在り。東京及び地方の諸新聞雑誌を迅速敏活に配達し、代価の低廉と配達の確実とを以て夙に世に重んぜらる。現店主松田氏は市原郡八幡町の人にして、明治三十七年、極東の風雲漸く急に趣き日露の国交将さに破れんとする時、機を見るに敏なるの氏は奮然起て新聞売捌業を八幡町に開始し、翌三十八年八月更に千葉町新聞売捌業合資会社立真社を買収して、郁文堂と改称し大に業務を拡張し多大の信用を博するに至れり。」とある。一軒おいて坂東稲荷神社は現在もここにある。布施古着店も現在質店としてこの地で営業している。四郎平横町をはさんで日の出寿司は早く廃業してしまった。一軒おいて石原剣道具店は剣道具の他に錦絵を扱っていた。二軒おいて角の大石堂パン店は千葉町では一番大きく古い店であった。通りをはさんだ川端しるこは、「千葉の川端しるこ」として名が通って

いた。

三丁目西側は正面横町を越えて梅松屋旅館があった。ここは千葉町でトップクラスの旅館で「街案内」には「千葉町の梅松屋と言へば、主人三和弥三郎氏と共に其名頗る高く、県下随一の旅館にして其本店は千葉町吾妻町に在り。総二階の大建築にして、室数甚だ多く、別に料理部紅翠館ありて、梅松独特の調理を味はしむ。別荘も亦千葉町第一の建物にして料理を専業とし、其大広間は二百数十畳敷にして、数百名の大宴会場に適し、別に数棟の離座敷ありて美味佳肴を供給し、価格亦甚だ廉なるを以て、華客常に絶えず、旅館と共に流石は第一流たるに恥ぢざるの隆盛を見る。料理部も旅館部も器具寝具の高尚にして清潔なるは勿論、待遇懇切丁寧にして些も遺漏なきを期せり。」とある。旅館は後に建物を改造して商店に貸し「梅松街」と呼ばれた。現在も中央一丁目で料亭他として営業している。吾妻堂飴菓子問屋は飴の製造販売、卸し、小売りをしていた。この当時飴のことを鉄砲玉と呼んだ。海老屋旅館は「街案内」に「旅館海老屋は千葉町吾妻町三丁目に在り。料理店をも兼業す。現主人は土屋かつ子にして、明治四年の開業以来、地の利を占むるが上に顧客の取扱ひ振り親切なるを以て常に大に繁昌す。千葉町中には旅館、料理店等頗る多しと雖

郁文堂新聞店

梅松屋旅館

海老屋旅館

も、人の之を口にするに当りては、必ず先づ海老屋を以て片手の内に指を屈す。之を見るも、如何に同店が世の信用を有するかを知るに足る可し。」とある。一軒おいた和田足袋店は千葉町では一番良い製品を製造していたと思う。二軒置いて尾張屋支店は胚芽米を早くから売っていた店である。宮地化粧品店は付添い看護婦の斡旋業が主で、小さく化粧品を扱っていた。二軒おいて加納屋旅館があった。ここは軍人の利用が多かった。「街案内」に「加納屋は千葉県第一流の旅館及び料理店にして千葉町吾妻町三丁目に在り。店主は石塚友七氏にして屡々高位貴紳の宿泊せられたる光栄を有し、寝具諸器具総て清潔にして心地よく、数十の客室設備整ひ、調理の滋味にして低廉なる処既に定評あり。料理部は楽賓館と称し、割烹の巧みにして風味よく滋養に富むと、客に対して懇切丁寧にして、よく意の行届くとを以て多大の好評を博し、信用亦頗る厚し。主人石塚氏は営業に熱心なるの人にして余暇書画骨董を愛玩して之に精通し、其所蔵する所の佳作名品甚だ多く、海水浴地たる稲毛には有名なる支店海気館を有す。」とある。都川沿いの川万料理店は川魚料理で名を売っていた。

加納屋旅館

日の出すし
（『千葉県共進会場案内図』より）

武藤歯科

七、お仮屋通り

吾妻町通りは、明治二十五年の火事の後、架けられた吾妻橋を渡ると、お仮屋通りと呼び名が変わる。東側の千葉神社お仮屋は現在もこの地にある。西側の五軒目にある経師屋は現在もここで営業している湯川表具店である。少し奥まった所にある塩野大工職は現塩野金物店の先祖にあたる。武藤歯科医院は「街案内」に「歯科医として其の名声県下に轟き渡れる武藤歯科医院は千葉町市場に在り。院長は武藤切次郎氏にして其本宅を千葉町官宅に有す。治術の巧妙にして効果確実なると、患者に対して親切誠実なるとを以て夙に世の信頼を受け、名声嘖々たり。武藤氏は豊前国中津の藩士にして、十二才の時大阪に遊学し、同市興医学校に入り、研鑽多年二十一年東京に出で、我国歯科医の泰斗小幡英之助氏の門に学び二十七年歯科医試験に合格して二十八年千葉町に開業以来、患者を治療すること実に二十万の多きに達す。本県歯科医師会々長にして医員助手数名を有し、隆盛を極む。」とある。一軒おいて市場亭は簡単な寄席で、ちょいとした芸人がやってきた。加藤久太郎は明治三十九年に六代目の千葉町長に就任し同四十四年八月まで在職した。一軒おいて鳥悦料理店は現在もここで営業している。

八、通町通り

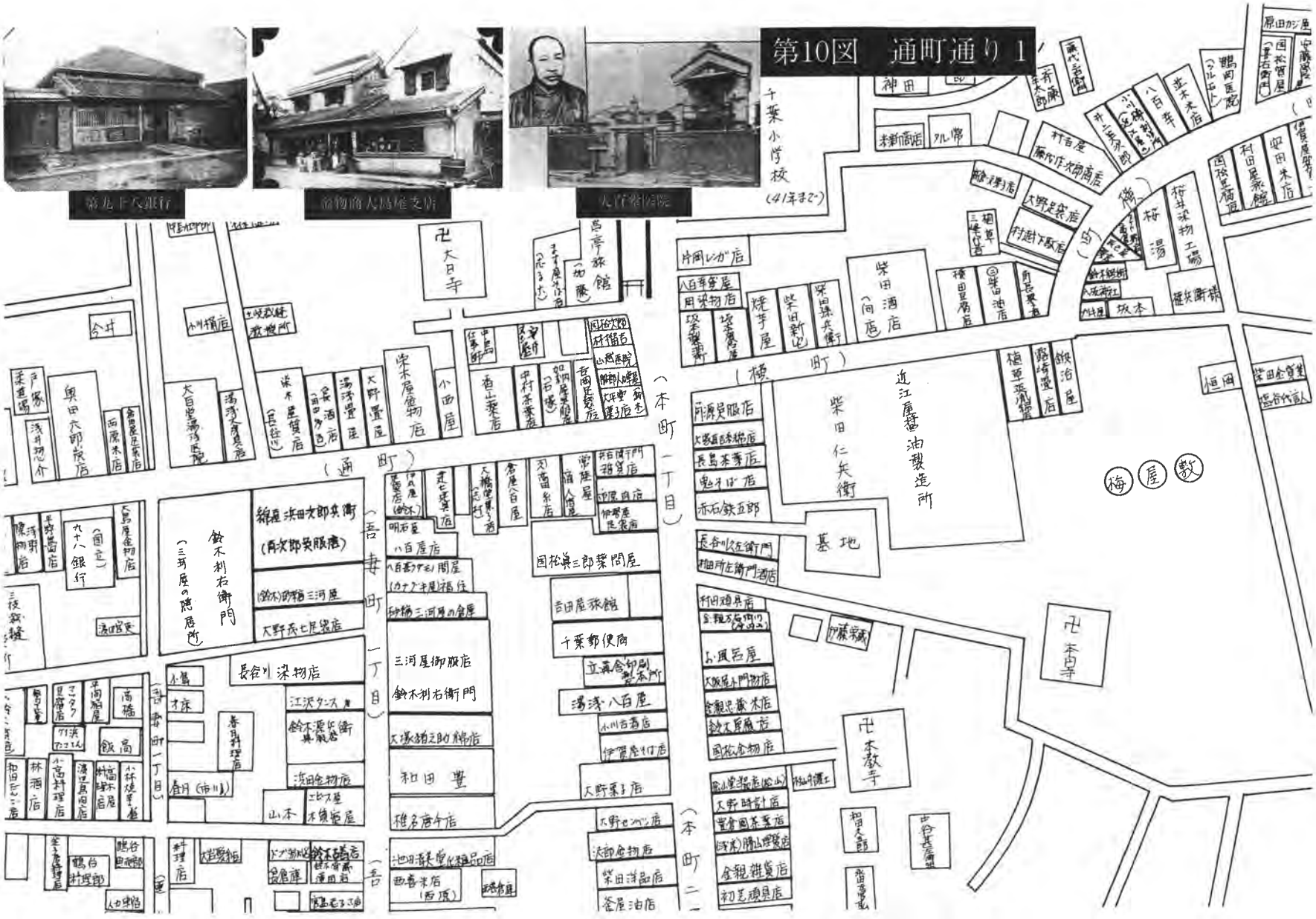
通りを広小路（本町一丁目）よりの南側から見てみる。角から三軒目の高田屋糸店は、木綿、絹糸の販売。大橋堂菓子店は餅菓子店で品の良い店であった（39頁参照）。吾妻町通りを越えて三河屋の隠居があったが、この家は御影石の塀をめぐらしていた。ここは後に一力という料理屋になった。蓮池通りを越えると大島屋金物店があった。「街案内」には「金物商大島屋支店は、千葉町通町千二百六十二番地に在り。其本店は山武郡東金町なる金物商大島屋本店にして、店主を佐久間七右衛門氏と云ひ、本県屈指の金物商にして、世の信用頗る厚き老舗なり。千葉町の支店は明治十六年の開設にして、営業品目としては銅鉄物類、打刃物類、建築用金物類、壁用品、セメント、硝子板及び度量衡器等の販売業を営み、品質の確実と価格の勉強とを以て夙に其名を知られ、且つ、品物の豊富なると、選択に随意なることを以て顧客甚だ多く、店頭常に市を為すの盛況を呈し居れり」とある。第九十八銀行は敷地の前に掘抜き井戸があった。「街案内」に「株式会社第九十八銀行は千葉町通町に在りて安田関係銀行の一なり。明治十一年六月国立銀行条例に依りて創

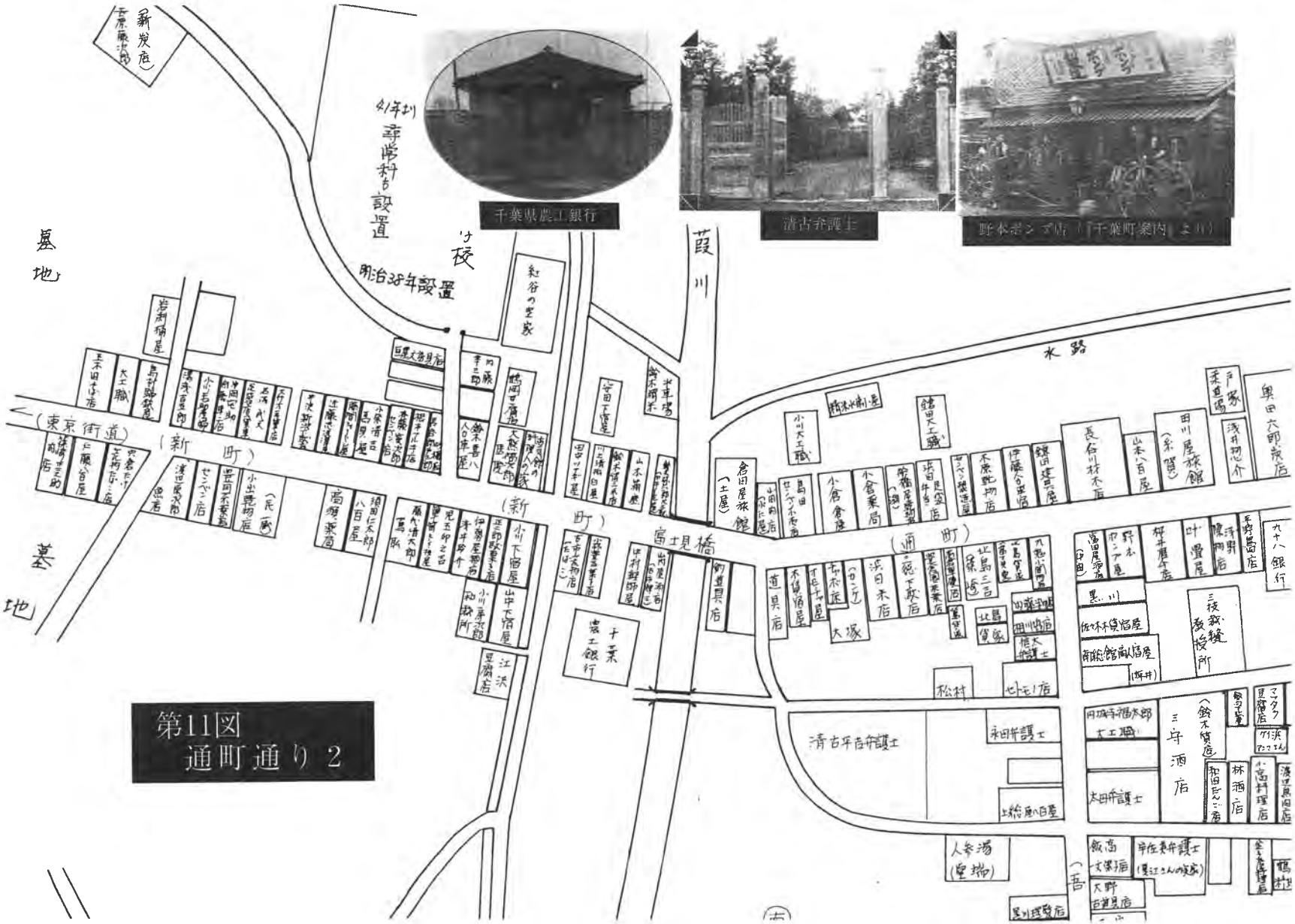
第10図　通町通り 1

第九十六銀行

織物商大阪屋支店

大正紡績工場




千葉県農工銀行
清古弁護士
野本ホンマ店（「千葉町案内」より）
明治38年設置
校
殿川
水路
（東京街道）
（新町）
（通町）
富士見橋
墓地
墓地
千葉農工銀行
清古平吉弁護士
三年酒店
人参湯（皇湯）
三枝教授所
九十八銀行
倉田屋旅館（土屋）
田川屋旅館（糸賀）
長谷川材木店
小倉商業
小倉乗馬
小倉倉庫
大塚
松村
七トモリ店
道具店
高橋乗馬
小出農物店
小川下宿屋
山中下宿屋
江洲豆腐店
紅谷の生家
⑩弥陀山刑場跡

第11図
通町通り2

立し、第九十八国立銀行と称せしが、二十九年九月株式会社組織に改め普通銀行等一般の営業に従ふ。資本金は五十万円にして預金約百万円に達し、営業方針及び扱振りは総て安田式の堅実懇切を旨とするを以て多大の好評と信用とを博せり。為替取引先は全国枢要地及び朝鮮等に在りて其取引先の多きを県下第一なり。安田関係銀行なるを以て如何なる多額の取引にも応ず可く。監督は安田善三郎氏にして頭取は奥山三郎氏、支配人は栗原久作氏皆令名ある人々なり。」とある。浅野際物店は和帳（帳簿）を扱っていた。桜井唐傘店は千葉町で一番大きかった。野本ポンプ店は「町案内」に「県下各郡の消防組合漸く整ひ、喞筒の需用増加せるに共ない本店の業は益々盛んなるに至れり」とある。銀座通りを越えて九鬼小間物店は簪、櫛を扱っていた。富士見堂は和菓子屋で父の貸家に入っていた。隣が父の家である。高倉草履店は綿屋（角次郎呉服店）の番頭が始めた店である。この辺りは現在パルコになっている。富士見橋を越えて二軒目の角を入ると奥に、千葉県農工銀行があった。「街案内」には「千葉県農工銀行は、千葉町新町に在り。明治三十一年二月十日の設立にして資本金八十万円、積立金二十万円を有す。現行舎は明治三十八年八月買収したるものにして、行員には頭取宇佐美敬三郎氏外十名あり。営業種目は不動産担保年賦貸付、同定期貸付、公共団体・産業組合其他の貸付並に諸預り金、及び保護預り、動産担保割引手形等にして、県金庫事務をも取扱ふ。取引銀行は川崎銀行千葉支店、安房銀行、佐原興業銀行外十四行にして一期間の経費予算は一万七千八百余円なり。宇佐美頭取就任以来行務の刷新を為し、大に世の信用を博する至れり。」とある。銀行の東側には一般人は通れなかった橋が葭川に掛かっていた。この橋の東側には清古平吉弁護士の大邸宅があった。「街案内」には「千葉町弁護士中、最も成功せるは何人かと問はば、何人も清古平吉氏と答へむ。氏は明治元年に千葉町寒川に生れ、夙に志を立て、苦学勉強し、明治二十四年を以て今の中央大学即ち当時の英吉利法律学校を卒業し、二十七年弁護士となるや、直に千葉町に開業し、其法律事務所を同町に置き、熱心誠実以て民刑訴訟外一般法律事務の依頼に応じ、周到緻密の注意を以て事に当りしかば、忽ちにして盛名を斯界に馳するに至りぬ。現事務所は明治三十六年新築に係り、庭園の風致頗る宜しく池畔数百種の杜若、五月の水に映じて妍を競ふの時は、美観云ふ可からざるものあり。」とある。通町通りに戻り少し登戸より

には児玉卯之吉箪笥兼染み抜き屋があったが、後に染み抜き専門店となった。

通りの北側は、広小路の角に人形焼きが主の太平堂菓子店があった。この店は後に新町に移転している。吉岡足袋店は足袋、股引、脚半、腹掛等を紺、ねずみ色の布を用い仕立てて販売した。中村茶葉店は現在もここで営業している。二軒おいて栄木屋金物店は栄木屋質店の分家であるが大きな店であった。二軒おいた山長酒店は現在セブンイレブンとなって営業している。栄木屋質店は大店で地主であった。質屋は一見普通の家でのれん位しか掛かっていなかった。裏には土岐裁縫教授所があった。湯浅文具店であるが、この当時の文具は和帳、帳簿、墨、筆位であった。大百堂湯浅医院は葭川の氾濫がこの当時年に三回位あったが、その際池の鯉が逃げたと言われた。「街案内」には「大百堂医院は千葉町通町に在って院長を湯浅奕氏と云ふ。明治三十年の開院にして、内科外科其他一般医療に従ふ。院長湯浅氏は千葉医学校の出身にして、同校卒業後県立千葉病院に奉職すること二十年間、或は木更津分院医員となり、或は千葉県地方徴兵委員となり其他千葉医学校助手、千葉県種痘担当医員、千葉警察本部医員、司療医等たりしが、独立して自ら医院を開きて後は郡、県医師会の幹事、副会頭等に挙げられ、郡会議員其他の公職にも屢々選挙されたるは枚挙に遑あらず。之を以て見るも如何に世の信用あるかを知るに足る可く、患家の信頼亦極めて大なり。」とある。二軒おいて奥田六郎炭店は大店であった。この当時炭俵はススキの軸で出来ていて、上下が細い木で作ってあった。一軒おいた田川屋旅館は高級商人宿風の旅館であった。一軒おいた長谷川材木店の敷地は後に千葉銀行中央支店（昭和六十二年五月まで、現在はツウィンビル）になった。一軒おいた伊藤人力車宿は雇人がやってきて人力車を引いたが、客を乗せない時は、店の中に人力車を入れていた。この店の西側、西北側にかけての商店・土地が大正十年七月に京成千葉駅になった。同駅が昭和三十三年六月現在地に移転すると跡地は中央公園に整備された。四軒おいた小倉薬局は、隣に倉庫がある大きな店であった。一軒おいて山田肉店は豚肉専門店であった。葭川沿いの倉田屋旅館は二階建てであった。富士見橋を渡って二軒目の山本箱屋は、小物入れの箱を作っていたが後に椅子屋になった。二軒おいた田中ツケギ屋であるが、ツケギとは縦十五㎝、横五㎝位の折れやすく薄い板の先に硫黄の付いているマッチの前身のようなもので、これ

を販売していた。六軒おいた小柴馬具店は馬の背に組んで載せる木の枠を作っていた。藤間シート店はテントのシートを扱っていた。近藤忍洗濯屋、この当時は手洗いが普通であった。二軒おいた大竹万年筆店、万年筆は高級品であった。

九、佐倉街道

この通りは佐倉へと通じ江戸時代このかた現在も主要道の位置にある。現在は国道五十一号線と呼ばれており、広小路が起点となっている。軒を並べる商店には割合大きな店が多く、佐倉街道沿いの村々からの買物客が比較的多かった。通りの南側からみてみると角源呉服店の隣、近江屋醤油製造所（柴田仁兵衛）は千葉町一番の企業家、資産家であった。「街案内」には「近江屋本店は千葉町屈指の旧家にして、千葉町横町に其居を構ふ。代々醤油醸造業を営み現主柴田仁兵衛氏亦祖先の業を継いで之に従ひ、其醸造に係る上醤油亀甲柴の声価は、千葉、東京等を中心とし、関東各府県に最も高し。聞ならく、同家に於て醤油醸造業を創始したるは明和二年にして、爾来今日に至る迄子孫連綿之を相継ぎ、而も、其精醸改良に留意するを以て、品質弥々良好にして内外国博覧会より有功賞を授与されたる事枚挙に遑あらず。東京荷受問屋には京橋区富島町中井半三郎、日本橋区小網町高梨仁三郎、京橋区南新掘蜂須賀与平其他数店を有す。」

植草英胤綿店は千葉町で一番古く、また大きい綿店である。少し先の八坂神社は現在もこの地にある。桜井染物工場は現在もこの地で営業している。高田屋際物店は後に通町にも店を出した。

通りの北側を広小路の方から見ると、近江屋の反対側には柴田の分家が五軒程あった。小川樽製造所は近江屋で使う樽を作っていた。その裏には大和裁縫女学校があった。少し先に小川伝兵衛樽屋があったがここも近江屋の樽を作っていた。

十、正面横町および寒川（本千葉）停車場通り

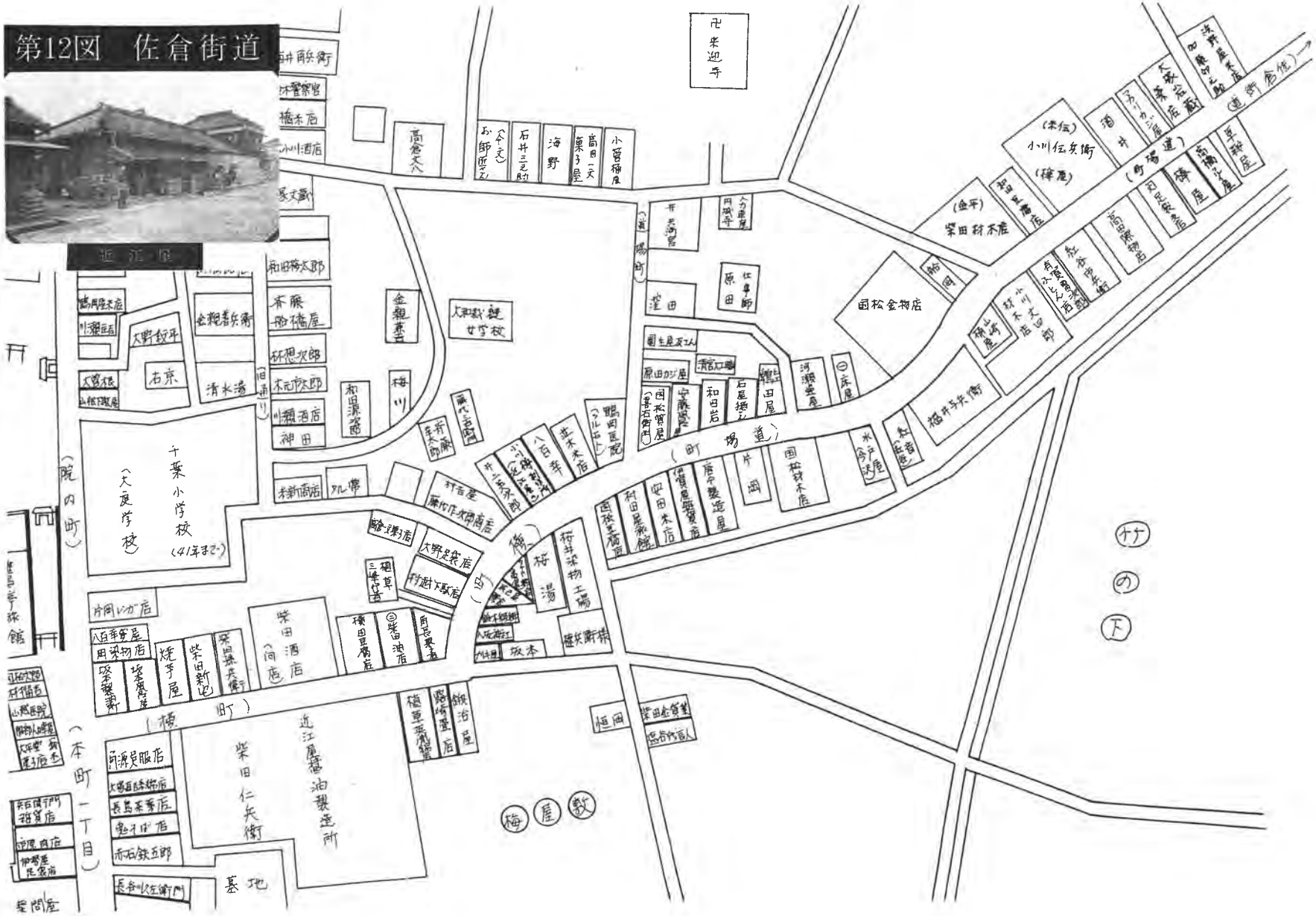
本町通りと吾妻町通りを東西に結び、各二丁目と三丁目の境をなすのが正面横丁である。この道は元々吾妻町二丁目にあった不動尊堂の参道的な道であり、不動尊堂の正面までの道であったのでこの名で呼ばれたのである。不動尊堂からは道が細くなり、北に行く道は蓮池通りにつながり、南に行く道が不動尊堂より先に行く道であった。概念図には明治三十一年に完成した寒川（本千葉）

停車場までの通りを書き込み、不動尊堂もその道の北側に移動した形となっている。不動尊堂は現在はさらに扇屋ジャスコの西側に移動している。

寒川（本千葉）停車場の方から南側を見てみる。まず、本千葉停車場であるが「街案内」に「鉄道院の所管房総線の枢要駅たる本千葉停車場は、千葉町寒川に在り。此地附近一帯、此駅を設けられて以て、地名を称するに本千葉を以てするに至れり。其設立は今より二十余年前、私設房総鉄道株式会社の創立当時に属し、後同会社が国有として買収されてより鉄道院に属せり。目下同駅の乗降客数は一日平均五百五十余名にして、貨物取扱量数は同じく一日平均約四十噸なり。而して一日間の列車発着数は、単行機関車を併せて五十六回にして、駅員は安川駅長以下助役其他十三名、皆職務に勉励にして、乗客に懇切なれば至つて好評を有せり。外に機関庫及び保線区有り。」とある。現在のセントラルプラザの駐車場付近に建っていたのが日本赤十字社千葉支部である。「街案内」には「本千葉停車場の前方に当り一大洋館の聳ゆるものあり。これ日本赤十字社千葉支部の事務所にして、明治三十五年六月起工し、同三十八年六月竣工す。之に要せる工費一万二千三百三十円にして館内に上間、次の間、会議室、応接室等あり。別に建築費五千五十六円余を要して設けたる支部控所あり、室七間を有す。而して日本赤十字社千葉支部の創設されたるは明治二十九年七月一日にして爾来年と共に隆盛に趣き、現在三万五千九百余名の支部社員と、八百八十三名の職員とを有せり。」とある。一本橋（この当時は簡単な木橋）を渡り五軒目の小高建具屋は、現在もお仮屋通りで営業している。新通町通りを越えて、大川屋染物店も現在市場町でうなぎの安田の近くで店を開いている。海宝紙店はパルコの中で文房具店として営業している。金虎の家は芸者屋であった。新柳菓子店は現在も営業しているが、「街案内」に「菓子舗新柳は、和洋菓子製造販売を業とし、其本店は千葉町吾妻町三丁目不動前に在り。明治三十五年六月の創業にして、店主を水野熊太郎氏と云ひ、千葉町に於ける第一流の菓子舗なり。其製造に係る和洋各種の菓子は、風味の絶佳なると、意匠の斬新なるとを以て特に名あり。曾つて一府九県連合共進会に対し、自家製造の羊羹を出品したる時の如きも品質優良の故を以て、二等賞を得、農商務大臣より之が賞牌を授与されたるを見ても、如何に同店の製菓が世の嗜好に適し、且つ優良なるかを推知するに足る可し。」とある。万盛庵そば店は洋食も兼ね

第12図　佐倉街道

近江屋



第13図　本千葉停車場通り２・正面横町

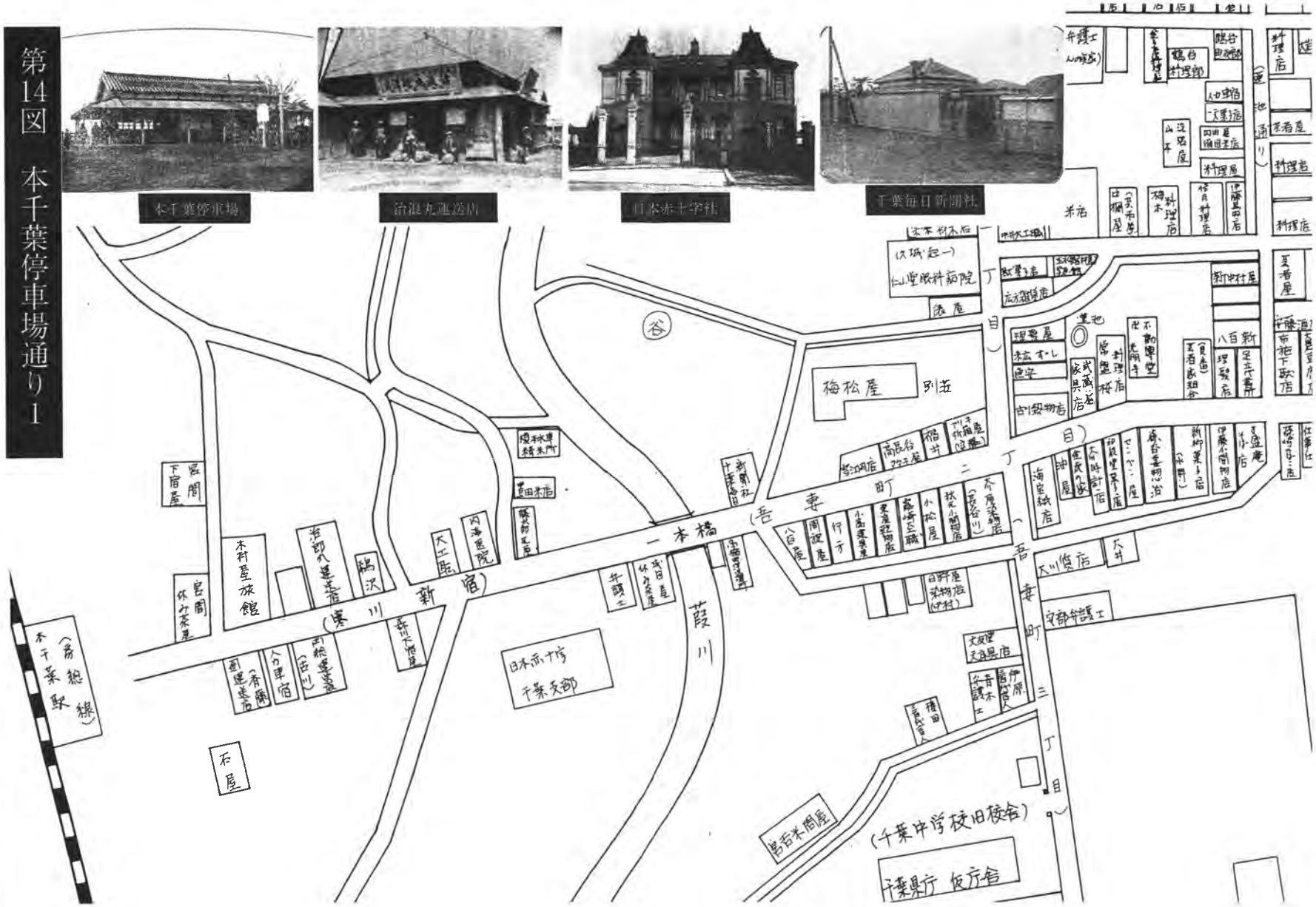
第14図　本千葉停車場通り1

本千葉停車場

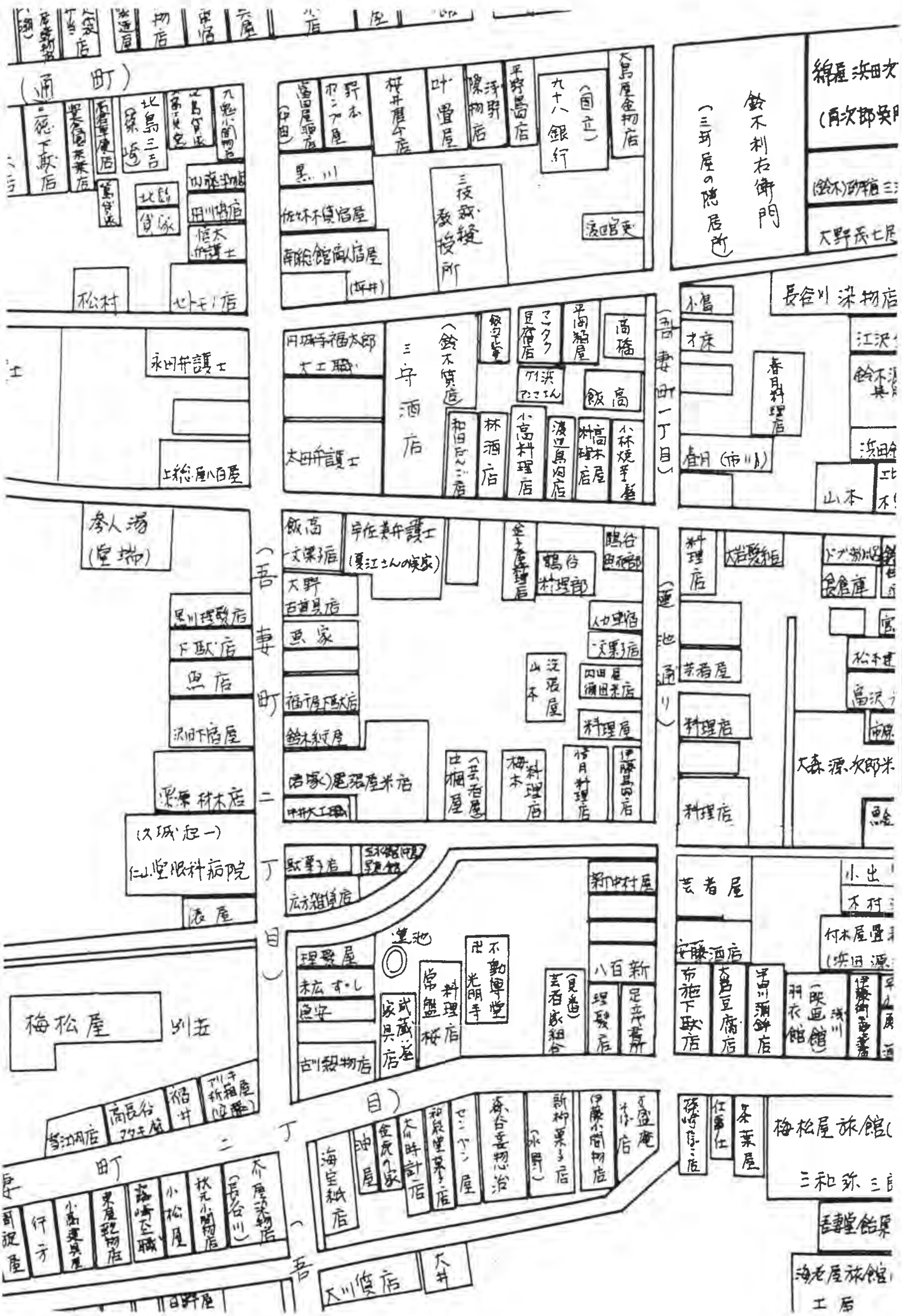
治浪丸運送店

日本赤十字社

千葉毎日新聞社



第15図 蓮池・蓮池通り・新通町通り



た店であった。吾妻町通りを越えて、並木肉店は「街案内」に「並木牛肉店は千葉町正面横町に在りて、明治十六年の開業に係る。現店主は並木まつ子にして、牛肉、豚肉、鳥肉等の販売を為し、且つ之が料理店業をも営む。就中、其牛肉は最も得意とする所にして、西洋料理をも調理して注文に応ず。而して千葉町に於ける肉商としては、此店を以て第一の祖とし、他は其後の開業に係るものなりと云ふ。生肉の新鮮にして、品質優良なるは勿論、誠実勉強を以て其本旨となすを以て、営業ます〳〵繁栄に向ひ、顧客の常に絶えたることなく、数名の女中及び雇人を置きて、よく其便を図り好評を受けつゝあり。」とある。並木は東金から来た家で現在は料理屋として中央四丁目で営業している。大阪屋染物店は主人は魚降森という雅号を持つ画家で、店は番頭にまかせていたようだ。兵隊床は千葉町では名がとおっていた床屋であった。

通りの北側を寒川（本千葉）停車場側からみてみる。治郎丸運送店は「街案内」に「治郎丸運送店は本千葉停車場前に在り。海陸百般の運送業及び鉄道貨物取扱業を営み、其本店は寒川大橋際に在りて東金停車場前にも支店を有す。千葉県に於ける運送店中最も古き歴史を有するものにして、今より凡そ百数十年前に開業し、当初は海陸回漕業を営みしが、其後房総鉄道開通に及んで、本千葉停車場前に開店されたるものなり。現店主は鈴木清氏にして、業務に熱心なるの人、取扱貨物に対しては周到なる注意と懇切とを尽すを以て信用甚だ大なり。特に世に名高き治郎丸倉庫は幅七間長さ六十間の大倉庫にして、都川に臨み房総海岸線に連りて設けらる。」とある。一本橋を渡ると千葉毎日新聞社があった「街案内」に「千葉毎日新聞は明治三十六年五十嵐重郎氏の創刊する所にして、千葉町に於ける日刊新聞中最も新進の鋭気に富み、紙面の婉麗にして鮮明なるは何人も推服する所なり、創刊以来多大の信用を博し、社運頗る繁栄に趣き、将に大飛躍を試みんとせるに際し、祝融の災に罹りて烏有に帰したりしが、更に之に屈せず明治四十三年千葉町本千葉通りに移転し、社業一層の拡張を行ひ、以て現今に至り倍々隆盛に進みつゝあり。尚ほ新聞業の傍ら、千毎活版合資会社を組織し、一般印刷業の依頼に応じ、迅速と勉強とを期して多大の好評を博し、これ亦弥々盛運に向かいつゝあり。」とある。現在のセントラルプラザの位置には、梅松屋別荘があった。その南側の雪江肉店は現雪江ハムの前身である。高長谷タタキ屋は、砂利、石灰等を用いて建物の下、塀の下等の基礎を固める仕事

をしていた。現在は長洲で建築資材店を営業している。新通町通りを越えて三軒目の常盤楼料理店は「街案内」に「料理店常盤楼は、千葉町吾妻町二丁目不動境内に在り。家徳邦之助氏の経営する所にして、明治十年の創業に係る。同楼は千葉町に於ける鳥料理の元祖にして、特に衛生上に留意し、器物の如き総て清潔を旨とせり。亦別に芸妓部の設けありて、数名の妓を有す。これ千葉町に於ける芸妓家の草分けにして、之より看板を分てる者甚だ多し。客に対しては能ふ限りの親切と丁寧とを以てし、随時入浴の便ある等、好評従て高し。」とある。明治二十七年に組織された見番（芸者屋組合）は、連絡を受け次第連絡元に芸者を送り出す斡旋業である。芸者には箱屋が箱（三味線）を持って一緒に行った。蓮池通りを越えて四軒目の羽衣館は映画館で、明治四十年創業であるが戦災で焼失した。黒坂金貸業は通称をマカラズヤといった。富田ブリキヤ屋であるが、この当時のブリキ屋は石油缶を開いて板金にしたものを仕入れて屋根に用いた。

十一、蓮池、蓮池通り、新通町通り

昔は葭川の上流である東寺山のあたりから千葉町の水り小茶園（こちゃえん）（千葉神社の西側、弁財天社の辺りの集落名）のそばを経て、蓮池通りに沿って吾妻町をつっきり吾妻町二丁目で西に曲がり、流れが二つに分かれて葭川へと流れ込んでいた。用水は途中にある沢山の水田耕作へと使用されていたが、それは私が子供の頃各所に水門が有ったことを考えてもまちがいないことである。また、用水路では須田精米水車小屋（現中央公園の敷地内）、鈴木精米水車場（富士見橋の近く）、榎本水車精米場（一本橋の近く）の三つの精米場が水車を回していた。この内、鈴木精米水車場（鈴源）が最後（昭和初期）まで残った。

用水路の北方・西方は葭川までほとんど水田であって、その間家並があったのは登戸への道沿いにある通町だけであった。そういう所へ明治二十年頃新通町通り（後に演芸館通りとも呼ばれた、現在の銀座通り）が出来、その通りに家が建つと吾妻町の裏側にあった水田は家と家の間に取り残されてしまい、明治四十年頃は水の多い荒地に近い状態であったという。そこにまた家が建つと田（荒地）の中心だけが少し残り、そこに蓮の花が咲いていたので千葉町の花街の代名詞として使用される「蓮池」という呼称が生まれたのではなかろうか。あるいは、寒川（本千葉）停車場通りができるまで不動尊堂境内には

宇佐美　佑　申　氏

第16図　明治25年頃の光明寺境内周辺

仁山堂病院

玉水館写真館
（『千葉町案内』より）

蓮池が二つあり（図16）、その池が「蓮池」の名の発祥になったともいわれている。明治二十七年発行の千葉繁昌記には「蓮池」の地名が出ており、明治三十九年三月実測の「実測千葉市街図」を見ると蓮池のあたりは全て家並となっている。「蓮池」は南北に縦断するのが蓮池通りで、現在も恐らくは当時のままの道幅で残っている。

新通町通りに戻り、明治四十年頃はこの通りもかなり家が立ち並んだが、商店は少なく繁栄しているとはいえなかった。通りの東側をみると、吾妻町一丁目の一軒奥に三守酒店があった。この家は三河屋の分家でやはり砂糖三河屋とも呼ばれた。二丁目の一軒奥に宇佐美弁護士

の事務所があった。「街案内」に「弁護士宇佐美佑申氏法律事務所は千葉町吾妻二丁目（蓮池）に在り。民事、刑事の訴訟事件は勿論総ての法律事務を取扱ひ、常に親切と熱誠とを以て依頼者に対するを以て、事務頗る繁盛を極む。而して宇佐美弁護士は此繁職の傍ら、日刊新聞新総房の社長に任じ、又、千葉郡会議長、国民党代議員、成宗電気軌道株式会社法律顧問、成田山感化院評議員、千葉町会議員、千葉市制調査委員、日本赤十字社終身社員等に挙げられ、現に今尚ほ其職に在り。これを以て見るも氏が如何に社会に重きをなしつゝあるかを知るに足る可し。」とある。二丁目の「蓮池」の近く、新通町通りと蓮池通りを東西に結ぶ通りに玉水館写真館があった。「町案内」に「本店は東都にて著名の大舗玉水館（両国写真館）にして、支店は当町狭斜の地なる蓮池に在り、技は精巧を以て賞せられ器機又好く整ひ且親切なるは既に定評ある処、本書写真撮影も半本店に依嘱せり」とある。新通町通りのさらに南側にあった末広寿司は千葉町では名の通っていた寿司屋であった。

通りの西側を見ると、宇佐美弁護士の家の丁度反対側あたりに人参湯があったが、ここの経営者堂端は富山県の方から来たという。二丁目「蓮池」の近くには、仁山堂眼科病院があった。「街案内」に「眼科を以て名高き仁山堂病院は、千葉町吾妻町二丁目に在り。明治二十年の開設にして、院長を久城起一氏と云ふ。出張所を山武郡大網町に有し、毎月六回五、十の日を以て、院長自ら定期出張して一般の診療に従ふ。而して、同病院は従来眼科専門なりしも、時勢の要求に応じて今回内科、外科等を増設し、各科専門医を招聘して患者の診療に応ず。旧奈良輪病院と称せるは其本院にして、目下の奈良輪町仁山堂病院これなり。木更津町にも出張所を設け、毎月三、八の日院長定期出張し、診療の需に応ず。何れも多年の好評を有し、世の信認極めて厚し。」とある。この南側には梅松屋の別荘があった。

十二、県庁とその周辺

千葉県庁の二代目ルネッサンス風庁舎は明治四十年起工、同四十四年五月五日の開庁である。初代庁舎の解体した期日と解体した後の行政事務執行場所を調査してみた。前者は明治四十年としかわからない。後者は確定はできないが師範学校の男子部と女子部、及び尋常中学校の旧校舎を使うこと以外には考えられない。それは、二

第17図 県庁とその周辺

第18図　亥鼻山の周辺

池田坂

長生館（『千葉町案内』より）

代目庁舎の落成を祝い旧師範学校他の建物を使用して共進会が、盛大に開催されたことを見てもまちがいないことであろう。この当時は、県庁から千葉裁判所への間に架かる橋を宗胤寺橋（現、羽衣橋）といい、同じく仮庁舎へ間に架かる橋を師範学校への橋ということで学校橋（現在架け替え中の都橋）と呼んだ。県庁仮庁舎（千葉中学校仮庁舎）の北側には葭川を利用して船で運ばれてきた米を買い取る、米仲買人の宮吉米問屋があった。

十三、亥鼻山の周辺

亥鼻山（亥鼻公園）の麓の北側にはカトリック教会があった。旧東金街道を挟んだ山谷石材店と旭橋の脇の田辺米店は現在も営業している。病院坂を登っていくと千葉県立千葉病院（現、千葉大医学部）があった。その前には長生館旅館があった。「町案内」に「主人鹿倉善次郎氏は長生郡冬栄村の出身。満十一ケ年間医学校の事務員を奉職し、四十年退きて患者の下宿を営業とし、入院患者身元保証の需めにも応じ、親切を以て聞え居れり」とある。また、麓西側の智光院と胤重寺の間を行くと池田坂があった。「街案内」には「千葉県師範学校下より、東北に向ひて猪鼻山上なる千葉城址に登る可き険坂あり。これを池田の坂と云ふ。坂路の幅五尺に足らずして其長さ約二町、崎嶇羊腸として頗る険峻なり伝へ云ふ、これ往年千葉城の搦手にして、城内より池田の郷に通ずる間道なりしを以て池田の坂と名づくと。此坂を登りて城址に達せむとすれば、其左方に数頃の畑あり、試みに此畑を発掘すれば赭黒色せる米粒形の小石を出すことあり。里人の口碑に曰く、これ康正元年千葉城の兵火に罹れる時、兵糧米化して石となりしものなりと。伝へて以て今日に来るまで之を奇蹟と称す。」とある。

亥鼻山麓の丹後用水路側には万菊旅館を経営していた三上の自宅があった。現在はここで旅館を経営している。この裏には佐々幹旋屋があった。この家は後年の万安寿司である（文中敬称略）。

（市内松波町在住）

≪編者注≫

明治二十二年市制町村制で成立した千葉町であるが、その中心街の家並みを一軒一軒記した地図には故和田茂右衛門氏のご労作がある。和田氏の成果は『千葉県史大正昭和編』（昭和四十二年発行）の付図「千葉市中心部職業別」（明治三十八年～四十年頃の分布図）、『千葉市

史近世近代編』に収載の「千葉町の職業分布図」（家名記入なし）などに活用され、和田氏のご努力に対し深い敬意が払われてきた。

今回紹介した「明治四十年　千葉町中心街家並概念図」は、明治三十七年千葉町通町で生まれた北島氏が、和田氏の地図をふまえながら、さらに詳細かつ緻密な調査を行ひ完成した大労作であり、和田氏の地図の全面改訂版と言うべきものである。

この概念図について北島氏は「この概念図を作成しようとした動機は、千葉市で最も旧家といわれる鈴木利右衛門家（三河屋）の御子息二人が私宅をおとずれ、同家のことについて尋ねられたことに始まり、たまたま喜寿を迎えた私の記念事業として思い立ったものであります。調査の基準となる年代を明治四十年とし、百四十名以上の長老の方々の御協力と四ケ年半の歳月を要して昭和五十六年十月に完成しました。個人としては出来る限りの調査をしたつもりですが調査漏れや、誤りは当然あると思います。御指導、御指摘を賜りたい。また、発行に当って調査に御協力をいただいた一四〇余名の方々並びに千葉市・千葉市教育委員会に対し深謝の意を表するものであります。」と語っている。なお、右の文章中にもあるように、この概念図は昭和六十一年四月に千葉市教育委員会（千葉市文化財調査協会）よりＡ０版（模造紙大）で発行されているが、発行部数も少なく広く一般に行き渡らなかったこともあり、今回、北島氏の解説を新たに付け加え、Ｂ四判の大きさに分割して紹介させていただいた。

また、収録した写真のうち、明記のないものは『千葉街案内』から転載した。そして、引用文については、句読点・誤字を改め、漢字は常用漢字表によったが、かなづかいは原文のままとし、ルビは旧かなづかいで繁雑であったので省略したものである。

（Ａ）

寒川沖漁法

長谷川　進

一、六人網（小型捲網）

㈠　漁網・ロープ（第一図）

網の大きさは漁船によって違うが、だいたい長さ二〇〇m位、高さ二〇m位である。網の上部（水面の部分）には、桐の木で作った長さ三〇cm、幅一〇cm位の浮（アバ）が五cm位（指三本位）の間隔で網の長さだけ付いていて、海中での網の高さを保つようにできている。網の下部には鉛の錘（やな）が直径二cm位のロープに巻き付けてあり、網が潮流に流される事を防ぐと共に、やはり高さを保つ役目もしている。

網の大きさをさらに増すために、網の両端にロープが各二〇m位ずつ付いている。錘の付いている下部には滑車が付けてあるため、ロープの長さは四〇mから五〇m位である。

㈡　舟

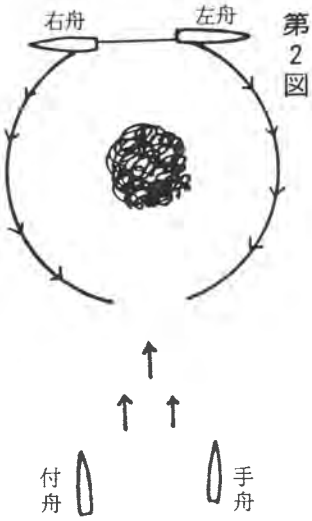
手舟・付舟が各一隻。網舟（右舟・左舟）が二隻の計四隻で一組（統）になっている。

手舟には漁労長（おきあい）以下、最小限四人から六人の漁夫（のりこ）が乗り込む。右舟・左舟にはそれぞれヒノリ・中乗り・トモオシ・十人・八人の五人が乗り込む。

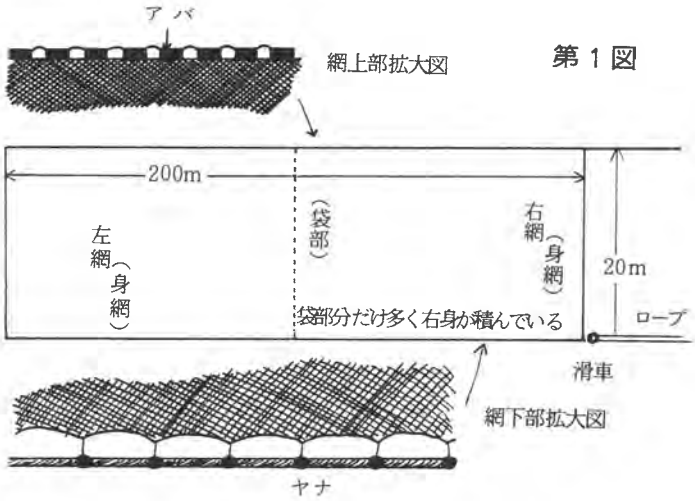
㈢　漁　法

全体の指示を出すのは手舟の漁労長である。漁労長は白い手拭を用いて指示を出す。前に進む時はグルグル回し、右へ進む時は右に払う、左に進む時は自分の体に向かって振る（夜は声で合図する）。

網舟で漁労長の指示を伝えるのはヒノリである。網舟は右舟が右網を、左舟は左網をそれぞれ積み込み、沖合いで両舟がくっついてヒノリと中乗りが右網と左網を一つに編む。次いで、網舟は魚の群れを探しながら進行している手舟（漁労長）の指示に従ってトモオシ・十人・

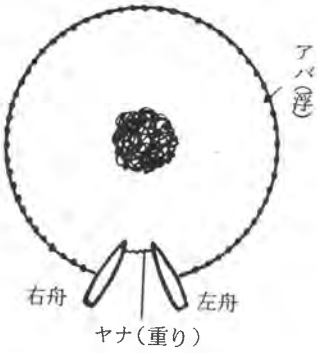


第2図

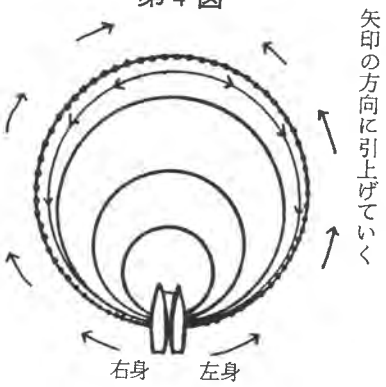


第1図

第5図



第4図



第3図

寒川町船溜　昭和38年　榎本国治氏撮影

第7図

第6図

八人が艪を漕ぎ左右に分かれると、中乗りが網を海に入れて漁群を取り囲む（第二・三図）。この時、漁労長は竹の棒で水面を叩き、ノリコが長さ一m位の木の棒で舟のイタゴを叩き、魚を追い込む。

網に魚が入ると、まず錘（ヤナ）の付いている部分から手繰り上げ、網に底を作って魚を網の器に入れた形にする（第四図）。錘の付いた部分を手繰り上げ終わると、今度は魚の入っている部分（身網）の引き上げにかかる（第五図）。右舟・左舟のヒノリ・トモオシ・十人の計六人の漁夫が身網を引き上げ、残りの中乗り・八人が身網の引き上げに合わせながら浮（アバ）の部分を引き上げて網の器をさらに小さくし（第六図）、網の一番後部にある袋部に魚をまとめる。そして、付舟に積み込んで漁は終わる。大漁の時には手舟からも右舟・左舟へ一人ずつ乗り移ってきて手伝う。

(四) 漁　獲　物

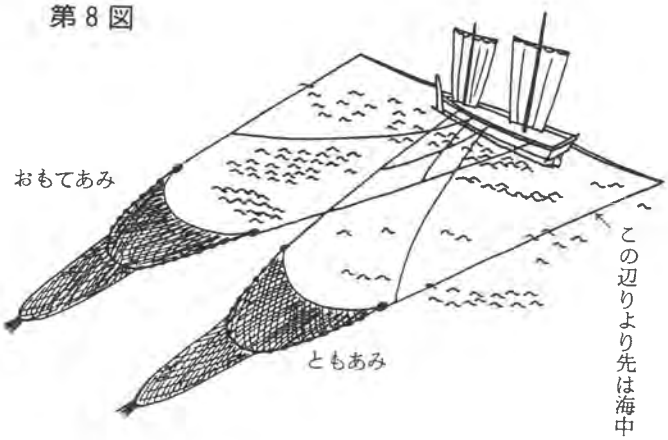
六人網でとれる魚は、群をなして泳ぐいわし・こはだ・芝海老・あじ・ぼら・せいご・すずき等である。魚は大群になると泳いでいるのが日中は赤黒くなって見え（あかみと呼ぶ）、暗夜は水が光るので真白になって見える（しきと呼ぶ）。また、月夜は水の光が見えにくいので、魚の跳ねる音を聞きながら魚群を見つける。

二、流　し　網

流し網は一隻の舟に一人から二人の漁夫が乗り込み出漁する。漁船に大小二枚の帆を張り、舟を横に使って網を二つ引いて漁を行う。霞が浦の帆引漁と同じ漁法である。

網を二つ（第八図）引いて操業する時の漁獲は主に車

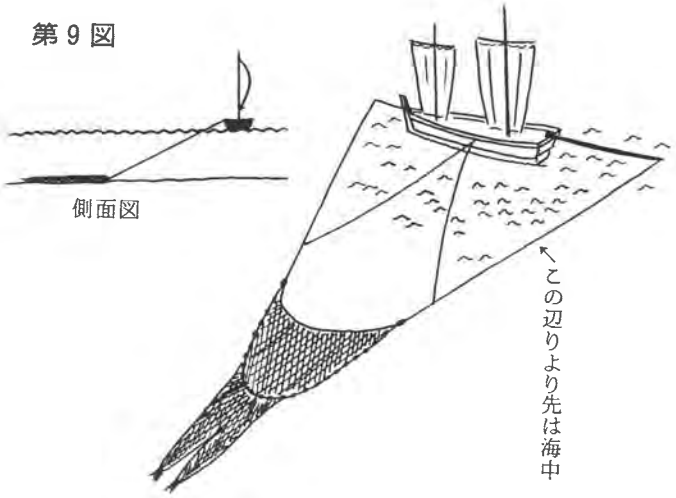
第8図



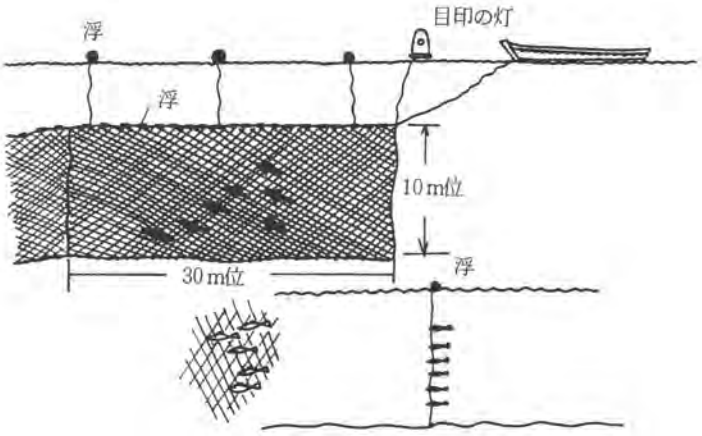
海老、網が一つ（第九図）の時の漁獲はすみいか・しゃこ・あなご等である。

車海老の漁は、夕方（まずみ）出漁して夜通し操業し明方（みあけ）帰ってくる。すみいか・しゃこの漁は昼間でも出漁する。車海老の漁は水深一mから八m位で、すみいかは水深三mから六m位で、しゃこ・あなごは水深五mから二〇m位でそれぞれ漁を行う。

第9図



第10図



三、こざらし網漁（刺網）

こざらし網漁は、一隻の舟に二人から四人の漁夫が乗り込んで夕方頃から沖合いにでて主に鰯をとる漁である。網は一切れ（一ハケと言う）ずつになっていて、一切れは長さ二〇mから三〇m位である。舟の大きさによって異なるが、一隻あたり五切れから一〇切れ位積み込んでいる。

鰯は群をなして泳ぐ習性があるのでこの群を網に張って待つのである（第一〇図）。舟には鰯の大きさに網目の大きさを合わせた網を積む。網を入れるや否や網に突っかかり（網目に突き刺さる）始めるような大漁の場合には、漁を始めて三〇分位しかたたない内に網を舟に積みきれなくなってしまうこともある。

網に鰯が突き刺さったまま浜に帰り、浜で家族と一緒

に網をはたいて鰯をとる。

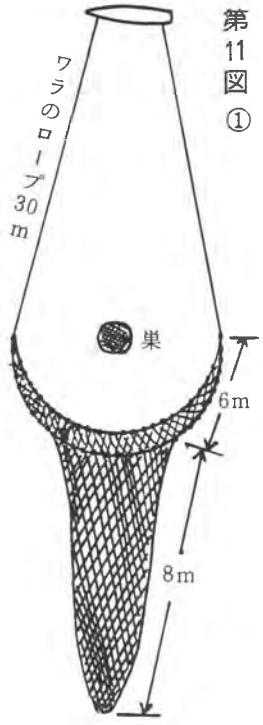
この漁は暗夜は夜光虫の影響で網が光ってしまい、鰯が網を避けてしまうので、網が光っても目だたない月夜の方が漁が多いものであった。

四、イカ（スミイカ）網漁

イカ網は四月から六月・七月頃、前の年に生まれたスミイカがイカの巣に卵を産みにくる時が漁期で、最も漁獲のあるのは四月末から六月中頃の二か月位である。

漁の方法は、アンペラ菰で形作り、中に砂利や砂を入れた錘の部分に、農家でもらってきた細かい竹枝を八本から一〇本位刺したイカの巣（錘の部分に縄を付けその先に三m位の篠竹を付ける。さらに、篠竹の先には家印を付ける）を、一隻あたり四〇個から五〇個作成する。

第11図 ①

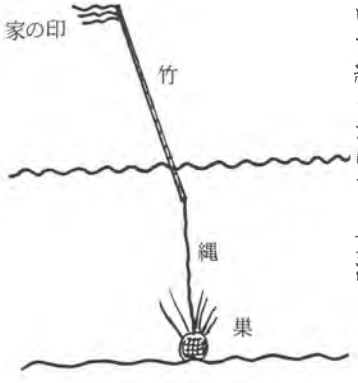


イカの巣（イカモと言う）を入れる場所は皆で場取りの日にクジを引き決めるが、その家の場所は「場取り」という。だいたい場取りの日の次の日に巣を入れることが多かった。

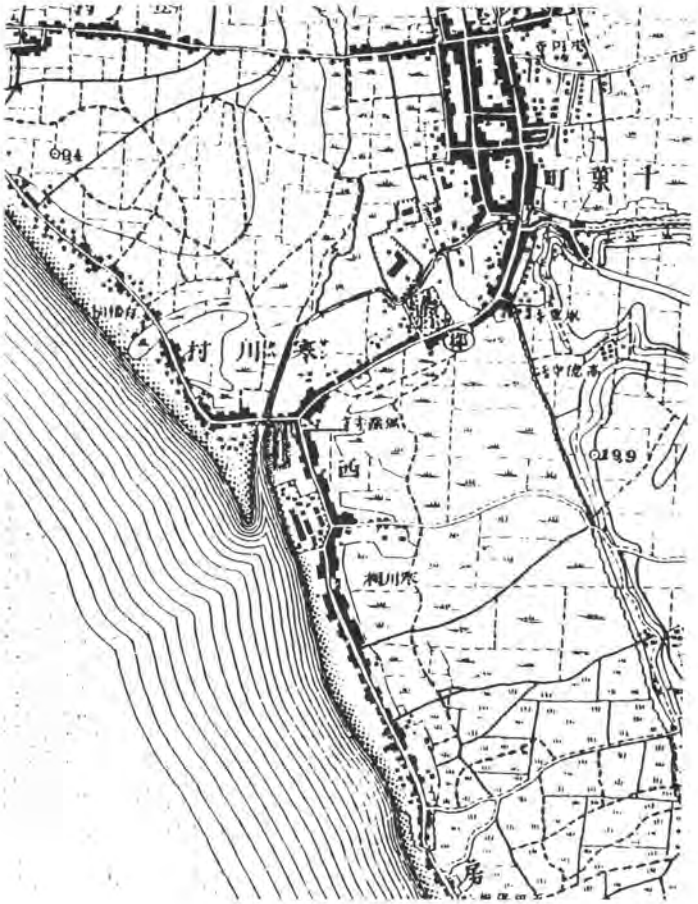
この漁は、イカの巣に親イカがいない時は直径一cm位の丸型の卵が、親イカが入っている時は、細かく二cmから三cm位に伸びて見分けがつくことを利用する。

イカの巣を一度舟の上まで引き上げ、イカがいるのがわかるとすばやく海に戻す。五分位待ちイカが再び巣に帰ってきた頃合いを見計らって網をかける（第一一図）。網が正常な位置に入ると必ず最小限オス・メス二匹は網に入る。大漁の時には一つの巣で一〇〇匹も入ることがある。漁夫の感で卵の変形した量によってイカのいる数もだいたいわかる。また、台風の後はベタブキといい巣を見ないで網をかけても大漁となる。

第11図 ②



第11図 ③



寒川村付近地形図（明治15年測量、第１軍管地方迅速測図千葉町の部分）

五、カニ網（かにがけ網）

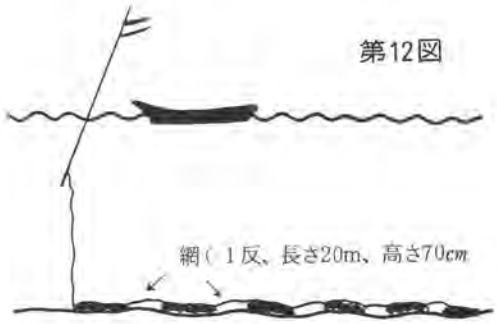
カニ網は一反（二〇m位）ずつに分かれ、一隻の舟で一〇〇反から一五〇反位使用する。一隻には二人から四人の漁夫が乗り込んだ。

夕方この網を全部つなぎ合わせて舟に積んでおき、夜一〇時頃沖に出て一直線に海に入れる（第一二図）。そして午前三時から四時頃引き上げる。時には夕方から入

寒川海岸　明治末期頃（郁文堂発行絵ハガキ）

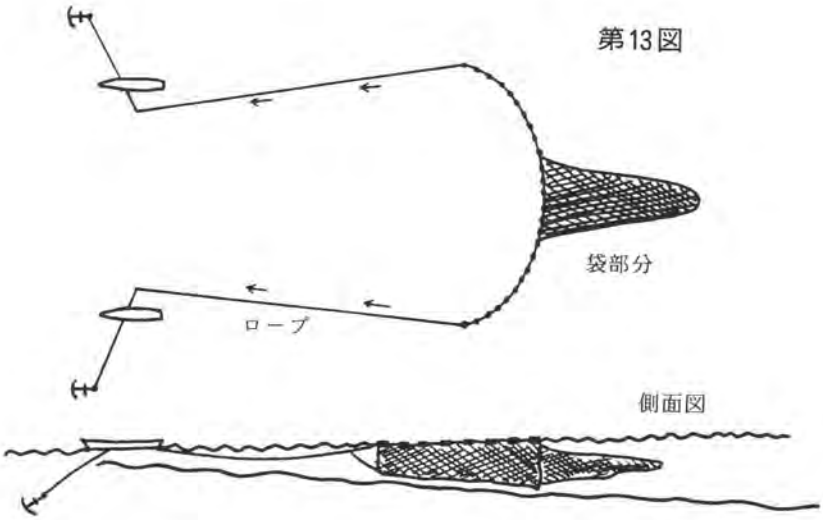
寒川周辺鳥瞰図（松井天山画千葉市街鳥瞰図の部分）成田山仏教図書館所蔵

れておいて、夜明けに引き上げることもある。また、暗夜の時にはこの網を使うより直径八〇cm位のタモ網でかぶせる様にする方が取れることがある。これは夜になるとカニが水面近くまで浮いてくるのが光って見えるからである。



六、小名子（イカナゴ）網

イカナゴ網は長さ一五〇m位高さ三m位で、袋部分は網戸よりやや大きめの網目になっていて、白網でできている。また、網の両端にロープが一〇〇m位ずつ付いている。（第一三図）。イカナゴ漁は午後二時・三時頃から夕方までの漁で、この網を左右二隻の舟に積込み各舟漁夫が六人から七人位乗り込んで出漁する。水深四mから五mの所に網をかけ、水深二m位の所で終わりとなる。



七、地引網

最後は第一四図のように碇を入れ、ロープを引き上げると共に左舟・右舟を除々に近づけ、それぞれの舟の一番後ろに乗っている漁夫がウザオ（竹竿）で水面を叩いて袋部分に魚を追い込む。

地引網は夜の干潮時に網をかけて引き上げる漁法である。最初左舟右舟が沖合いに網をかけ、浜に近づけるだけ近づく、その後各舟一〇人位の漁夫が網を引っ張り上げる。

八、舟について

舟はどの漁でも長さ一〇m位、幅一m五〇cm位の大きさで皆同じであった。但し、六人網の網舟だけが他の舟より舟底が鋭角になっていて、ミヨシ（舳先）が長かった。これは付舟に魚を積み込む時に手舟のノリコが左舟・右舟のミヨシをつかんで舟が離れないようにするためである。

寒川には田上・長島・宍倉家と通称稲毛大工の四軒の舟大工がいた。櫓大工は長谷川家の一軒があった。

ここに記した漁法は、寒川の漁師によって昭和三八年八月の千葉市漁業共同組合（寒川・稲荷・港・黒砂・新田・新宿・神明の漁師二千人位が組合員であった）の解散まで続けられた。他の地区の漁師は浅蜊とノリのみを採っていた。

（元寒川在住、元網元）

犢橋村誌

犢橋尋常高等小学校
宇那谷尋常小学校　編

≪編者注≫柏井町・小川武男氏所蔵の原史料では、小見出しが頭注式である。また、本書収録にあたり、誤字を改め、句読点の一部を補正し、漢字は常用漢字表などによったが、かなづかいは旧のままとした。

犢橋村誌　緒言

総説、犢橋校訓導吉田久次郎。沿革、同校訓導富谷小市。名勝、同校訓導河野堅吉。風俗習慣、同校教員福嶋貞一郎。行政、同校校長日暮菊太郎。産業同校訓導高橋清三。教育、宇那谷訓導松崎米吉。交通、同校訓導加美鉉太郎。整理、同校校長仲田国蔵ノ諸氏ニテ受持調査ヲナセリ。編者其経験ニ乏シク繁簡精粗其宜シキヲ得ズ。誤謬脱漏多カルヘシ。次号編集ノ際ニ於テ加除訂正スベシ。尚一言スベキハ印刷費騰貴ノ結果、調査内容ノ半パ以上ヲ削除セザルヲ得ザルニ到リシコト之レナリ。調査員並ニ看者ノ諒セラレンコトヲ乞フ。

大正七年三月十日

編者識ス

犢橋村誌

目　次　　巻之一

第一章　総　説　位置。面積。戸口。地勢。気候。区画。
第二章　沿　革　犢橋村。花島村。柏井村。長沼新田。小深新田。下畑村。横戸村。宇那谷村。大政奉還。万機親裁。改元。廃名主、置戸長。自治制度。
第三章　名　勝　天福寺。長沼観音。大聖寺。みづの木。智澄が池。長福寺。明星寺。泉蔵寺。薬師堂。三社大神社。傘松。鹿島大神。水神社。妙見社。三社大神。大六大神。八幡神社。神明神社。高台開削。明治天皇御野立所。
第四章　風俗習慣　一般風俗。結婚。日忌。葬式。紐解。松飾。節句。魂祭。鎮守祭。敬神。
第五章　教　育　小学校学齢児童保護会。社会教育。宗教。青年団。人物。
第六章　行　政　村役場。吏員。村会議員。学務委員。

土木。衛生。警察。兵事。戦病死者。
経済。
第七章　産　業　農業。養蚕。養鶏。山林。澱粉。信用組合。
第八章　交　通　道路。東金街道。軽便鉄道。

千葉郡犢橋村誌

第一章　総　説

位置　犢橋村ハ千葉郡ノ中央部ニ位シ、千葉町ヲ距ル北方約二里、東ハ印旛郡千代田村、旭村、千葉郡都村ト接壌シ東北ハ下志津原ノ陸軍演習地ヲ隔テ、印旛郡志津村ニ対ス。北ハ千葉郡大和田町及ヒ印旛郡阿蘇村ニ連リ、西北ハ大和田町ニ包マレ、西ハ千葉郡幕張町、検見川町ニ続キ、南ハ同郡都賀村ニ境ス。

面積　東西五十四町余南北約六十町面積二千数百町歩アリ

備考　陸軍用地トシテ買収セラレシ地積ノ大略

明治拾九年宇那谷村、小深村、下畑村ニテ百余町歩。
明治弐拾七年小深区　十町歩。
明治参拾参年宇那谷、長沼、小深　二百余町歩。
明治四拾弐年犢橋、長沼、柏井　二百拾六町歩。
軍用軽便鉄道敷地買収　若干町歩。
其他原野地、六方野、陸軍用地トシテ収用セラレタルモノ二百三十町歩。

大正四年度ニ於ケル地積。

田地、約百六拾五町九段歩。畑、四百三十七町五段歩。山林、六百弐拾四町九段歩。宅地、六拾壱町六段歩。原野、拾壱町五段歩。池沼、壱段歩。
合計一千参百壱町歩。

戸口　戸数六百弐戸。人口参千七百人。

地勢　地勢大率平坦中央高ク南北ニ稍低下ス。海面上二十米余、水流南北ニ分レ其ノ北流スルモノハ長沼ノ東方長沼池ニ発シ、宇那谷ノ東ヲ過キ小深ヨリ来ル支流ト合シ横戸高台池ヨリ流ルル水ト合シテ新川トナリ、印旛郡阿蘇村ヨリ印旛沼ニ入ル。高台池ヨリ南流スルモノハ柏井ヲ過キ花島犢橋ノ境ヲ流レ、長沼ノ西部ニ発シ、犢橋ノ南方ヲ西流スル水ト合シテ検見川町、幕張町、境ヲナシテ東京湾ニ注グモノ即チ花見川ナリ。是等ノ二川ハ灌漑排水ノ利ヲ得ルコト多ク、漁魚ノ益亦尠カラズ。池ニハ東ニ長沼池アリ、西北ニ高台ノ池アリテ新川花見川ノ水源ヲナセリ。

気候及産業　気候温和ニシテ殊ニ南部ハ海ヲ距ル一里余

常ニ海風ノ影響ヲ受ク。土地農耕ニ適シ、米、麦ニ次キ、甘藷ノ栽培盛ニ行ハレ、養蚕業ノ発達ト共ニ桑園年々増加ノ傾アリ。蔬菜ハ近年著シク其ノ産出ヲ増加シ千葉町亦ハ四街道方面ニ販路ヲ開ケリ。

区画　本村ハ長沼、犢橋、小深、宇那谷、横戸、柏井、花島ノ七部落ヨリ成リ、更ニ犢橋ヲ本郷、新田、広尾、米内ノ四区ニ、長沼ヲ長沼、内山ノ二区ニ、柏井ヲ南柏井、北柏井ノ二区ニ、横戸ヲ上横戸、下横戸ノ二区ニ分割シ総シテ十三区トナス。

第二章　沿　革

本村ハ現在犢橋ノ本郷、新田、広尾、米ノ内ノ四区。花島、南北柏井、上下横戸、内山、宇那谷、小深、長沼ノ十三区ヲ以テ一ノ自治団体ヲ作ルト雖、明治二十二年十月町村制ノ実施セラルル当時ニ於テ新村犢橋村ヲ形成シタル旧村ハ犢橋村及ヒ長沼新田、花島村、柏井村、横戸村、宇那谷村、小深新田、ノ七ケ村ニシテ各村其沿革ヲ異ニスレハ左ニ旧村毎ニ大略ヲ挙ク。

犢橋村　犢橋村ハ昔時三枝ノ郷六方ノ野庄ト称セラレ、小金ケ原ノ一部ナリシカ今ヨリ凡三百余年前慶長ノ頃来リテ茲ニ土着スルモノアリ漸次一部落ヲナセリ、降テ徳川家康覇府ヲ江戸ニ開キ政権ヲ攬ルニ当リ、本村ハ旗本吉田収庵、小栗又兵衛、江戸南町奉行与力ノ三者ニ分領セラレ、吉田ノ知行ニアリテハ町野久右衛門、小栗ノ知行ニアリテハ飯田治郎左衛門、与力ノ知行ニアリテハ鶴岡藤右衛門、各名主役トナリテ其ノ事務ヲ取リ扱ヒタリ、然シテ本村ハ当時已ニ大ニ発達シテ総石高七百石、戸数二百ヲ数フルニ至レリ。

花島村　花島村ハ幕府時代ニアリテハ旗本遠山信次郎ノ知行ニ属シ、総石高百二十五石戸数二十二戸ニシテ笠川内記名主役ヲナセリ。

柏井村　柏井村ハ元南北ノ二ツニ別レ南柏井ハ高家旗本上杉主水ノ知行ニシテ総石高百六十六石戸数二十一戸アリテ小川金左衛門名主役ヲナセリ。北柏井ハ御納戸奉行、小栗主計ノ知行ニシテ当時ノ石高百五十石七斗、戸数二十四戸アリ、而シテ川口理右衛門名主役ヲナセリ。

長沼新田　長沼新田ハ元禄年間江戸ノ人薬種商野田源内ノ開墾セル所ナリト云フ。其ノ当時ニ於ケル石高及ヒ戸数ノ如キハ明カナラサレトモ、只口碑ニ長沼新田八百八町ト称セルニ過キス。而シテ本村中ニ俗ニ上ノ家津田治左衛門、下ノ家藤沼惣兵衛ノ二家ハ本村中ノ旧家ニシテ、爾後幾変遷ヲ経テ代官ノ所領トナリ島田寿平治名主役トシテ自宅ニ事務ヲ扱ヘリ。

小深新田　小深新田ハ今ヨリ凡ソ二百五十年前元和ノ頃武州ヨリノ移住民地ニシテ大日山ノ東方七・八町ノ所ニアリ、爾来大ニ発達シ代官ノ所領トナリ。幕末ノ頃ニハ戸数四十戸ニ迫ヒ、総石高百三十石ト称セリ。小島藤兵衛名主役ヲ務ム、而シテ移住当時ノ部落ハ宇那谷ノ東方十町余ノ所ニアリシガ、陸軍用地トシテ買収セラルルニ当リ、漸次現今ノ部落ヲ成セリ。

下畑村　下畑村ハ現今ノ長沼、小深ノ中間ニアリシガ、明治十九年土地全部陸軍用地ニ買収セラレ、住民ハ多ク宇那谷、犢橋、長沼、小深ニ移転セリト云フ。

横戸村　横戸村ハ旗本石尾七衛ノ知行ニシテ、石高百四石、戸数三十七戸、松戸三右衛門名主役ヲ務メ、以テ幕末ニ迫ベリ、本村ニ千葉氏ノ一族アリ現戸主ヲ知脇作太郎ト云フ。

宇那谷村　宇那谷村ハ昔時葛飾郡宇那郷ト称セシガ、徳川幕府ノ時ニ至リ佐倉領ニ入リ幕末ノ頃戸数五十余戸、石高三百五十石、名主役ヲ務メタル数家アリ小澤治郎左衛門、松戸庄右衛門、能勢重右衛門、池田四郎右衛門等ハ其ノ重ナルモノナリ。

徳川氏大政奉還　徳川氏鎖国ヲ厳ニシテヨリ外患ノ憂至ラス、四民桃源場裏ニ太平ノ夢ヲ結ブコト二百有余年、此間欧米ノ新国ハ野蛮ノ域ヲ脱シ、文化駿々トシテ進ミ、地ヲ略シ国ヲ服シ利ヲ東西ニ求メ互ニ雄ヲ競ヒ覇ヲ争フ。此ノ堆積セル高潮頽然トシテ四方ニ奔流シ、東洋ノ沿岸ヲ震撼シ米艦ノ浦賀訪問ヨリ徳川覇府ノ基礎亀裂ヲ生シ、外ハ敵国トノ折衝ニ堪ヘス内ハ三百諸侯ヲ統御スル能ハス。慶応三年十月ニ至リ幕府ハ遂ニ大政奉還ヲ請フノ止ム無キニ至レリ、此ニ於テ鎌倉以来七百有余年間ノ武家政治ハ其ノ終リヲ告ケ万機御親裁ノ王制ニ復サセ給ヘリ当時ノ布告文ニ曰ク。

万機親裁　今ヨリ以後大小ノ改令ミナ朝廷ヨリ出ヅ四方ソレ之ヲ体セヨ。ト時ニ慶応三年十二月ナリ。如斯ニシテ我カ国ノ大勢ハ急転直下セリ。

年号ヲ明治ト改ム　朝廷ニテハ年号ヲ明治ト改メ民制裁判所ヲ江戸ニ設ケ、民事ニ係ル総テノ事ヲ裁断シ鎮撫使ヲ置キテ四方ヲ巡視セシメ、旧領主ヲ藩主トシテ民事ヲ司ラシメシモ人民ハ其ノ帰向ニ迷ヒ殆ント混乱ノ状態ニアリキ。

村役人　名主組頭百姓代理五人組長等ヲ云フ。当時本村ハ各旧来ノ名主又ハ村役人ノ手ニヨリテ村治ヲ維持セリ。

明治四年七月廃藩置県ノ制ヲ布カルルニ及ヒ、房総三州ノ地ヲ分チテ葛飾、印旛、木更津、宮谷ノ四県ヲ置キテ

之ヲ管轄スルコトトナレリ、而シテ犢橋、花島、柏井、横戸、長沼新田、小深新田ノ六村ハ葛飾県ノ所管ニ入リ、宇那谷村ハ印旛県ニ属セリ。其ノ後長沼新田、小深新田二村ノ新田ノ弐字ヲ削ル、後葛飾県ヲ廃シ印旛県ニ合ハセ、宮谷県ヲ廃シテ木更津県ニ併スルニ当リ、犢橋村外五ケ村ハ印旛県ノ所管トナル。

名主ヲ廃シ戸長ヲ置ク　此際戸長頭取ハ、長沼村島田寿平治之ニ当レリ　明治五年九月大小区ノ制ヲ布キ名主役ヲ廃シテ戸長トナシ、町村聯合ノ分合ヲ行フ当時ノ布達ニ曰ク。

壬申八月　　印旛県印

今般被仰出之趣モ有之大蔵省庄屋名主年寄等都而相廃シ正副戸長・戸長頭等更ニ申付別冊之通事務取扱候事（別冊略）此改正以後大小区制屢々変更アリ、随テ聯合町村ノ分合モ行ハレ犢橋村ハ畑村（検見川町畑区）、宮野木村（都賀村宮野木区）ト聯合シ、犢橋村鶴岡藤三郎戸長トナリ事務ヲ取リ扱ヒ、次イテ畑村稲生八郎左衛門戸長トナレリ。長沼村ハ小深村ト聯合シ小深村近藤林治郎戸長トナリ自宅ニ事務ヲ取リ扱ヒタリ。横戸村及ヒ柏井村ハ大和田村ニ聯合セシカ、明治十二年ニ於ケル聯合町村ノ分合ニヨリ大和田村ヲ離レテ勝田村（大和田町勝田区）ト聯合シ、横戸村松戸三右衛門、柏井村川口義蔵相次イテ戸長トナリ自宅ニ事務ヲ取リ扱ヘリ。花嶋村ハ長作村、天戸村（幕張町長作区、天戸区）ト聯合シ長作村中台文内戸長トナリ自宅ニ事務取リ扱ヒヲナセリ。宇那谷村当時印旛郡ニ属セシヲ以テ同郡井野新田ト聯合シ、井野新田大沢基戸長トナリ自宅ニ事務取リ扱ヲナセリ。明治十七年八月更ニ聯合町村ノ分合行ハレ、犢橋、長沼、花島、柏井、横戸、小深ノ六ケ村聯合トナリ、戸長役場ヲ長沼ニ設ク。当時有力者ニシテ戸長役ニ当ルヲ厭フモノ多キヲ以テ検見川町外二ケ村戸長藤代市左衛門ノ兼務トナレリ。

自治制度実施　明治二十二年十月町村制ノ実施ニ伴ヒ戸長ノ制廃セラレ町村長ヲ置クニ当リ、宇那谷村ハ印旛郡ヨリ脱シテ千葉郡に入リ犢橋、長沼、花島、柏井、横戸、小深ト合シテ茲ニ一ノ新村犢橋村ヲ造レリ。藤代市左衛門ハ兼務ヲ解キ検見川町長専任トナレリ。

新ナル犢橋村長トシテ笠川内記（花島）就職シ村治ノ任ニ当レリ、夫レヨリ渡辺伊左衛門（犢橋）、酡島昇三郎（小深）、長岡徳次郎（犢橋）、飯田次郎左衛門（犢橋）、海老原仁三郎（犢橋）、花島佐吉（犢橋）、島田二郎（長沼）、小川文次郎（南柏井）、相次イテ村長ト

ナリ現任村長松戸豊吉（横戸ノ人大正五年九月十九日認可）ニ及ベリ、其間皆鋭意村治ノ改善ヲ図リ村勢漸ヲ追フテ進ミツツアリ。

第三章　名勝

花島山　天福寺（観音堂）

花島山天福寺ハ花島区ニアリ。人皇第四十五代聖武天皇ノ御宇和銅二年四月僧行基東国ヘ巡錫ノ時桜樹ヲ以テ身丈七尺五寸ノ観音像ヲ作リ、其ノ山門及仁王像ハ大徳運慶ノ作ナリトイフ。殊ニ船板ニ龍遊軒ノ三字ヲ書シタルハ慶長六年、辛丑　地頭遠山四郎兵衛ノ寄進ニシテ徳川家康ノ自筆ト称セラレ宝物トシテ貴重ノモノナリ。現今本堂ハ五間四面ニシテ慶安五年霜月三日住僧宥鏡ノ造営トモ或ハ近ク文政七年　甲申　十月十八日住僧尭惠ノ再興ニナルトモイフ。

長沼観音堂大仏

長沼区馬頭観世音境内ニアリ。座像ノ丈七尺八寸五分コレヨリ南方数町ノ山林中ニ一孤祠アリ。里俗呼ヒテ元観音或ハ奥ノ院ト称ス。往昔大仏ハ此処ニ安置シアリシガ元和年中東金街道ノ開通セラレ人家此ノ道路ニ沿ヒ発達スルニ及ヒ現地ニ遷セラレタリトイフ。大佛及ヒ観音堂ハ生実浜野村《蘇我町の誤り》大巌寺ノ支配ニ属セリ。

智證山　大聖寺

宇那谷区智證山大聖寺ハ真言宗豊山派ニ属セリ。弘法大師ノ外甥智證大師ノ開基ニシテ、中古一時荒廃ニ帰シ僅カニ残塋ヲ存スルノミナリシガ、元禄年間ニ至リ法印実算遺跡ノ漂滅ヲ憂ヘ殿堂ヲ修メ稍旧観ニ復セリトイフ。正門ハ仁王門ニシテ間口二丈七尺奥行一丈八尺仁王尊ヲ安置ス。其ノ鐘楼堂及ヒ洪鐘ハ実算ノ弟子有算師ノ顧命ニヨリ経営スル所ナリ。其ノ竣工実ニ元禄七　申戌　四月八日ナリ。鐘名ハ江城知足院僧正隆光誌ストアリ。附近三十六ケ寺ノ本山ニシテ千葉町海照山千葉寺ト並称セラル。本山ハ徳川幕府時代拾万石ノ格式ヲ与ヘラレ、世代明カナラザレトモ四十四・五代ヲ経過セシモノナルヘシト現住職花沢光学師ハ語レリ。

みづの木

宇那谷大聖寺境内ニアリ実名明カナラズ。

智證が池

智證山大聖寺ヨリ約三丁ノ西方草叢中ニ一池アリ。

弘法山長福寺

弘法山清光院長福寺ハ真言宗豊山派ニ属スル宇那谷大聖寺ノ末寺ナリ。現犢橋尋常高等小学校校舎ニ充テラル。

明星寺

横戸ニアリ、真言宗豊山派ニ属スル宇那谷大聖寺ノ末寺ナリ。

泉蔵寺

柏井ニアリ、現在犢橋尋常高等小学校分教場校舎ニ充テラル。真言宗豊山派ニ属スル宇那谷大聖寺ノ末寺ナリ。

薬師堂

北柏井区ニアリ。

村社　三社大神社

犢橋大塚ニアリ。天照大神八幡大神春日大神ヲ祭ル。口碑ニ云フ往古土神一社ヲ産土神ト尊来シ、村中従来ノ習慣トシテ男子十五才ニシテ必ラズ伊勢大神宮ニ参詣シ、帰路相州鎌倉八幡宮ニ詣テ、而シテ始メテ大人トナル。中古国乱ニ依テ通路困難参詣ノ自由ヲ得ス。伊勢相模ノ両宮ヲ村内ニ遷シ土神ニ合セ祝リ、三社大神ト崇ム。年々一月十八日ヲ以テ此ノ年ノ餅米ノ初穂ヲ取リ置キ、撰リテ是ヲ捧ゲ新キ竹ニテ弓矢ヲハキ、氏子之ヲ射テ神ヲイサムルヲ旧礼トスト。毎年十月十八日ヲ以テ祭日トス。境内ニ稲田姫命ヲ祭ル子安神社一社アリ。

傘　松

傘松は犢橋本郷ニ在リ。

村社　鹿島大神

武甕槌命ヲ祭ル宇那谷宮越ニアリ。現今ノ社殿ハ明治廿二　巳丑　十一月吉祥日ノ造営ナリ。

村社　水神社

北柏井ニアリ。今ヲ去ル五百六十余年前延文ノ頃千葉家ノ臣姓不詳甚太夫ナルモノ封ヲ北柏井ニ得此ノ社ヲ建立セリト云フ。祭神ハ饒速日命ナリ。

村社　妙見社

花島中島ニアリ。天御中主命ヲ祭ル。境内神社一社アリ金毘羅神社ト称ス。

村社　三社神社

長沼神明前ニアリ。誉田別命、大日霊命、天兒屋根命ヲ祭ル。

村社　大六大神

長沼字内山ニアリ。神惶根命、面足命ヲ祭ル。

村社　八幡神社

小深和良比越ニアリ。誉田別命ヲ祭ル。

村社　神明神社

横戸上ノ台ニアリ。

高台開削事跡

印旛沼疎通開削ヲ以テ著名ナル高台ハ、犢橋村下横戸ノ西方ニ位シ、堀割ノ西方ハ習志野御猟場ナリ。天明及天

保年中幕府諸侯ニ課シテ之ヲ開削セシム。北ハ神崎平戸ノ間ニ水路ヲ起シ、南ハ検見川ノ海に達ス。其ノ距離五里余、北ハ新川ノ水路ニヨリ南ハ花見川ニ沿フテ開削セントスルモノナリ。高台ハ両水ノ分水嶺ニ当リテ最高地ナリ。伝ヘ曰フ天保年間開削ノ時北国ノ諸侯酒井氏高台ノ工事ニ当リ事務所及人夫ノ小屋掛等ヲ堀割ノ西方丘山ニ設タリ。今ニ里俗呼デ陣屋跡又小屋掛松ト称スルハ其遺跡ナリト。当時ノ老松欝蒼トシテ今尚在セリ。工事ニ臨ミ酒井侯地形ヲ視テ其難工事ナルヲ察シ本国ヨリ多クノ領民ヲ召集シ工事ニ従事セシム。人夫ハ夫々異様ノ籠ヲ以テ発掘シ土砂ヲ丘上ニ背負ヒ掲ケシト云フ。今断岸数十尺余。中ニ瀦水（ちょすい）アリ長サ十町余帯ヲ引キタル如ク、両岸ノ絶壁ニハ松杉所々ニ繁茂シ眺望絶佳、水滲洌（しんれつ）ニシテ夏尚寒キ感アリ。開削ヲ起ササル以前ニ高台ニ一池アリ高台ノ池ト称セリ。当時渚ニ弁才天ノ祠アリ、天明年中発掘ノ際既ニ数百年ヲ経過セシ右宮を得タリトイフ。今ノ池畔ノ神社之ナリト伝ヘ曰フ、厳島弁才天ヲ祭リシモノナリト村民ノ崇敬最モ篤ク、特ニ祭日ヲ設ケテ神慮ヲ慰ムトイフ。

明治天皇御野立所

六方野大日山ノ東方拾町余、小深看的ニ近キ高地ハ明治四十四年五月　明治天皇四ツ街道陸軍射撃学校ニ御臨幸遊サレ、射撃演習御叡覧ノタメ同所ヲ御野立所トセラル。

第四章　風俗習慣

一般風俗　本村土地肥沃、住民一般ニ農耕ヲ営ミ従テ質朴醇厚ノ風ニ富ミ、近隣相助ケ慶弔相訪ネ其交リ親戚姻者ニ準ス。

結婚　相続者男子ナル時ハ年令廿一才乃至廿五才位ニ達スレハ配偶者ヲ迎フ、婚礼ノ期日ハ戌ノ日酉ノ日ヲ吉トシ、申ノ日辰ノ日ヲ忌ム。相続者女子ナル場合ハ十八才以上二十三才位を通例トナス、婚礼ノ式ハ夜間之ヲ行フモノトス。

日忌ミ　自己ノ近親ニ死亡者ノアリシ時ハ七日間或ハ廿一日間又ハ四十九日間若クハ百日間神社ノ参拝ヲ遠慮スル旧慣アリ。

葬式　仏葬式ヲ用フ家格ニヨリ四方幕ノ式、八方幕ノ式、略式、正式ノ段階アリ。家柄ナキモノハ幕ヲ用ヒス。

紐解　男女七才ニ達スレバ里俗紐解ト称シ親戚知己村人ヲ会シ祝宴ヲ開キ氏神ニ参詣ス。三才ニ達セル時ハ氏神参詣ノミニテ祝宴ヲ開カス。

松飾　十二月末正月祝ノ準備トシテ門前諸建物ノ前、井戸其他ニ松ノ飾ヲナシ。十二月卅日ヲ忌ム。

正月一日　氏神参拝休業三日マテハ雑煮ノ馳走アリ。檀

那寺ヘ年始。其他村ノ親戚知己ヘ年始廻リヲナス。
三月三日　雛祭ノ祝ヲ行フ里俗ノ三月ノ節句トイフ。
五月五日　里俗ノ普通ニ節句トイフハ五月五日ヲ指ス鯉幟ヲ樹ツ。
魂祭　毎年七月十三日十四日十五日十六日ヲ以テ之ヲ行フ。十三日ノ夜松明ヲ持チ仏迎ヒト称シ墓所ニ行ク例アリ。今ハ松明ニ代フルニ提灯ヲ以テス。夜盆踊アリ。
鎮守祭　毎年秋季九又ハ十月之ヲ行フ。芝居相撲等ヲ興行ス。
敬神　毎月一日、十五日ノ両日ハ早朝氏神ニ参拝ス。

第五章　教育

学校教育
犢橋尋常高等小学校
犢橋村字本郷長福寺本堂並ニ不堂堂ヲ以テ假校舎ニ充ツ。明治六年一月ノ創立ニシテ、同十九年犢橋尋常小学校ト改称ス。同二十六年四月高等科ヲ併置シ犢橋尋常高等小学校ト称シ、同三十二年四月柏井ニ分教場ヲ設置ス。
宇那谷尋常小学校
宇那谷字宮越ニアリ。校舎ハ明治二十八年ニ新築スル所ニシテ宇那谷区有ニ属ス。明治十六年十二月十三日宇那谷小学校ヲ設置、宇那谷大聖寺本堂ヲ假校舎ニ充ツ。当時印旛郡ニ属セシガ明治二十二年町村制施行ノ際、千葉郡ノ所管ニ入リ犢橋村ニ編入セラル。明治二十五年四月一日宇那谷尋常小学校ト改称シ、同三十九年九月一日小深区和良比越ニ小深分教場ヲ設置ス。
学令児童保護会
貧困児童ノ就学ヲ奨励シ且ツ之カ救済ヲ目的トシテ本村ハ各部落ニ学令児童保護会ノ組織アリ（大正七年村ニ統一ス）。
社会教育
本村社会教育トシテ挙グベキモノハ崇教及ヒ青年会ヲ主ナルモノトス。
宗教
仏教寺院トシテ現今住職ヲ有スルモノハ、宇那谷大聖寺犢橋長福寺花島天福寺ニシテ、皆真言宗豊山派ニ属シ村民ノ帰依厚ク住職何レモ教化ニ務ム。
犢橋村青年自彊団
犢橋村ヲ一団トシタル青年会アリ。犢橋村青年自彊団ト称ス。明治四十五年二月ノ創立ニシテ、現任団長松戸豊吉、副団長日暮菊太郎、仲田国蔵。会員二百二十五人春秋二季総会ヲ開キ講演競技等ヲナス。而シテ各部落ニ支会ヲ置ク。
人物
県会議員川口為之助氏

北柏井ノ人、前後二回県会議員ニ当選シ現ニ県政ノ為、力ヲ竭シツツアリ。

元郡会議員笠川内記氏

花島ノ人ナリ。曾テ郡会議員村長村会議員ヲ歴任シタリ。

元郡会議員渡辺伊左衛門氏

犢橋村字新田ノ人ナリ。曾テ郡会議員村長等ヲ歴任シ、現ニ村役場吏員トシテ村治ニ竭シツツアリ。

元郡会議員酡島璋之助氏

小深ノ人ナリ。曾テ郡会議員、村助役等ヲ歴任シ、現ニ村会議員トシテ村政ニ竭シツツアリ。

郡会議員島田二郎氏

長沼ノ人ナリ。曾テ村長村会議員等ヲ歴任シ、現ニ郡会議員トシテ郡政ニ竭シツツアリ。

第六章　行政

役場　村役場ハ長沼区ニアリ、殆ント村ノ中央ニ位ス。

其吏員氏名左ノ如シ。

吏員　村長松戸豊吉、助役欠、収入役笠川隆、書記渡辺伊左衛門、松戸要蔵、横山伝、町野久衛外ニ農業当事松戸平蔵氏等アリ。

行政区画　本村ハ行政上、本郷、新田、広尾、米之内、長沼、花島、南柏井、北柏井、上横戸、下横戸、内山、宇那谷、小深ノ拾参区ニ分ツ。本郷、新田、広尾、米之内ノ四区ハ犢橋ト称シ、内山ハ長沼ノ飛地ニ部落ヲナス。

村役場吏員ノ外各区ニ区長及其代理者アリ。

村会議員　村会議員ハ一級六人、二級六人任期各四年ニシテ、現今ノ議員ハ松戸豊吉・渡辺市平治・藤沼孝造・町長正吉・海老原仁三郎・長岡義雄・鶴岡重太郎・小川文次郎・蜂谷幸一郎・松戸寿平治・池田兼吉・酡島璋之助ノ十二人ナリ。

学務委員　学務委員四名村ヨリ長岡義雄・小沢卯之助・学校長ヨリ日暮菊太郎・仲田国蔵アリ。

土木　本村ノ道路溝渠橋梁ハ各区ニ於テ修繕其他ノ負担ヲナス。

衛生　役場内ニ衛生主任一人ヲ置キ、各区毎ニ衛生組合ヲ設ケ衛生組長ヲシテ清潔法及其他ノ事務ヲ取扱ハシム。

伝染病離隔舎トシテ移動式ノモノ二棟ヲ備フ。

警察　巡査駐在所ハ犢橋ニ在リ。

兵事　現役ニ服スル者陸軍将校一人、下士卒十七人、海軍ニ下士卒七人、予備役ニ服スル者陸軍ニ下士卒四十八人、海軍ニ下士卒一人、後備役ニ服スル者陸軍ニ下士卒三十七人、海軍ニ下士卒一人、外ニ補充兵下士卒陸軍二十四人。

在郷軍人会　在郷軍人会ハ会員九十五人春秋二季総会ヲ開ク、会長ハ八木藤吉副会長松戸要蔵之ニ当ル。

戦病死者氏名左ノ如シ

一、明治十年三月十二日　下横戸　蜂谷　源蔵
二、明治十年十一月九日　宇那谷　能勢　寅吉
三、明治卅七年五月廿六日　犢橋　飯田　国
四、明治卅七年十月廿六日　柏井　川口鉄五郎
五、明治卅七年十一月卅日　長沼　三角巳之助
六、明治卅七年十一月二十六日　長沼　仲田和嘉吉
七、明治卅七年十二月二十七日　犢橋　花島喜三郎
八、明治卅八年三月二十六日　長沼　高橋　豊蔵
九、明治卅八年三月六日　小深　小島与平治
十、明治卅八年三月八日　犢橋　大坂　寅蔵
十一、明治卅八年九月六日　犢橋　鶴岡　宗助
十二、明治卅八年十月八日　柏井　宮野　常吉
十三、明治四十年二月四日　犢橋　中村仲次郎
十四、大正三年十月十八日　花島　大野　誠一

経済

本村ノ経費ハ附加税ヲ以テ支弁ス。

大正四年度予算　大正四年度ニ於ル予算金額、歳入六千七百四十九円、歳出経常費六千四百九十七円、臨時費二百五十二円。

大正五年度予算　大正五年度歳入七千〇二十五円、歳出経常部ニ於テ六千九百三十二円、臨時部ニ於テ九十三円。

是等村費ヲ附加スル割合ハ地租ニ附加スルモノ宅地租本税一円ニ付九銭其他ハ弐拾壱銭、国税営業税所得税ニ附加スルモノ本税一円ニ付拾五銭、県税営業税雑種税ニ附加スルモノ本税一円ニ付五拾銭、戸数割一円ニ付四円三十五銭一戸当リ六円六十九銭五厘。

村基本財産　村基本財産ハ基本財産ヨリ生スル収入毎年度決算剰余金ノ十分ノ五ヲ積立ツルモノニシテ、金高壱万円ニ達セシムル目的ナリ。現今農行銀行株券ニテ百二十円、軽便鉄道債権千八百円外ニ現金千六百七十三円五十四銭七厘銀行預金トス。

学校基本財産　学校基本財産ハ指定寄附金毎年度村費ヨリ金五十円、学校不用品売却代農業実習部及基本財産ヨリ生スル収入等ヲ以テ積立テ、経常教育費ヲ支弁スルニ至ラシメントスルモノニシテ現今銀行預金百円アリ。

罹災救助資金基本財産　罹災救助資金基本財産ハ毎年度村費ヨリ金三十円補助金寄附金基本財産ヨリ生スル収入等ヲ以テ積立金額五千円ニ達セシメントス。現ニ銀行預金百〇八円六十五銭アリ。

第七章　産業

農業　本村生業ノ主ナルモノヲ農業トス。農産中米麦ハ首位ヲ占メ、大正四年度ニ於テ米四千七百八十石、麦八千六百三十三石、其価格合シテ九万二千三百八十六円。其他甘藷雑穀野菜類ノ一万余円アリ。

養蚕　養蚕ハ南部ニ盛ニ、秣草ハ東部ニ多ク産出ス。大正四年度ニ於テ蚕種ノ掃立百五十二枚、其収繭三百四十石価約一万円。秣草ハ年々五千円以上ノ産額アリ、其他苫薦蓆ニテ年々一千円内外ノ収益アリ。

製茶年々産額二百三十三貫価格四百五十二円内外ナリ。

養鶏大正四年度ニ於テ八千余羽、産卵価額八千余円ヲ算ス。近年東部方面ニ牧牛行ハレ漸次流行ノ傾アリ。養豚ハ昔時南部ニ盛ニ行ハレシカ現今七十七頭ニ減ス。

馬匹　馬匹ハ農耕用トシテ二百四十八頭アリ。

山林　山林六百二十四町九段余歩新材ヲ出ス。大正四年度ニ於テ年額一千七百余円、年々耕地ニ開墾セラレ山林地減少ノ傾向アリ。

澱粉　澱粉製造所四ヶ所アリ。産額約九千円。酒類三百六十石価三千余円、醤油五十石アルノミ。

信用組合　犢橋信用組合創立明治三十九年ニシテ、組合長海老原仁三郎事務ヲ取扱フ。宇那谷信用購買組合ハ大正四年ノ創立ニシテ組合長能勢市松事務ヲ扱ヒ、小深信用組合ハ蓖島璋之助組合長トシテ事務ヲ取扱フ。又農事改良発達ヲ図ル為ニ村農会ノ組織アリ、毎年農作物ノ品評会ヲ開キ農業改善ノ指導ヲナス。

第八章　交通

道路　本村ハ地勢概子平坦、著シキ坂路ナク村内至ル処車馬ノ往来自在ナリ。タダ霜雨ノ際道路忽チ泥濘。陸軍演習地内ハ実弾射撃中交通遮断セラレ、本村ノ運輸交通上不便少カラス。

東金街道　東金街道ハ中央部ヨリ稍南方ニ東西ニ直行ス。

軽便鉄道　陸軍用軽便鉄道ハ西部ヲ横ギル。

大正五年十月十四日編集
大正七年四月十五日発行
編集人　千葉郡犢橋村犢橋一七九六番地　日暮菊太郎
編集人　千葉郡犢橋村宇那谷七九九番地　中田国蔵
発行人　千葉郡犢橋村横戸一一六五番地　松戸豊吉
発行所　千葉郡犢橋村長沼二八番地　犢橋村役場
印刷者　千葉県千葉郡千葉町千葉六百五十七番地　長谷部勝右衛門
印刷所　千葉県千葉郡千葉町千葉六百五十七番地　有隣堂活版印刷所

古代寺院を建てる「千葉市小食土町　小食土廃寺説明板製作」

村田　六郎太

はじめに

小食土（やさしど）廃寺は、千葉市小食土町六九八番地外に所在する古代の寺院跡で、現在千葉市昭和の森公園内にあたる。今回、この場所に説明板を設置することとなり、その原稿ほかを担当することとなった。

ただ単に、遺跡の説明を行っても、見学者の興味をそそるものになりにくい。このため、勇気をふるって建物の復元を行ってみることとした。

使用するデーターは、少しの誤差で違う結果となる場合が多い。当然、異論もあろう。「こんな考え方もあるのか。」程度に読み下してくだされば幸いである。

一、古代寺院建築の基礎知識

古代寺院は、日本に仏教が伝わったと想定される七世紀から平安時代中葉までのものをいう。基本的に中国や朝鮮の寺院形式を模したもので、日本独自の形式へと変貌する中世寺院とは一線を画す。このため古代寺院を構成する施設はある程度の統一性・類似性がみられる。

まず、本尊を安置する金堂（こんどう）。

僧の研修・学習の場である講堂（こうどう）。

本来は釈迦の遺骨を納め、寺のシンボルとなる塔。

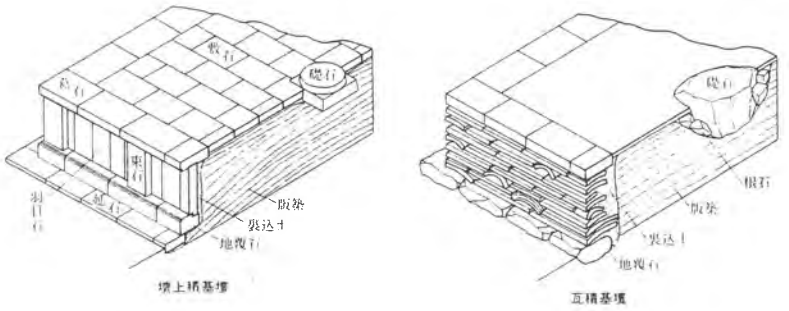
僧の修行の場であり、生活の場となる僧房（そうぼう）。

その他寺の運営に必要な資材や食料を納める倉庫群。

木工や金工などの職人たちの居住・作業施設など。

金堂・講堂・塔などが中心的に配置・区画され、その他の施設は一般に寺院の北側に配置される。寺院の経済力や宗教的特質、立地などから、施設の構成や規模が異なることとなる。これらの平面的な配置は「伽藍」（がらん）と呼ばれる。

金堂や講堂、塔などは基本的に瓦葺で、その他の施設は、瓦・板・檜皮（ひわだ）・茅（かや）などで葺かれ



※ 平城京の築地塀と同じ方法だとすると
最後に板ははずされる。

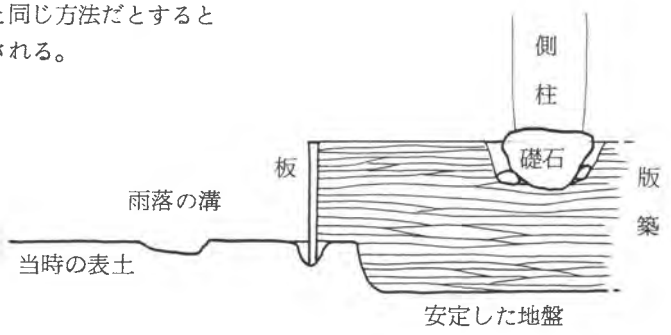


図1　小食土廃寺堀り込み地業の復元と都の寺院の基壇

る。このため、金堂や塔などは建築物そのものの重量が膨大となるため、掘り込み地業といわれる基礎工事が行われる。これは自然堆積層では重量を支えきれないため、安定した地盤まで建物の軒先あたりの範囲で掘り下げ、そこに粘土や砂、赤土などを突き固めていき、高台をつくり、基礎石を据える方法である。この土台全体を基壇（きだん）と呼び、突き固める状況を版築（はんちく）と呼ぶ。基壇の外装などの形状でそれぞれの分類名称が付けられている。

この基壇の上に作られる建築物は、柱・梁（はり）・桁（けた）を基本に作られる。屋根の棟と直角方向の横木を梁、棟と並行の横木を桁と呼ぶ。後世の複雑なホゾ組とは違って、基本的には上からはめ込み、最後に屋根の重さで押え込んで安定させる構造である。棟束（むねつか）などで屋根の重量の多くがかかる梁は、途中で継ぐわけにはいかず、一本木でつくられる。このため、梁は、周辺の森林の状況にもよるが、せいぜい長さ十m（三四尺）程度を限度とする。桁は柱の間で継いでも強度的に問題はない。このため、梁行二間の基本建物（身舎・もや）が築かれ、桁行は延長が可能である。大きな屋根下面積を必要とし、建物の奥行きが欲しい場合は、身舎

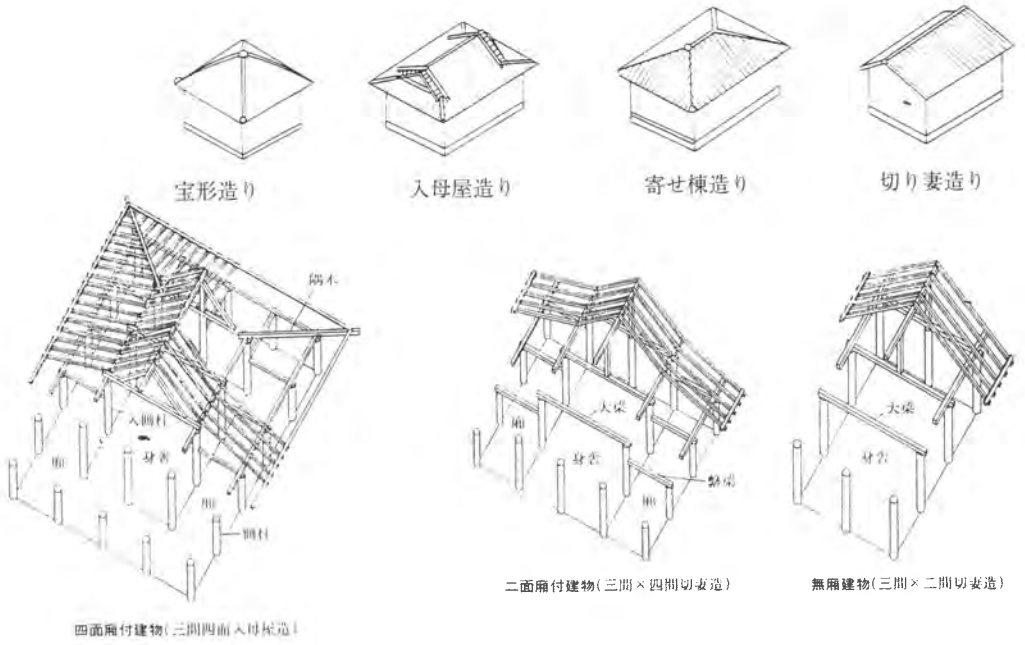


図2　屋根のかたちと建物の構造

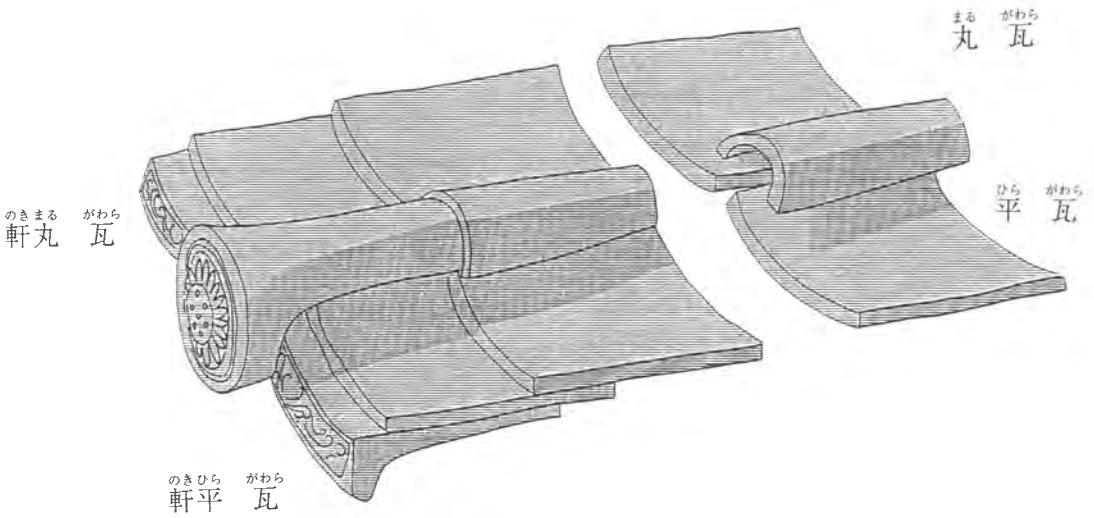


図3　古代の瓦の積み方

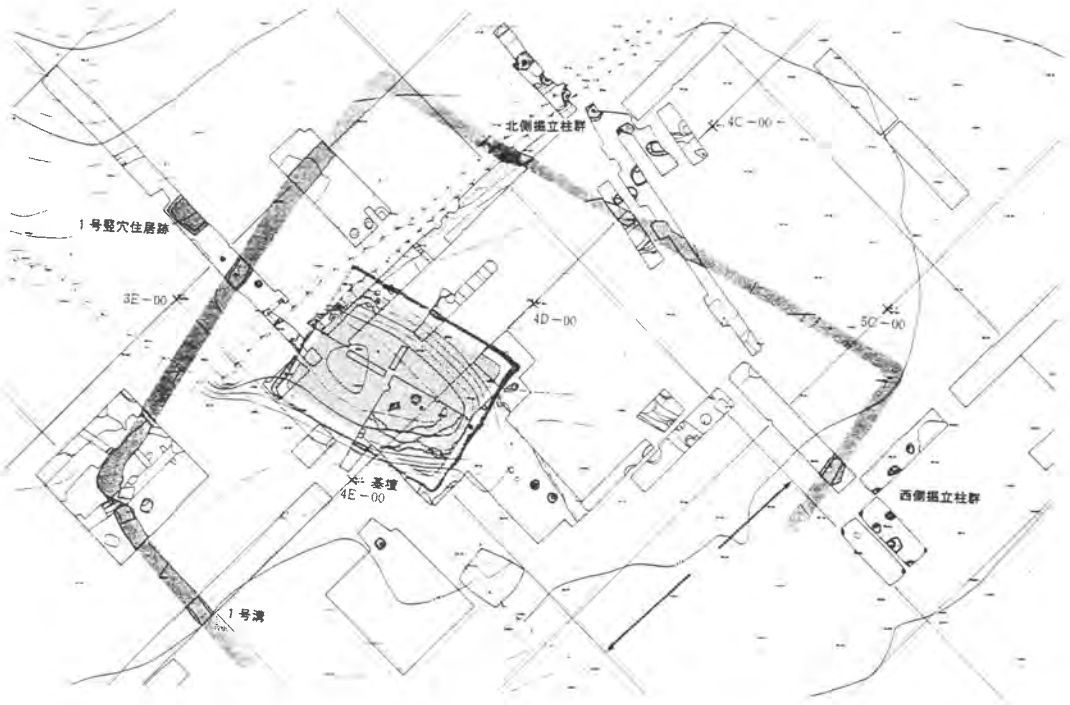


図４　小食土廃寺遺構配置図（部分・「小食土廃寺跡確認調査報告書」より転載）

の柱に繋梁（つなぎばり）をして庇（ひさし）を設ける。

両桁側に庇を設けた場合、二面庇と呼び、屋根は切り妻となる。端の桁・梁すべての方向に庇を設けた場合、四面庇と呼び、屋根は寄せ棟か入母屋となる。身舎の桁の柱間を数えると、建物の構造を単純に表現出来る。身舎の桁行が三間で、周囲に庇を持つ場合、「三間四面」となる。

庇を持つ建物の場合、身舎の柱を入側柱、庇の柱を側柱と呼ぶ。

建物の出入口の位置も、両端の梁側にある場合は妻入り、桁側にある場合は平入りと呼ばれる。寺院の場合は平入りが普通で、妻入りの建物では出雲大社や春日大社が有名で、神社に多い。

瓦は基本的に丸瓦・平瓦を一組とした単位で葺かれる。瓦の製作上、片面に平織りの布目が付くため、総称して「布目瓦」と呼ばれる。軒先を飾る部分の瓦には文様が施され、軒丸・軒平瓦として他の瓦と区別される。

二、小食土廃寺の概要

昭和六〇年に、千葉県教育委員会の古代寺院跡確認調査の一環として、財団法人千葉県文化財センターの手で

発掘調査が行われた。調査はあくまで寺院跡の規模・性格を把握するための確認調査であるため遺跡の全容が明らかになったわけではない。現存する樹木を伐採することなく、トレンチ方式で行われた。

調査の結果、次にあげる事項が明らかになった。

一、金堂は東西一三・六m南北一〇・五mの掘り込み

図5　小食土廃寺基壇全景（東から）
（財団法人　千葉県文化財センター提供）

図6　基壇の版築の状況（財団法人　千葉県文化財センター提供）

地業の上、厚板で区画し、東西一四・八m南北一一・八mの基壇が構築されたことが判明した。基壇の中軸線は東に一三度ふれている。

基壇内には礎石などは検出されなかった。

二、基壇を中心に歪んだ方形の溝跡が区画を形成し、寺域としている。基壇はその西側に位置する。東側は不明である。

三、溝跡の区画外の北と東に掘立柱建物跡が検出されるが、性格は不明である。

四、寺の創建は概ね八世紀後半頃ではないか。

五、瓦の文様から上総国分寺との深い関係が推定される。

以上の事柄の他にも数々の事実が判明したが、ここではこの内容から以下を進めたい。

三、上部構造推定の基礎

宗教施設としての基壇と、倉庫・その他運営施設としての掘立柱建物跡が検出されたわけであるが、一堂の寺院跡として、この基壇は金堂のものと想像できる。

ここではこの基壇の上に築かれた建築物の復元を中心に推理を進めたい。礎石及び礎石を設置した位置が不明なため、推理は基壇の平面配置から屋根の水平面配置を想定し、それから柱配置を計算するといった逆説的なかたちとなる。

金堂の基壇は曲尺になおすと東西五〇尺、南北四〇尺となる。（以下尺で記載したい。）すると、雨落ちの関係から、軒先は基壇の外となることを前提に考えることとなり、屋根の水平面積は少なくとも東西五二尺、南北四二尺となる。

一方、金堂の性格上、東西方向（桁行）の中心に本尊が安置される関係、つまり本尊の正面に柱があることを避ける意味からも、桁行は奇数の柱間となる。

前述の確認調査報告でも五間×四間の建物が推定されている。つまり金堂という性格上、切妻屋根ではなく、三間四面の寄せ棟もしくは入母屋と考えるのが妥当であろう。特に古代寺院の場合入母屋となる。但し、金堂であることから桁行は等間（均等の柱間）とは考えにくい。中心の間を大きくとり、本尊を安置するスペースを広くし、端にゆくほど柱間を小さくする。

南北方向（梁行）では身舎は桁行の二段階目の間尺（柱間の距離）をもち、庇の角の部分は桁行のものと同一の間尺つまり正方形の柱配置となる。これは梁側と桁側の軒の出を同じくするには、軒角からの隅木（軒の角

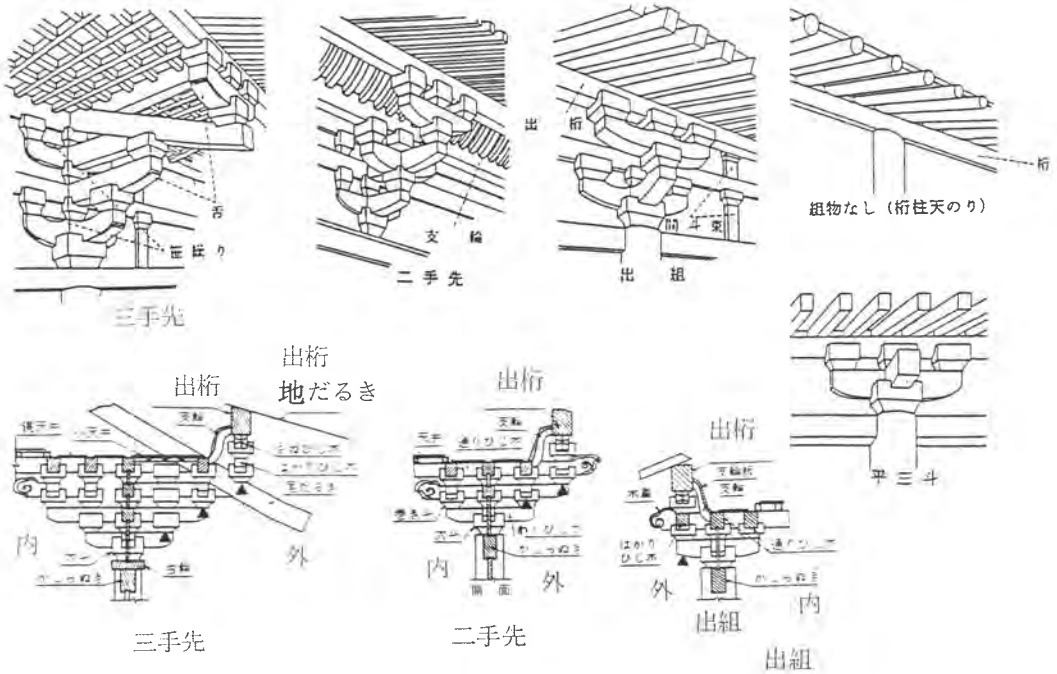


図7　軒先の組物

から屋根の棟に向かう材）を四五度にする必要があるとともに、隅木が柱上を必ずとおって棟に達する構造上の問題である。

四、上部構造の推定

前段で屋根の推定平面積を最低五二尺×四二尺としたが、ここでは余裕をもって五四尺×四四尺としたい。これは雨落ちが基壇から少なくとも二尺ほど離れた方が、基壇の保護の意味からも妥当と考えるからである。

この屋根水平面配置から建物の構造を推定するわけであるが、前段の柱配置の基本と軒の出尺寸法（側柱から軒先までの距離）を考慮しなければならない。

軒の出尺寸法は、軒下の組物の構造と庇の間尺との相関関係によってきまる。桁・出桁（でげた）を支点とした場合の内側と軒の出のバランスの問題となるわけである。現代のようにボルトや組金具が考えられず、釘をふんだんに使うことが出来ない古代では、建物はこのバランスと屋根の加重の上で安定した状況を保ったものと言える。

古代寺院の軒先の構造は概ね図七のような方式がとられる。通常、寺院などの骨組の太い構造であると、垂木

も三寸程度もあり、組物なしで桁から六尺あたりを限度に軒が出せる。しかし、これを越えると軒が垂れたり、波をうったりしてしまう。これを支えるために図七のような組物がみられ、古代人が寺院の軒の出にいかに苦労したかうかがえる。

小食土廃寺の軒の構造は、その建築規模から、軒下の組物を出組（でぐみ）とした。出桁を支点に軒と庇のバランスを均等とすることを目的としたためで、このため、出桁は側柱心から一尺ほど出る。

ここから図八のような柱配置を推定した。

古代の千葉では二手先（ふたてさき）や三手先（注一みてさき）などの複雑な組物であったとは考えにくい。

入側柱の桁・梁から出桁まで仮に七尺とすると、出桁から軒先まで七尺近くとれるわけで、側柱から八尺程度の軒の出は、出組で十分に可能なのである。

仮に三手先であった場合、出桁は側柱から三尺ほど出て、結果として側柱から一二尺の軒の出が可能となるが、全体のバランスではおかしいし、強度的に疑問が残る。

さて、この柱配置から建物の高さを想定してみよう。

金堂であれば平入（桁行を入口とする）が当然であるが、身舎の八・一〇・八尺の柱間部分が入口となろう。すると内法長押（注二うちのりなげし）の下面の位置は、入口扉の姿を考慮すると、中央の間尺と同じくして、基檀面から少なくとも一〇尺は上がる。

長押・頭貫（注三かしらぬき）の縦長を一尺程度と考えると、頭貫の上面は土壁部分を加えて、基檀面から少なくとも一三尺の位置となる。ここから大斗（おおと）・肘木（ひじき）・実肘木（注四さねひじき）を経て出桁

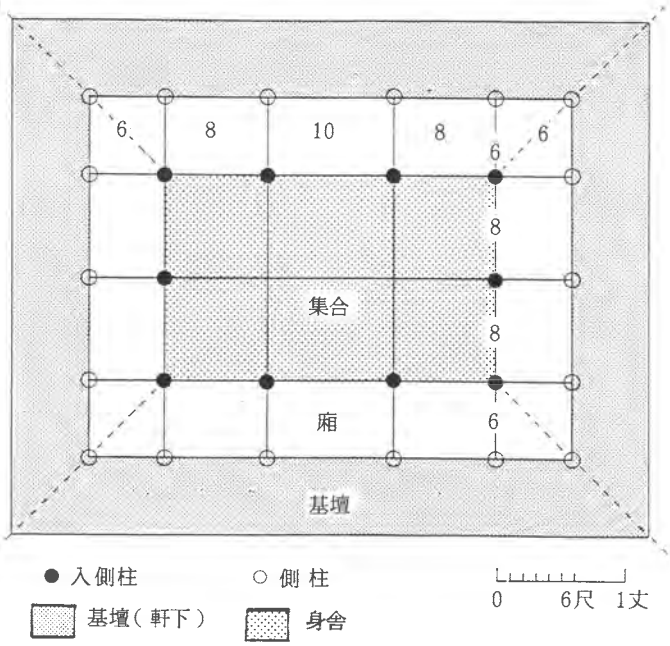


図８　小食土廃寺金堂柱位置想定図

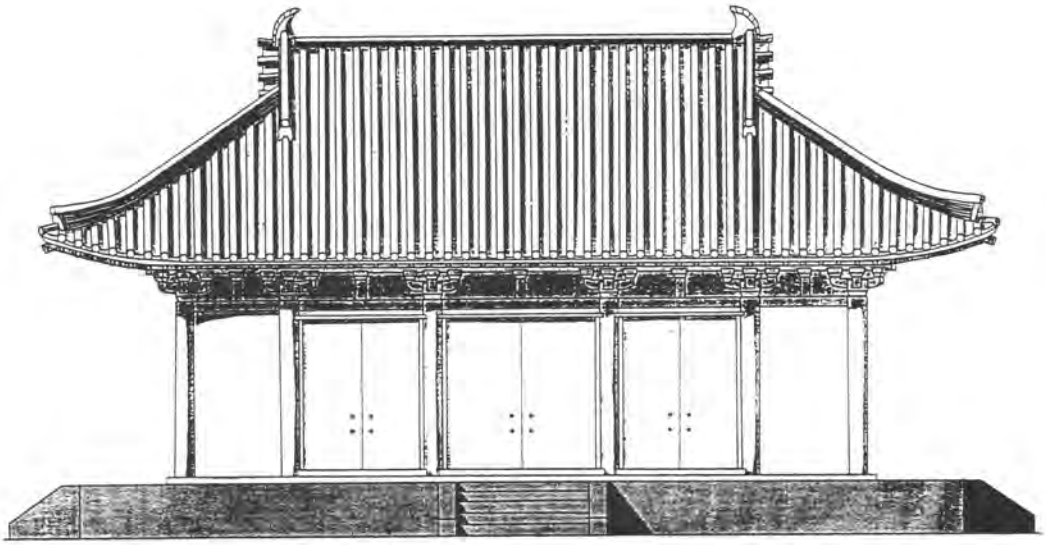


図 9　小食土廃寺跡金堂推定立面図

の位置に達すると、出桁上面は基檀から一五尺以上の位置となる。

この構造に屋根をのせるわけだが、屋根の勾配（こうばい）は現存する寺院からは測れない。それは鎌倉・室町・江戸・明治などの修理などで屋根の構造は大きく変わっているためである。

このため、古代寺院の推定勾配を法隆寺東室復元からとると、身舎部分で七寸勾配（一尺で七寸たちあがる）、廂部分で三寸四分勾配となっている。これを当てはめると、出桁の高さから棟木（むなぎ）上面まで七尺九寸八分となる。これに垂木（たるき）を付け、屋根板をとめて屋根の下面ができる。粘土を貼り、瓦を据え付けていくのであるが、棟は瓦と粘土を交互につんで瓦棟を作るため、完成した屋根の先端は基檀から二五尺ほどにもなる。

これから、屋根の総面積を算出してみよう。

五四尺×四四尺が水平面積とし、屋根勾配が曲面となるが、単純に前述の勾配で計算すると、二、五七八・一二平方尺となり、約七二坪、約二三八㎡となる。出土瓦の大きさと瓦の重なり具合を考慮すると、概ね一㎡あたりの丸・平瓦合わせて約三三枚となる。一枚あたりの平均重量が約三kgで、一㎡が約九九kg、固定用粘土も含め

ると一四〇kgほどになる。

つまり、小食土廃寺の瓦は、少なくとも七九〇〇枚以上が必要で、屋根の総荷重は三三トン以上となる。

これらの計算から、立面図を製作した。

五、今後の問題点

小食土廃寺の瓦を製作したと考えられる窯跡は、南河原坂窯跡群が発掘調査されている。ロストル式平窯（注五）六基と窖窯（注六あながま）五基、半地下式登窯（注七）八基、円形窯（注八）などが検出されている。瓦専用の窯跡としてはロストル式平窯がある。規模にばらつきがあるが、焼成室の容積を二・五㎥とすると、一㎥あたり約二五〇枚、一回の操業で六〇〇枚の瓦が焼かれた計算になる。実際には、焼成室の中を炎が抜け易くするため、四～五〇〇枚程度が焼かれたものと考えられる。焼成段階での失敗も加味すると、三～四〇〇枚が完成したことになる。小食土廃寺の創建時に、七九〇〇枚以上の瓦が必要となるが、一基のロストル式平窯では二〇回以上の操業が必要となる。実際に、窯跡が何回の操業に耐えられるのか不明な点も多く、南河原坂窯跡群以外の窯跡の存在も含めて今後の研究課題と言えよう。

小食土廃寺の出土瓦をみると、上総国分寺創建の段階の瓦や、上総国分寺の瓦を型として陰影した瓦などが出土している。上総国分寺との密接な関係が考えられる。

このことは、古代の技術者集団の支配や地域への定着技術の伝承などのほか、地域支配の構造や規模など多くの情報が秘められている。

今回の建築物の推定復元には、実際の労働人数などは換算していないが、当時の動員力がどの程度であったか興味深い。

奈良の大仏（東大寺）の大仏殿と大仏の建立には、延べで約二百六十万人の人々が携わったと記録されている。当時の人口の約半数にものぼる。また、建築用材を切り出したとされる田上山は、一〇〇〇年以上経った現在でも禿山となっている。寺院を建立することが、いかに大事業であったか、エネルギーにも驚かされるが、このように、いろいろな方面にも影響を遺している。

小食土廃寺の建築に使用した材については、当時の土気周辺の植生復元を待たねばならないが、最も長大な材である梁でみると、長さ一六尺で少なくとも一尺五寸程度の縦断面が必要となろう。現在までに檜の花粉化石は見つかっていない。当時の千葉県内山岳部の原生林から

想定すると、スギ・カヤ・モミ・コメツガなどが考えられる。強度的にはカヤが梁の材として最も可能性が高い。心材でこの程度の太さを取るには、目の高さで二尺五寸以上の直径の木を必要としたであろう。この切り出し、加工など気の遠くなるほどの作業を伴ったことが伺える。

ただ単に田舎の寺院という考え方は改めないといけないと、ただ反省するばかりである。

最後になるが、資料を提供くださった千葉県文化財センターならびに種々ご指導くださった数多くの諸氏に記して謝意を表したい。

注一　図七に示したように、柱の上の大斗から三重のます組をして、出桁を側柱から三段階離す組物。二手先は二重で二段階、出組は一段階側柱から離れる。

注二　出入口の上の部分の高さの位置を内法、長押は柱面に取り付けた化粧板のこと。柱の中心を通した材は貫（ぬき）。

注三　柱の上端の中心を通す貫。

注四　軒の組物のうち、桁を受ける肘木。

注五　薪を燃やす燃焼室の一段上に、瓦など焼き上げる焼成室がある。焼成室の床は炎が均等にめぐるように何本もの溝が付けられている窯。

注六　しっかりした地盤がある場合に、斜面にトンネルを掘ってつくられた窯。

注七　地盤があまりよくない場合に多く、斜面に溝を掘り、これに粘土の天井をアーチ状に付けてつくられた窯。

注八　円い穴を掘り、土器などを焼いたもの。上の構造は今のところ不明。

（千葉市文化財調査協会）

〈表紙写真について〉

大和橋（南）側から千葉神社（北）側に向って本町通りを撮影している。左手三階建の建物は松葉屋旅館で、現在の京葉銀行本町支店の位置にあたる。また、押してあるスタンプは「紀念　明治四十四年五月　千葉県共進会」と読めるが、千葉県共進会とは同年五月五日のルネッサンス式二代目千葉県庁舎落成を記念して開催されたもので、新庁舎、千葉師範学校男子部、同女子部の旧校舎を利用して県内の教育品、警察品、統計図表、俵米、清酒、醤油、菓子、澱粉、蔬菜類、蚕繭、佃煮、干貝、干魚、塩辛、生糸、真綿、牛酪他を陳列し、その成績を審査表彰するというものであった。

編集後記

大正一〇年一月一日全国で七六番目、県庁所在地で後ろから四番目に市制施行した千葉市は、平成三年その七〇周年を祝賀し、本年（平成四年）四月一日には全国で一二番目の政令指定都市に移行します。大正一〇年の人口三万三八八七人、面積一五、二二㎢であったが、平成三年一二月には人口八三万四八四二人、面積二七二、五四㎢と飛躍的な伸びを示しました。

こうした時に市の原点とも言える大正一〇年を見つめ直すことは意味あることと思います。幸いにして「千葉案内・千葉市街実測図」「千葉市勢一覧」という史料が残されており、当時の様子を詳細に知ることが出来ます。

「明治四〇年千葉町中心街家並概念図」を作成された北島隆氏は、明治三七年千葉町通町でお生まれになった生粋の千葉っ子です。明治の面影をほとんど残すことなく急激な変貌を遂げた中心街ですが、明治の姿をなんとか残そうとご努力された結果が当図に結晶しました。

寒川沖の漁法についてまとめられた長谷川進氏、小食土廃寺の建物復元についてまとめられた村田六郎太氏には、それぞれご労作を収載させていただきましたこと心より感謝いたします。

（A）

［監修］
千葉市史編纂委員会
川村　優・井上準之助

千葉いまむかし第五号
平成四年三月三十一日発行
編集　千葉市史編纂委員会
発行　千葉市教育委員会
（千葉市立郷土博物館
市史編纂担当）
印刷　こくぼ印刷株式会社